鏡野町埋蔵文化財発掘調査報告　第４集

葡萄田頭遺跡
槙之木峪古墳

津山総合流通センター造成に伴う埋蔵文化財発掘調査

1999

岡山県苫田郡鏡野町教育委員会

鏡野町埋蔵文化財発掘調査報告　第４集

葡萄田頭遺跡
槙之木峪古墳

津山総合流通センター造成に伴う埋蔵文化財発掘調査

１９９９

岡山県苫田郡鏡野町教育委員会

序

恵まれた自然と香々美川の清流に形成された沖積平野により、古くから繁栄した水と花と心の町鏡野は県北有数の遺跡地帯であり、遺跡の保存と調和のとれた開発は町政の大きな課題でもあります。

町民の埋蔵文化財に対する認識は古く、1901年、光井清三郎氏による「陶棺埋没について」と題する一文が『考古界』誌上に発表された頃に始まります。埋蔵文化財の保護に対する熱意は、光井氏から中島幹氏、『吉備考古』同人の中島政雄氏らに引き継がれ、1945年以降の御船恭平氏、安藤武夫氏、中島健爾氏、定包弘吉氏の活躍は記憶に新しいものであります。

1951年、当時新進気鋭の考古学者であった近藤義郎氏が佐良山古墳群の発掘調査を行い後期群集墳の学術研究の途を開いた年、これに刺激されて旧郷村では村長西村哲平氏を会長とする郷村郷土研究会が発足し、1954年には郷村内の125基の古墳と17箇所の遺跡の分布が確認されました。1953年には栃原町で月の輪古墳の発掘調査が行われ、町内からも多くの有志がこれに参加したのでした。

鏡野町では1956年に鏡野町総合調査が企画されました。考古学を担当した近藤氏は1957年に土居天王山古墳と伊勢領大塚古墳の調査を行い、翌年には左衛門山６号墳が発掘調査されました。これと併行して進められたのが鏡野町学校教育研究所による『鏡野の歴史』と題した社会科教育の副読本作りのための調査でした。これは郷土史料を学校教育で活用しようとする画期的な企画でした。この調査も1959年には『鏡野の歴史』史料集(1)として纏められ、1961年には坂手一郎氏を中心に執筆が進められ『鏡野の歴史』が完成したのです。また同じ年、近藤氏の指導により待望の赤峪古墳の本格的発掘調査が中学生や町民参加のもとに行われ、この頃の中学生の貴重な体験が現在の鏡野町の文化財保護行政を支える大きな力となっています。

1960年以降の急速な経済発展により全国各地で埋蔵文化財の発掘調査が行われ、数多の新発見がもたらされました。岡山県北部においても中国縦貫自動車道が計画され、これに伴う発掘調査により美作国府、久米郡衙と推定される宮尾遺跡、勝間田遺跡等の貴重な遺跡の発見が相次ぎました。

鏡野町では、1971年の鏡野中学統合校舎建設に伴う竹田遺跡の調査、1974年の広域農道に伴う瀬戸遺跡の調査、1978年の広域農道に伴う竹田縄文遺跡の発掘調査が行われ、当時としては日本最古の住居跡が発見され話題を呼びました。この発見により遺跡保存の声が高まり、歴史資料館建設と竹田遺跡の一部保存が実現したのであります。

この度刊行の運びとなりました葡萄田頭遺跡、槙之木峪古墳の調査報告書は、津山総合流通センターの造成に伴い、平成７年から平成８年にかけて鏡野町教育委員会により発掘調査されたものであります。これらの発掘調査と報告書の刊行の礎は近年俄かに培われてきたものではありません。先述のような歴史を振り返ってみますと先人の努力の所産であることが明らかとなります。我々は祖先より引き継いだ歴史と文化を後世に伝える大きな義務をもち、先人にならい、これに応えて行く努力を続けなくてはなりません。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行までご理解とご尽力賜わりました津山市土地開発公社と調査の実施に際してご協力頂きました地元の皆様に厚く御礼申し上げます。この報告書が美作地方の原始・古代の歴史の解明にいささかでも役立てば望外の喜びであります。

平成11年３月31日

鏡野町教育委員会

教育長職務代理者　佐々木茂宣

例　言

1．本書は津山総合流通センター造成に伴う葡萄田頭遺跡、槙之木峪古墳の発掘調査報告書である。

2．鏡野町教育委員会は津山総合流通センター造成事業で二箇所の遺跡調査を行った。本書はこれを合本して報告したものである。

3．発掘調査の経費と整理・報告の経費はすべて津山市土地開発公社の負担によるものである。

4．本書は『鏡野町埋蔵文化財調査報告』第4集とする。第1集は土居徹『美作鏡野町土居妙見山古墳』1969、第2集は下沢公明『瀬戸遺跡発掘調査報告書』1974、第3集は近藤義郎・今井堯ほか『竹田墳墓群』1984である。

5．発掘調査と本書の執筆、編集、写真撮影は鏡野町教育委員会社会教育課立石盛詞が担当した。

6．本書に用いたレベル高は海抜高である。また、方位は平面直角座標系第Ⅴ系の北である。

7．本書で用いた遺物実測図の縮尺は、土器1/4、石器1/2、鉄器1/2を原則とした。これと異なるものについてはその都度表示した。

8．本書で用いた土器実測図のうち中心線が一点破線になっているものは反転実測である。

9．本書で用いた遺構図の縮尺は、住居跡1/80、小竪穴1/80、建物1/80、溝1/80、柵列1/80、出土状況図1/20、土壙1/40を原則とした。これと異なるものについてはその都度表示した。

10．本書に用いた第1図の「葡萄田頭遺跡周辺の遺跡分布図」は建設省国土地理院発行二万五千分の一（津山西部平成4年3月1日発行1刷）を使用した。

11．本書において略号の使用は出来るだけ避けたが、編集の都合で使用する略号は次の通りである。
SB：住居跡　SH：建物　SM：小竪穴状遺構　ST：段状遺構　SD：溝　SA：柵列
SK：土壙　P：柱穴　CP：中央ピット

12．本書の作成に必要な土器復原・図面整理・トレースに当たっては杉本栄子・杉本ひろみ・成宗和子・山本真諸氏の協力を得た。

13．出土遺物・図面・写真は鏡野町歴史資料館（鏡野町竹田660番地）に保管している。

目　次

序
例　言
第Ⅰ章　調査に至る経過と組織 …… 1
　1　調査に至る経過 …… 1
　2　調査の組織 …… 1
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境 …… 2
　1　遺跡の立地 …… 2
　2　歴史的環境 …… 2
第Ⅲ章　葡萄田頭遺跡の遺構と遺物 …… 8
　1　グリッドの設定と呼称について …… 8
　2　A区の遺構と遺物 …… 8
　　a　住居跡 …… 8
　　b　小竪穴状遺構 …… 29
　　c　掘立柱建物跡 …… 30
　　d　段状遺構 …… 32
　　e　溝 …… 37
　　f　柵列・土壙・柱穴 …… 40
　3　B区の遺構と遺物 …… 54
　　a　土壙墓 …… 54
第Ⅳ章　槙之木峪古墳の遺構と遺物 …… 64
　1　槙之木峪古墳の立地 …… 64
　　a　遺構と遺物 …… 65
第Ⅴ章　まとめ …… 68

挿 図 目 次

第１図 葡萄田頭遺跡周辺の遺跡分布図…… 3
第２図 遺跡現況図…… 4
第３図 グリッド分割図…… 8
第４図 第１・２号住居跡…… 9
第５図 第１・２号住居跡出土遺物…… 9
第６図 第３号住居跡…… 10
第７図 第３号住居跡出土遺物…… 11
第８図 第４号住居跡…… 12
第９図 第４号住居跡出土遺物…… 13
第10図 第５号住居跡…… 13
第11図 第５号住居跡土層断面図…… 14
第12図 第５号住居跡出土遺物…… 14
第13図 第６号住居跡…… 15
第14図 第６号住居跡出土遺物１…… 15
第15図 第６号住居跡出土遺物２…… 16
第16図 第７号住居跡…… 17
第17図 第７号住居跡出土遺物…… 17
第18図 第８・９号住居跡…… 18
第19図 第８・９号住居跡土層断面図…… 19
第20図 第８号住居跡出土遺物１…… 19
第21図 第８号住居跡出土遺物２…… 20
第22図 第９号住居跡出土遺物…… 20
第23図 第10号住居跡…… 21
第24図 第10号住居跡土層断面図…… 22
第25図 第10号住居跡出土遺物１…… 22
第26図 第10号住居跡出土遺物２…… 23
第27図 第10号住居跡関連溝出土遺物…… 23
第28図 第11・12号住居跡…… 25
第29図 第12号住居跡断面図…… 26
第30図 第11・12号住居跡出土遺物…… 26
第31図 第13号住居跡…… 27
第32図 第13号住居跡出土遺物…… 27
第33図 第14号住居跡…… 28
第34図 第14号住居跡出土遺物…… 28
第35図 第１号小竪穴状遺構…… 29
第36図 第２号小竪穴状遺構…… 29
第37図 第１・２号小竪穴状遺構出土遺物…… 29
第38図 第３号小竪穴状遺構…… 29
第39図 第１号掘立柱建物跡…… 30
第40図 第２号掘立柱建物跡断面図…… 30
第41図 第３号掘立柱建物跡Ｐ７出土遺物…… 30
第42図 第３号掘立柱建物跡…… 31
第43図 第４号掘立柱建物跡…… 31
第44図 第５号掘立柱建物跡…… 32
第45図 第１号段状遺構…… 32
第46図 第２号段状遺構…… 32
第47図 第３号段状遺構…… 32
第48図 第４・５号段状遺構…… 33
第49図 第４号段状遺構出土遺物…… 33
第50図 第５号段状遺構出土遺物…… 33
第51図 第６号段状遺構…… 34
第52図 第７号段状遺構…… 34
第53図 第７号段状遺構出土遺物…… 34
第54図 第８号段状遺構…… 34
第55図 第９号段状遺構…… 34
第56図 第９号段状遺構出土遺物…… 34
第57図 第10・11号段状遺構…… 35
第58図 第11号段状遺構出土遺物…… 35
第59図 第12・13号段状遺構…… 35
第60図 第14号段状遺構…… 35
第61図 第14号段状遺構出土遺物…… 36
第62図 第15号段状遺構…… 36
第63図 第17号段状遺構出土遺物…… 36
第64図 第16・17号段状遺構…… 36
第65図 第１号溝…… 37
第66図 第１号溝遺物出土状況図…… 37
第67図 第２号溝…… 37
第68図 第３号溝…… 38
第69図 第４号溝…… 39
第70図 第６号溝…… 39
第71図 第７号溝…… 39
第72図 第１号溝出土遺物…… 39

第73図 第１・３・４号溝出土遺物…… 40
第74図 柵列１…… 41
第75図 柵列２…… 42
第76図 柵列３…… 43
第77図 柵列土層断面図１…… 44
第78図 柵列土層断面図２…… 45
第79図 A－１・２・３・４・５号土壙…… 48
第80図 A－６・７・８・９・10・11・
12号土壙…… 49
第81図 A－13・14・15・16・17号土壙…… 50
第82図 A－１・３・４号土壙出土遺物…… 50
第83図 A－５・６・８・10・14号土壙
出土遺物…… 51
第84図 B－１・２・３・４・５号土壙墓… 54
第85図 B－６・７・８・９・10・11・
12号土壙墓…… 55
第86図 B－13・14・15・16・17・18・
19号土壙墓…… 56
第87図 B－20・21・22・23・24・25・
26・27・28号土壙墓…… 57
第88図 B－29・30・31・32・33・34・
35号土壙墓…… 58
第89図 B－36・37・38・39・40・41・
42・43号土壙墓…… 59
第90図 B－44・45・46号土壙墓…… 60
第91図 B－２・12・20・30号土壙墓
出土遺物…… 61
第92図 槙之木峪古墳調査前墳丘測量図…… 64
第93図 槙之木峪古墳墳丘測量図…… 65
第94図 槙之木峪古墳墳丘土層断面図…… 66
第95図 槙之木峪古墳遺物出土状況図…… 67
第96図 槙之木峪古墳出土遺物…… 67
付図 葡萄田頭遺跡全測図

表目次

第１表 A区柵列土壙計測一覧表…… 46
第２表 A区土壙計測一覧表…… 47
第３表 A区柱穴計測一覧表…… 53
第４表 B区土壙墓計測一覧表…… 60

図版目次

図版１ 第１・２号住居跡
第１号住居跡中央ピット土器出土状態
第３号住居跡
第４号住居跡
第５号住居跡
第６号住居跡
第６号住居跡鉄斧出土状態
第７号住居跡
図版２ 第８号住居跡
第10号住居跡
第11号住居跡
第11・12号住居跡
第13号住居跡
第14号住居跡
第２号小竪穴状遺構
第３号小竪穴状遺構
図版３ 第１号掘立柱建物跡
第３号掘立柱建物跡
第４号掘立柱建物跡
第５号掘立柱建物跡
第４号段状遺構
第５号段状遺構

図版３　第７号段状遺構
第８号段状遺構
図版４　第10・11号段状遺構
第12・13号段状遺構
第14号段状遺構
第17号段状遺構石包丁出土状態
第１号溝
第１号溝遺物出土状態
柵列
Ａ－１号土壙遺物出土状態
図版５　Ａ－５号土壙遺物出土状態
Ｂ－２・３号土壙墓
Ｂ－４号土壙墓
Ｂ-10・12号土壙墓
Ｂ-12号土壙墓土器棺
Ｂ-13・14・15・16号土壙墓
Ｂ-18・19号土壙墓
Ｂ-28・29号土壙墓
図版６　柵列
Ｂ-11・16・18・20・21号土壙墓
図版７　槙之木峪古墳
槙之木峪古墳遺物出土状態
図版８　第５号住居跡出土高坏
第７号住居跡出土注口土器
第１号溝出土甕
第１号溝出土甕
Ｂ－２号土壙墓土器棺
Ｂ-12号土壙墓土器棺
Ａ－１号土壙出土壺
Ａ－１号土壙出土坏身
Ａ－１号土壙出土坏身
槙之木峪古墳出土坏蓋
槙之木峪古墳出土坏身
槙之木峪古墳出土坏蓋
槙之木峪古墳出土坏身
槙之木峪古墳出土坏蓋
槙之木峪古墳出土坏身
槙之木峪古墳出土坏蓋
槙之木峪古墳出土坏身
図版９　葡萄田頭遺跡出土石包丁
葡萄田頭遺跡出土石鏃
図版10　葡萄田頭遺跡出土石斧
葡萄田頭遺跡出土石斧・磨石
図版11　第６号住居跡出土石屑
葡萄田頭遺跡出土鉄器・砥石

第Ⅰ章 調査に至る経過と調査の組織

1 調査に至る経過

津山総合流通センター予定地の93%は津山市を主体に立地する。しかし、その一部が鏡野町にも及んでいるため、津山市土地開発公社は平成5年2月18日付けで試掘調査依頼書（津土開公第54号）を鏡野町教育委員会に提出した。鏡野町教育委員会は津山市土地開発公社、津山市教育委員会の二者と具体的な埋蔵文化財の取り扱いを協議し、それぞれの町域・市域に所在する造成予定地の埋蔵文化財の有無に関する試掘調査をそれぞれが独自に実施して、遺跡の範囲を確定のうえで発掘調査を行うことにした。平成7年3月には津山総合流通センターの工期が確定し、同年10月から12月にかけて試掘調査を行うことが決まった。この試掘により槙之木峪古墳と葡萄田頭遺跡が発見され、鏡野町教育委員会は、文化財保護法第57条の6-第1項に基づき遺跡発見の通知（鏡野教発第1418・1419号）を行い、同法第98条の2-第1項に基づき埋蔵文化財発掘調査の通知（鏡野教発第1420・1427号、文化庁番号7委保記第5-8304・5-8305号）の手続きを執った。これにより翌年1月から発掘調査を開始した。

2 調査の組織

平成7年度試掘・発掘

鏡野町教育委員会	教育長	池上興一
社会教育課	課長	佐々木茂宣
	課長補佐	本山繁基
	主任（発掘担当）	立石盛詞
	主任	金平憲明
	社会教育指導員	水島義浩
	教育相談員	和仁英毅
		池田祐子

平成8年度発掘

鏡野町教育委員会	教育長	池上興一
社会教育課	課長	佐々木茂宣
	課長補佐	本山繁基
	主任（発掘担当）	立石盛詞
	主任	金平憲明
	社会教育指導員	水島義浩
	教育相談員	和仁英毅
		池田祐子
		豊田寿恵

平成9年度整理（7月～12月）

鏡野町教育委員会	教育長	池上興一
	次長	佐々木茂宣
社会教育課	課長（兼務）	同上
	課長補佐	本山繁基
	主任（整理担当）	立石盛詞
	主任	石原靖之
	社会教育指導員	水島義浩
	教育相談員	和仁英毅
		池田祐子
		豊田寿恵

平成10年度整理・報告

鏡野町教育委員会	教育長(4月～12月)	池上興一
	教育長職務代理者	佐々木茂宣
	次長	同上
社会教育課	課長（兼務）	同上
	課長補佐	本山繁基
	主任（整理担当）	立石盛詞
	主任	石原靖之
	社会教育指導員	定久義久
		池田祐子
		豊田寿恵

第II章 遺跡の立地と環境

津山総合流通センター建設事業工事施工に関連して、鏡野町教育委員会が実施した埋蔵文化財の発掘調査は葡萄田頭遺跡と槙之木峪古墳である。遺跡の所在地は葡萄田頭遺跡が鏡野町布原48-1番地外、槙之木峪古墳が鏡野町沖392番地である。

1 遺跡の立地

葡萄田頭遺跡と槙之木峪古墳は、吉井川の支流である香々美川に面した標高170㍍ほどの丘陵上に位置し、この丘陵は新生代第三紀層により形成されている。

津山地区の三紀層は、植物化石を産する植月層と塩分の薄い汽水域に生棲する貝化石を含む吉野層、これに泥岩と砂岩の互層からなる海成層の高倉層に大別され、これらはまとめて勝田層群と呼ばれている。なかでも鏡野地区の地質構造は地表から300㍍ほどが典型的な高倉層に覆われ、水の浸透性の悪い泥岩のために地滑り地帯となっている。1956年に県指定天然記念物となった「大野の整合」はこの高倉層の露呈した断崖である。この整合は上から5㍍ほどが第四紀層で縄文時代早期の竹田遺跡が検出され、下の25㍍ほどが泥岩と砂岩が10㌢～50㌢の厚さで交互に堆積する典型的な高倉層を形成している。

また、芳野地区（旧芳野村）に残る成段（ナルダン）の地名からも分かるように香々美川により形成された河岸段丘が存在する。この河岸段丘は第四紀になり形成されたもので、現在は圃場整備で分かり難くなっているが、藤屋・新町・香下・公保田・沢田・沖・古川・布原の8地区に及び総長6㌔にわたり形成されている。この他に吉井川や香々美川、上森川、山人川といった大小の河川により形成された鏡野町の沖積平野には自然堤防が存在し、遺跡のほとんどがこれらの第三紀層からなる丘陵や第四紀に形成された河岸段丘、自然堤防上に存在する。

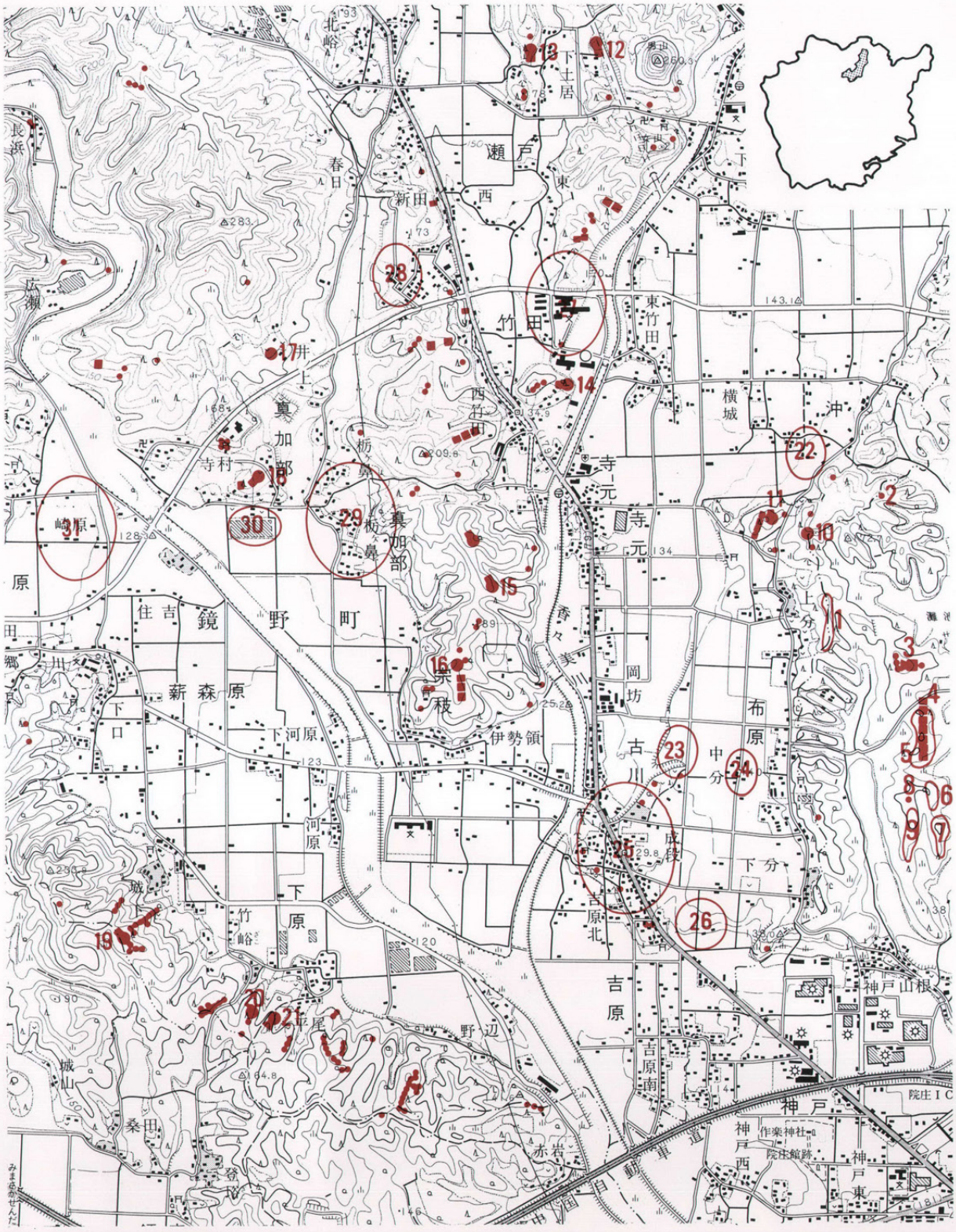
2 歴史的環境

a 先土器時代

鏡野町においては未だ先土器時代の遺跡は発見されていない。沖積平野や河岸段丘部分では河川の働きにより先土器時代の文化層が流され遺跡発見の望みはないが、第四紀層の厚く堆積した丘陵地帯やクロボクといわれる火山灰が厚く堆積する越畑地区の山麓の緩やかな斜面部では遺跡の存在が予測できる。

b 縄文時代

鏡野町最古の遺跡は今から一万年前のBC8000年頃の遺跡とされる竹田遺跡である。この遺跡からは粗大楕円押型文土器と呼ばれる縄文時代早期中葉の土器が発見されるとともに、住居跡と考えられる小柱穴群が検出されている。この他に同時期の遺跡としては、古川の宝性寺境内に所在する成段遺跡、旧鏡野農協倉庫裏の酒居敷遺跡(小田公民館東隣り)、布原の九番丁場遺跡がある。これらの遺跡から出土した縄文土器は邑久郡牛窓町黄島の黄島貝塚の出土土器を指標とする黄島式土器に併行するものである。他の縄文時代の遺跡としては鏡野町で初めて縄文土器が表面採集された沢田の隠峪東谷遺跡と山城公儀屋敷遺跡が確認されているにすぎない。これらの遺跡はいずれも縄文時代後期と考えられ、公儀屋敷出土土器は縄文時代後期初頭の中津II式土器に併行するもの、隠峪東谷遺跡出土土器は中津式ないしは福田KII式土器に併行するものである。



1：葡萄田頭遺跡　2：槙之木峪古墳　3：田邑丸山古墳群　4：有本古墳群　5：有本遺跡　6：有元遺跡　7：荒神峪遺跡　8：男戸嶋古墳　9：男戸嶋遺跡　10：鵯鳥1号墳　11：沖茶臼山古墳　12：土居天王山古墳　13：土居妙見山古墳　14：竹田妙見山古墳　15：古川3号墳　16：伊勢領大塚古墳　17：井上大塚古墳　18：真加部9号墳　19：左衛門山6号墳　20：大山古墳　21：観音山古墳　22：沖そね遺跡　23：大開遺跡　24：四番丁場遺跡　25：成段遺跡　26：九番丁場遺跡　27：竹田遺跡　28：神宿遺跡　29：栃ヶ鼻遺跡　30：薬師前遺跡　31：二反田B遺跡

第1図　葡萄田頭遺跡周辺の遺跡分布図（1/25,000）

第２図　遺跡現況図

c　弥生時代

鏡野町には明確に弥生時代前期と断定される遺跡は発見されていない。ただし、前期の土器は沢田遺跡で一片だけ出土している。美作でこの時期の土器が発見されているのは津山市天神原遺跡、同高橋谷遺跡、同京免遺跡と沢田遺跡にすぎない。これらの遺跡から出土した甕は断面三角形の貼付け口縁帯と口縁部が小さく外折するタイプに分かれ、邑久郡邑久町尾張に所在する門田遺跡より出土した前期後半の門田式土器に併行するものと考えられる。

次に位置づけられるのが大開遺跡の土壙から出土した土器である。この土器は中期初頭とされる高田式土器に併行する土器である。中期中葉から後葉にかけては遺跡の数は増加するようである。中期中葉の菰池式土器に併行する土器を出土する遺跡としては竹田遺跡、後葉の前山II式土器に併行する土器を出土するのが新町遺跡である。この他に小座の旧鶴喜（剣）中学校跡地の鶴喜遺跡も前山II式併行の土器や石器が多量に出土しているとされているが実態は不明である。

後期の遺跡とされるものは急増する。隠峪東谷遺跡の縄文土器を発見した御船恭平氏の実家の所在する布原の四番丁場（御船）遺跡、古川の極楽遺跡がそれとされ、発掘調査を経たものとしては竹田遺跡、瀬戸遺跡、布原の九番丁場遺跡がある。

d　古墳時代

古墳時代の集落跡は大開遺跡が知られているにすぎない。この遺跡は弥生時代中期初頭から始まり、古墳時代初頭、古墳時代中期、奈良時代と断続的に営まれた複合遺跡である。当該期の遺構としては住居跡が発見されている。現状では鏡野町内の古墳時代の遺跡として把握されているもののほとんどが古墳である。集落遺跡については今後の発掘調査による資料の増加に期待したい。

集落遺跡と異なりある程度内容の分かっているのが古墳である。鏡野町の古墳としては前方後円墳を挙げなければならない。現在最古に位置付けられる前方後円墳は墳長43㍍の観音山古墳である。この古墳は1909年に村人により発掘されている。この時、竪穴式石槨の中から舶載の三角縁四神四獣鏡、平縁半円方形帯神獣画像鏡、三角縁四獣鏡が各１枚と短剣、定角式・柳葉式鉄鏃が発見された。鏡野町史編纂に伴う近年の測量調査では後方部がバチ形に開く最古式の前方後円墳であることが確認されている。この次に位置づけられるのが赤峪古墳である。墳長45㍍の前方後円墳で後円部の埋葬施設は礫床割竹形木棺と考えられている。出土品は舶載の龍虎鏡１枚と短冊形鉄斧１点、手斧１点、刀子１点、勾玉１点、ガラス小玉若干と二重口縁壷、土師器各１点である。また、後円部でも簡略化された竪穴式石槨が検出されている。これら二つの前方後円墳は何れも四世紀前半に位置付けられるものである。

これに続くのが竹田妙見山古墳と土居妙見山古墳、古川３号墳である。竹田妙見山古墳は墳長36㍍を測る前方後円墳であるが後世の乱掘のため墳形が著しく変形しており、墳丘を考慮した編年的位置づけが不明となっている。出土品は二箇所に円孔のある鏡片で長宜子孫内行花文鏡の外区に酷似するとの指摘がある。この他にガラス小玉22点と数量は不明だが鉄器が出土したらしい。これらは何れも礫の上から出土したとされていることから、埋葬施設は礫床木棺と推測される。

土居妙見山古墳は竹田妙見山古墳から北西に1.4㌔の要田川と山人川に挟まれた標高168㍍の丘陵上に位置する。墳長25㍍を測る小型の前方後円墳で葺石が確認されている。後円部は乱掘され東西二つの粘土槨があることが分かっている。このうち西槨からは仿製内行花文鏡２枚、鉄剣２点と土師器が発見された。古川３号墳は先述の竹田妙見山古墳と土居妙見山古墳に前後する時期に造営されたと推

測される古墳である。この古墳は伊勢領山の標高186㍍の尾根上に位置する墳長30㍍の前方後円墳で葺石が確認されている。これ以降は香々美川水系においてしばらくの間、前方後円墳の造営は停止される。

再び前方後円墳が築造されるようになるのは五世紀後半になってからである。この候補に挙げられるのが真加部９号墳と沖茶臼山古墳である。真加部９号墳は「へいのやま古墳」とも言われ、真加部地区の氏神様である八幡神社の御旅所である。このために後円部が著しく削平され、これまで方墳と考えられてきた。しかし墳丘の北西半分は比較的状態が良く、墳長24㍍の前方後円墳であることが明らかになった。出土品がないため位置づけが難しいが、五世紀後半の前方後円墳と考えたい。そして、これに続くのが墳長31㍍、周溝を合わせた大きさが48㍍を測る帆立貝式の沖茶臼山古墳である。

六世紀になって築かれるのは墳長21㍍の左衛門山６号墳である。この古墳は鏡野町総合調査の考古学を担当した歴史第一班により発掘調査された。主体部より須恵器６点、土師器１点、鉄鏃、鉇が出土したとされている。埋葬施設は木棺直葬と思われる。その後しばらく間をおいて築かれたのが土居天王山古墳である。墳長27㍍で片袖式横穴式石室をもつ。1926年頃の乱掘と1957年の発掘調査で須恵器18点、土師器4点、鉄刀、鉄鏃が出土したといわれているが、遺物が散逸して詳しい古墳の時期は不明である。残されている写真等からTK43型式に該当する六世紀後葉の古墳と思われ、香々美川水系最後の前方後円墳であるとともに、最初の横穴式石室墳でもある。

上記の前方後円墳のほか前方後円（方）墳と言われているものに、寺元１号墳、笠松（１号）古墳、通り谷１号墳、淵長５号墳、黒田７号墳、道上古墳、鍋峪尻古墳がある。通り谷１号墳、淵長５号墳、黒田７号墳は方墳が二つ連なったものと思うが確認できていない。また道上古墳、鍋峪尻古墳は既に消滅している。道上古墳について『岡山県遺跡地図』第五分冊は村誌に前方後円墳との記載ありとするが『郷の村誌』にそのような記述はない。

前方後円墳のほかに鏡野町には通り谷古墳群、黒田古墳群、淵長古墳群に代表される多くの方墳群がある。この方墳群については最近の発掘調査で内容が明らかになりつつある。沖395番地に所在する東花穴古墳群は方墳６基からなる古墳群でどれも四世紀の所産と考えられている。この古墳群は14.5×11.2㍍、高さ1.4㍍と15.2×12.2㍍、高さ2.0㍍の２基の二段築成の方墳と10×9.2㍍、高さ1.5㍍を測る一段築成の古墳１基、ほとんど盛り土による墳丘をもたない6.3×5.3㍍、7.5㍍四方、５㍍四方の墳丘墓の系統を引く方墳３基から構成されている。この古墳群は短期間に形成されたもので、その構成内容から吉井川上流域と香々美川流域の前期古墳の階層構成に前方後円墳、円墳、二段築成の方墳、一段築成の方墳、盛り土による墳丘をもたない方墳の五段階があったことが推測できる。

円墳については、かつて前方後円墳と考えられていた径28.4㍍・高さ５㍍の大山古墳や径38㍍・高さ6㍍の伊勢領大塚古墳、径23㍍・高さ2.5㍍を測る鵯鳥（ヒヨドリ）１号墳が鏡野町を代表する大型円墳である。この中でおおよその築造時期が推定できるのは伊勢領大塚古墳である。この古墳は1853年（嘉永６）に乱掘された際、鏡・刀・須恵器・人骨が出土し、1945年以前は棺内に朱が厚く堆積していたという。埋葬施設は簡略化された箱式石棺で現在一部が露呈している。光井清三郎氏の祝部焼土器が出土したとする資料紹介が正しければ、五世紀前葉の最古式の須恵器ないしは陶質土器を伴う古墳であり、伊勢領山方墳群の形成時期解明の手掛かりとなろう。この他に後期の首長墳と思われる円墳に高山大塚古墳、新町の法明寺古墳と真加部の井上大塚古墳がある。

また、大型円墳だけではなく初期群集墳と言われる初期須恵器を副葬する円墳の存在も明らかにな

っている。香々美1144-1番地に所在する経塚古墳は瓦の原料とする粘土採取のために墳丘の四分の三が失われている。わずかに残された墳丘から推測すると径18㍍・高さ2.2㍍の円墳であろう。この古墳の埋葬施設とおぼしき地点から須恵器直口壷、坏身各１点と鉄刀数振りが発見されたのである。出土に際して角礫等の出土した話はないことから木棺直葬と思われる。出土した須恵器はTK23型式に併行するもので、現在宅地や畑となっている所に初期群集墳が形成されていたらしい。これよりやや新しいMT15型式ないしはTK10型式に併行する須恵器を出土した円墳には今井堯氏が半峪８号墳として資料紹介した古墳がある。この古墳の埋葬施設は箱式石棺とされている。左衛門山古墳群も同時期の所産であろう。旧郷村の下原から薪森原地区にかけては赤岩古墳群、野屋古墳群、下原古墳群、半峪古墳群、才の屺古墳群、竹峪古墳群、左衛門山古墳群、通り谷古墳群等の多くの古墳群が知られているが、観音山古墳、大山古墳といった首長墳を除くと、ほとんどの古墳が４世紀頃の方墳群か、埋葬施設に木棺直葬あるいは箱式石棺を用いる５世紀後葉以降の初期群集墳と考えられ、横穴式石室墳の存在をまったく見ない特徴的な在り方をしている。

横穴式石室墳で著名なものには先に後期の首長墳とした高山大塚古墳、法明寺古墳、井上大塚古墳の外に沢田の加市古墳と王子塚古墳がある。加市古墳は４個体の陶棺を出土した古墳として知られ、王子塚古墳は『苫田郡誌』に沢田塚として出土遺物の写真が掲載されている。現存する資料は両古墳を合わせて数点の須恵器でTK209型式に併行するものであるが、『苫田郡誌』に紹介された写真にはTK217型式に併行するものもある。子持ち土器が出土した高山の石井谷古墳も陶棺が出土した古墳である。これも現存資料はTK209型式からTK217型式の須恵器に併行する。石井谷古墳は1936年に妙見山へ登る参道を造る工事で破壊された古墳であるが、この時に破壊された古墳は２基あり、陶棺と子持ち土器、それに鏡野町歴史資料館に現存する資料が二つの古墳の何れに帰属するかは明らかではない。このほかに古い型式の陶棺を出土した古墳として山城の長浜２号墳がある。径18.0㍍・高さ1.6㍍の円墳で最低３次にわたる追葬が確認できる横穴式石室墳である。この古墳からは陶棺の他に鉄鏃16点、鉤状金具2点、耳環1点、須恵器28点、土師器2点が発見されている。最古型式に属するとされる波状文と竹管刺突文を施した陶棺の時期はTK209型式に併行するものである。

さて、鏡野町の横穴式石室墳で特徴的な分布を示すのは旧郷村に所属した高山地区である。前・中期の古墳はほとんど存在しないが、高山地区だけで石室ないしは陶棺出土の伝承のある横穴式石室墳が、高山（三谷）２・３・４・８・９・10（大塚）・11・12・13（大塚下）・15・16（大塚南）・21・22・23号墳の合計14基ある。わずかながら現存する出土須恵器はTK209型式併行からTK217型式併行のものであり、これらの古墳は７世紀初頭から前半にかけて築造されたと推測される。高山古墳群は先に指摘した旧郷村下原から薪森原地区にわたり分布する初期群集墳と対照的に後期群集墳を形成していた。

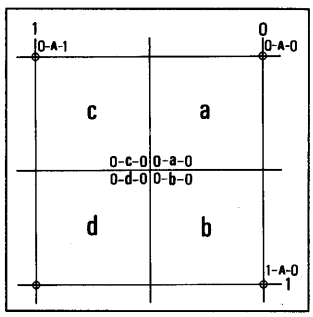
参考文献

光野千春監修・野瀬重人編『地学のガイド』岡山県地学のガイドシリーズ11コロナ社　1991
近藤義郎・今井尭ほか『竹田墳墓群』竹田遺跡発掘調査報告書第１集　鏡野町教育委員会　1984
安川豊史「美作」近藤義郎編『前方後円墳集成』中国・四国編山川出版　1991
鏡野町学校教育研修所編『鏡野の歴史』史料集(1)　鏡野町学校教育研修所　1959
寺坂五夫編『郷の村誌』郷村史編纂会　1960
花土文太郎・今田亟編『苫田郡誌』苫田郡教育会 1927

第Ⅲ章 葡萄田頭遺跡の遺構と遺物

1 グリッドの設定と呼称について

葡萄田頭遺跡は9,200平方㍍の面積を有し、住居跡が検出された集落遺跡のA区と土壙墓が検出されたB区に分けられる。グリッドの設定はA区、B区とも共通で、0-A-0が平面直角座標第Ⅴ系座標のX＝-102002、Y＝-35226である。グリッドの呼称は0-A-0から南に12㍍間隔に伸びる軸が先行し、西に伸びる軸が後になる。この12㍍四方のグリッドを大グリッドとして、これを4分割した6㍍四方のグリッドを小グリッドとした。大グリッドの呼称はアルファベットの大文字を用い、小グリッドは小文字を用いた。(第3図参照)



第3図 グリッド分割図

2 A区の遺構と遺物

A区は弥生時代中期後葉から後期初頭までに営まれた集落遺跡で、住居跡14軒、段状遺構17基、小竪穴状遺構3基、掘立柱建物跡5軒、溝7条、土壙16基、柱穴89本が検出された。この他に時期は不明であるが1列28基を基調とした3列87基の柵列と、五世紀後半の須恵器を出土した土壙1基が検出されている。

a 住居跡

第1号住居跡（第4図）

14-b-1で検出された住居跡である。住居跡の西隅は斜面のため消失している。第4号段状遺構及び第2号住居跡と重複関係にある。第4号段状遺構とこの住居跡との新旧関係ははっきりしないが、第2号住居跡より明らかに古い。

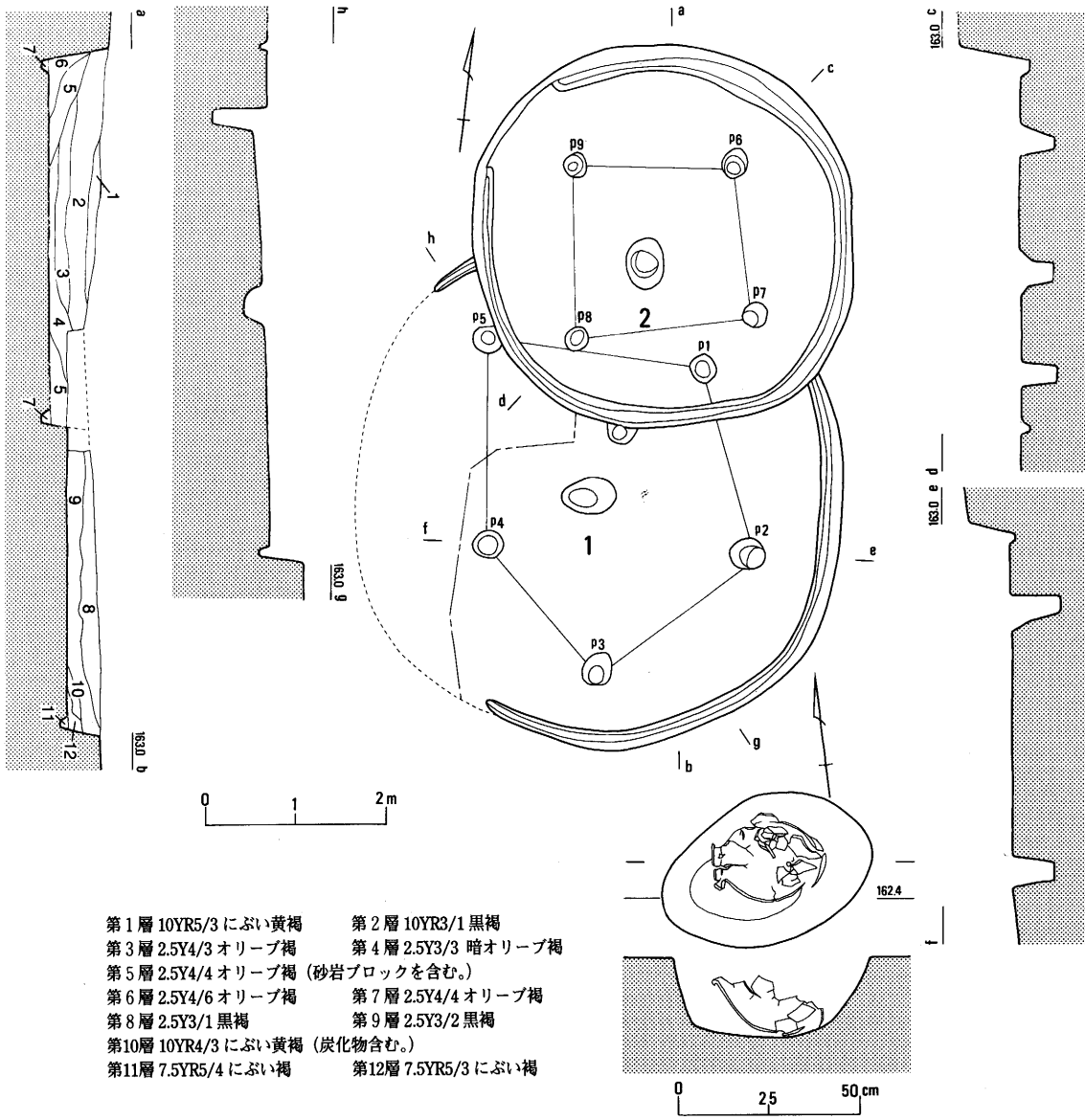
規模は長辺が推定5.8㍍、短辺が推定5.4㍍で、円形ないしは隅丸方形を呈すると思われる5本柱穴の住居跡である。確認面から床面までの深さは最も深い所で64㌢を測り、壁溝の深さは床面から7㌢である。中央ピットは卵形を呈し、長径60㌢・短径41㌢・深さ24㌢である。この中央ピットからは甕が検出されている。中央ピットの性格がはっきりしないので断定できないが、この住居跡が廃棄されてまもなく捨てられたものだろう。

柱穴は全部で6本検出された。P1は径31㌢・深さ43㌢、P2は径33㌢・深さ54㌢、P3は径36㌢・深さ57㌢、P4は径31㌢・深さ45㌢、P5は径28㌢・深さ65㌢、P6は径30㌢・深さ26㌢である。

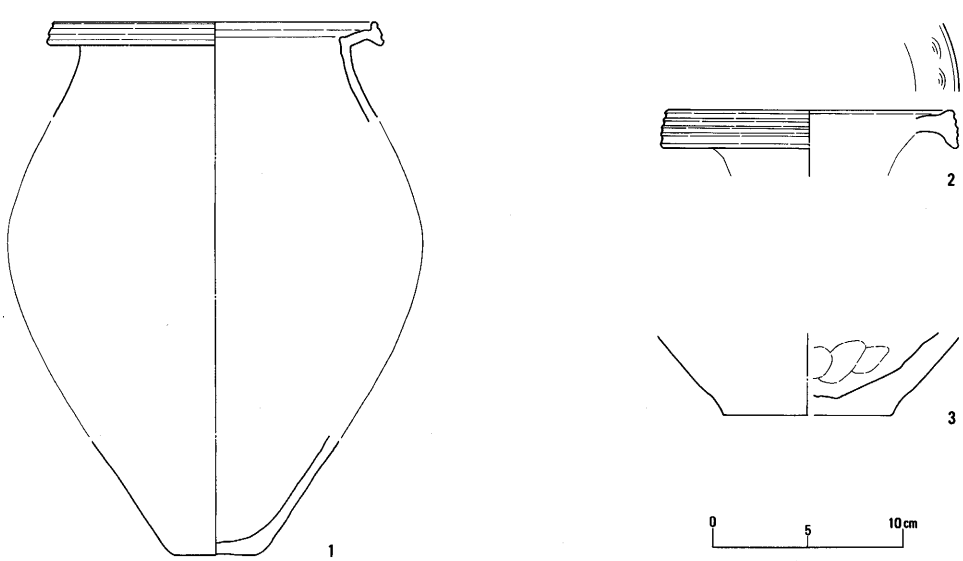
第2号住居跡（第4図）

第1号住居跡と同じ14-b-1で検出された住居跡である。

規模は直径がほぼ4.2㍍の隅丸方形を呈する4本柱穴の住居跡である。確認面からの深さは最も深い所で67㌢である。壁溝は住居跡南西隅の一部を残して囲繞する。壁溝の深さは8㌢である。中央ピットは楕円形を呈し、長径58㌢・短径46㌢・深さ36㌢である。柱穴はP1が径31㌢・深さ37㌢、P2が径28㌢・深さ46㌢、P3が径26㌢・深さ42㌢、P4が径25㌢・深さ44㌢である。



第4図　第1・2号住居跡



第5図　第1号・2号住居跡出土遺物

第1号・第2号住居跡出土遺物（第5図）　　（　）は推定値　単位cm

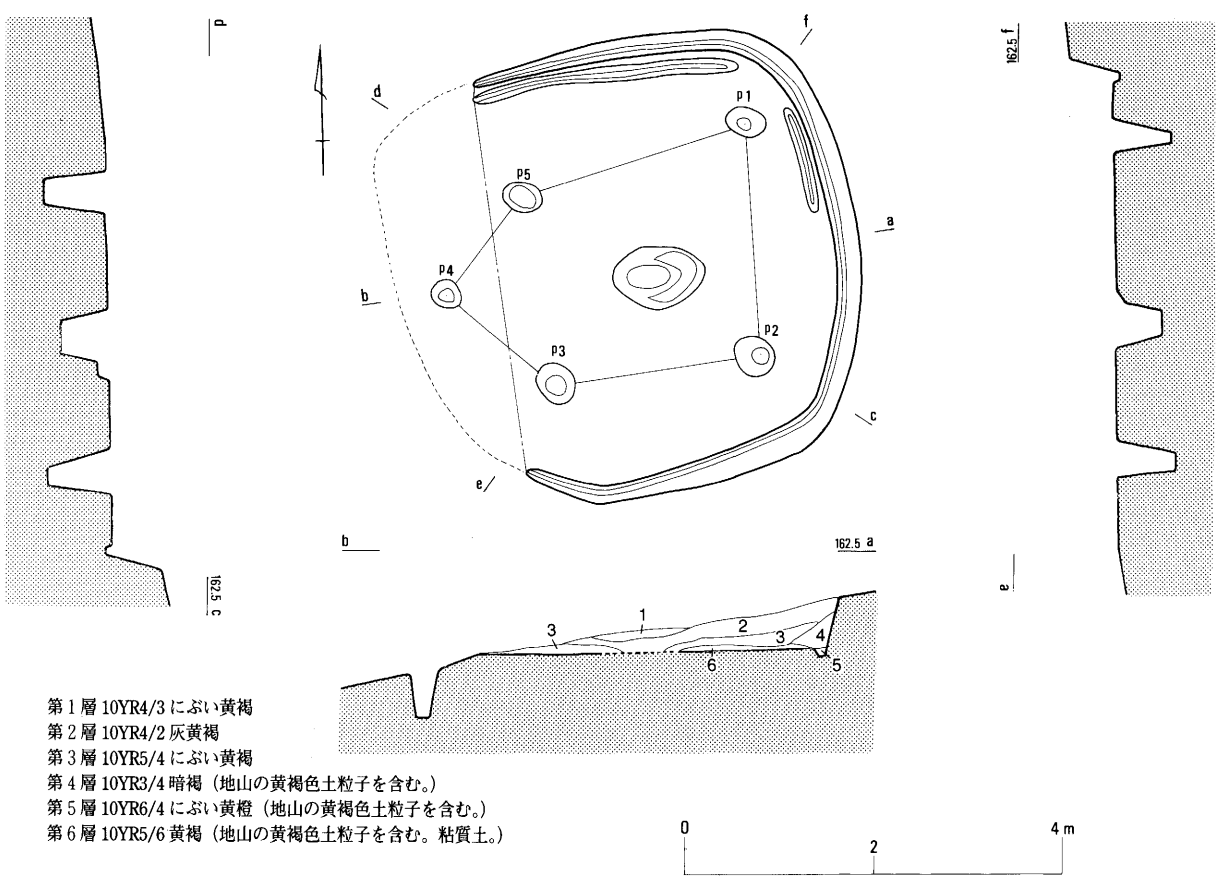
番号	器種	大きさ	形態手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕	口径16.7 底径4.3 器高（28.0）	口縁部に2条の凹線をもつ。内外面とも摩滅が著しい。内面上半には箆削りはない。	砂粒を含む。焼成良好。にぶい黄橙10YR7/4。口縁部30・底部100%現存。	第1号住居跡中央ピット出土。
2	壷	口径14.7 現存高2.0	口縁部に4条の凹線をもつ。口縁部内面に櫛描文。	砂粒を含む。焼成良。にぶい黄橙10YR7/4。口縁部10%現存。	第2号住居跡出土。
3	壷	底径8.8 現存高4.3	外面は箆磨きと思われるが不明。内面は指頭圧痕。	砂粒を含む。焼成良。橙5YR6/6。底部30%現存。	第2号住居跡出土。

第3号住居跡（第6図）

14-c-1で検出された住居跡である。この住居跡は第2号溝と重複関係にあり、これより古い。住居跡の西隅は斜面のため消失している。

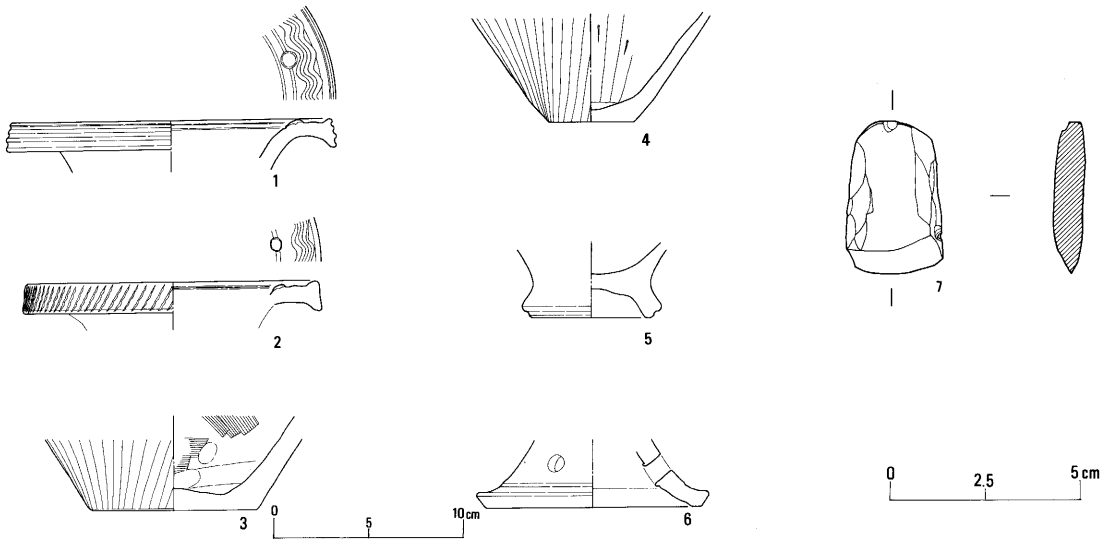
規模は長辺が推定5.18㍍、短辺が5.04㍍で、隅丸の不整方形を呈する5本柱穴の住居跡である。確認面から床面までの深さは最も深い所で54㌢である。壁溝が北壁と東壁の一部で二重に囲繞していることから、床面を共有した拡張が行われたものと思われる。壁溝の深さは床面から5～7㌢である。

中央ピットは楕円形を呈し、長径99㌢、短径65㌢、深さ47㌢である。柱穴はP1が長径42㌢・短径32㌢・深さ62㌢、P2は径44㌢・深さ64㌢、P3は径44㌢・深さ66㌢、P4は径30㌢・深さ49㌢、P5は長径40㌢・短径33㌢・深さ61㌢を測る。



第1層 10YR4/3 にぶい黄褐
第2層 10YR4/2 灰黄褐
第3層 10YR5/4 にぶい黄褐
第4層 10YR3/4 暗褐（地山の黄褐色土粒子を含む。）
第5層 10YR6/4 にぶい黄橙（地山の黄褐色土粒子を含む。）
第6層 10YR5/6 黄褐（地山の黄褐色土粒子を含む。粘質土。）

第6図　第3号住居跡



第７図　第３号住居跡出土遺物

第３号住居跡出土遺物（第７図）　　単位 cm

番号	器種	大きさ	形態手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壷	口径16.7 現存高2.6	口縁部に3条の凹線をもつ。口縁部内面に櫛描波状文と円形浮文をもつ。	砂粒を含む。焼成良好。 橙7.5YR7/6。口縁部10%現存。	
2	壷	口径15.1 現存高1.6	口縁端部に貝殻腹縁による押圧文をもつ。口縁部内面に櫛描文と円形浮文をもつ。	砂粒を含む。焼成良好。 橙5YR6/6。口縁部10%現存。	
3	壷	底径8.6 現存高4.9	外面は篦磨き。内面は刷毛目成形の後指ナデ。	砂粒を含む。焼成良。暗褐10YR3/4。底部40%現存。	
4	甕	底径4.5 現存高5.7	外面篦磨き。内面篦削り。	砂粒を含む。焼成良。黒褐10YR3/1。底部100%現存。	南側壁溝出土
5	甕	底径6.2 現存高3.9	脚部内外面とも横ナデ。	砂粒を含む。焼成良。 橙2.5YR6/6。脚部100%現存。	
6	高坏	底径11.3 現存高3.6	外面の調整は不明。内面は篦削りと思われる。孔の数は不明。	砂粒を含む。焼成良好。 橙5YR6/6。脚部20%現存。	
7	石斧	長さ4.0 厚さ0.8	偏平片刃石斧。刃部の幅は2.2㌢。	石材は安山岩と思われる。	

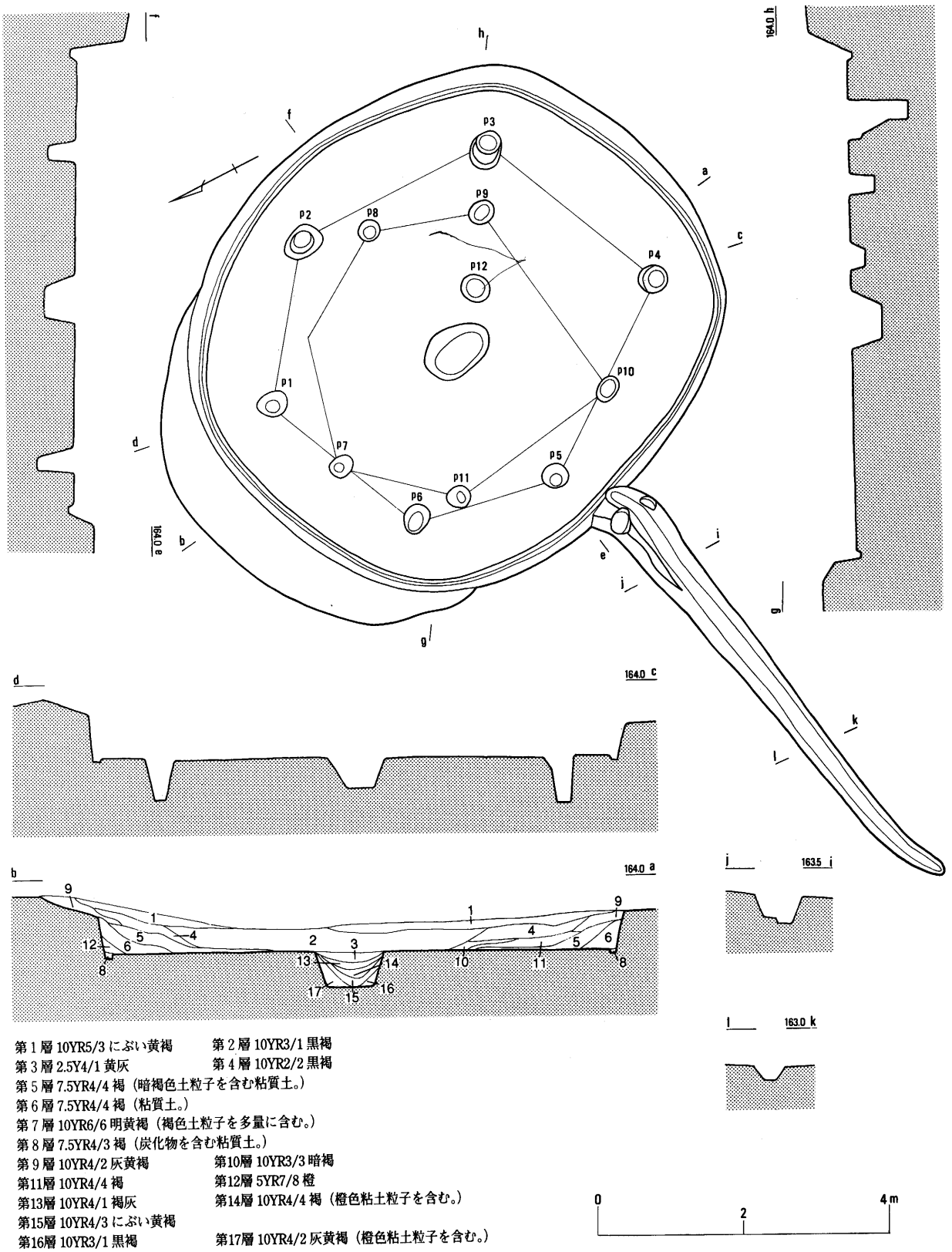
第４号住居跡（第８図）

12-A-1で検出された隅丸長方形を呈する６本柱穴の住居跡である。北壁の上部が斜面になっているが、これは壁が崩落したものではない。

規模は長辺が推定7.94㍍、短辺が6.52㍍で、柱穴は全部で13本検出された。柱穴の配列からは住居跡の拡張が予測されるが、拡張以前の壁溝は検出できなかった。確認面から床面までの深さは最も深い所で79㌢である。壁溝の深さは床面から５～6㌢である。

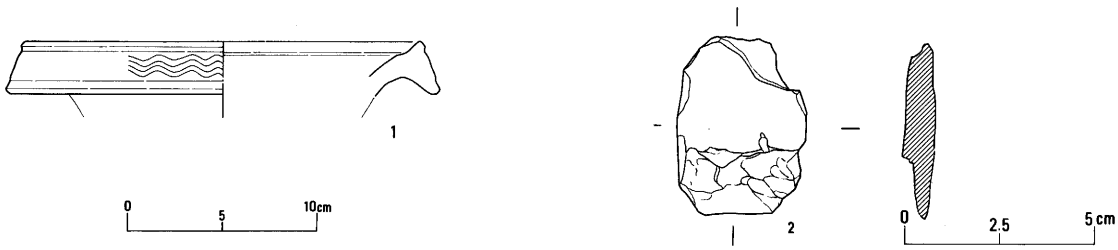
中央ピットは楕円形を呈し、長径93㌢、短径68㌢、深さ42㌢である。柱穴はP1が径39㌢・深さ56㌢、P2が長径51㌢・短径37㌢・深さ58㌢、P3が長径49㌢・短径42㌢・深さ82㌢、P4が径38㌢・深さ63㌢、P5が径33㌢・深さ65㌢、P６が径38㌢・深さ52㌢、P７が径32㌢・深さ52㌢、P８が径28㌢・深さ32㌢、P９が径34㌢・深さ34㌢、P10が径34㌢・深さ52㌢、P11が径30㌢・深さ28㌢、P12が径34㌢・深さ34㌢、P13が長径36㌢・短径23㌢・深さ39㌢である。

また、西壁から西に6.8㍍にわたり溝が検出された。溝は確認面から最も深い所で33㌢、幅75㌢、深さ26㌢の所で幅38㌢である。



第1層 10YR5/3 にぶい黄褐　　第2層 10YR3/1 黒褐
第3層 2.5Y4/1 黄灰　　第4層 10YR2/2 黒褐
第5層 7.5YR4/4 褐（暗褐色土粒子を含む粘質土。）
第6層 7.5YR4/4 褐（粘質土。）
第7層 10YR6/6 明黄褐（褐色土粒子を多量に含む。）
第8層 7.5YR4/3 褐（炭化物を含む粘質土。）
第9層 10YR4/2 灰黄褐　　第10層 10YR3/3 暗褐
第11層 10YR4/4 褐　　第12層 5YR7/8 橙
第13層 10YR4/1 褐灰　　第14層 10YR4/4 褐（橙色粘土粒子を含む。）
第15層 10YR4/3 にぶい黄褐
第16層 10YR3/1 黒褐　　第17層 10YR4/2 灰黄褐（橙色粘土粒子を含む。）

第8図　第4号住居跡



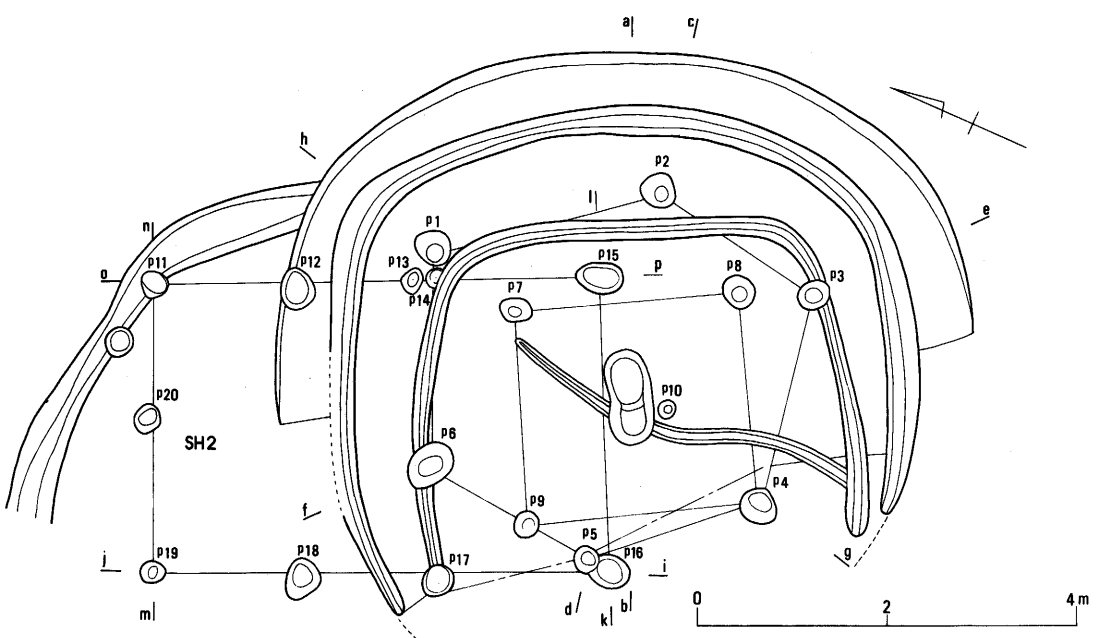
第9図　第4号住居跡出土遺物

第4住居跡出土遺物（第9図）　　単位 cm

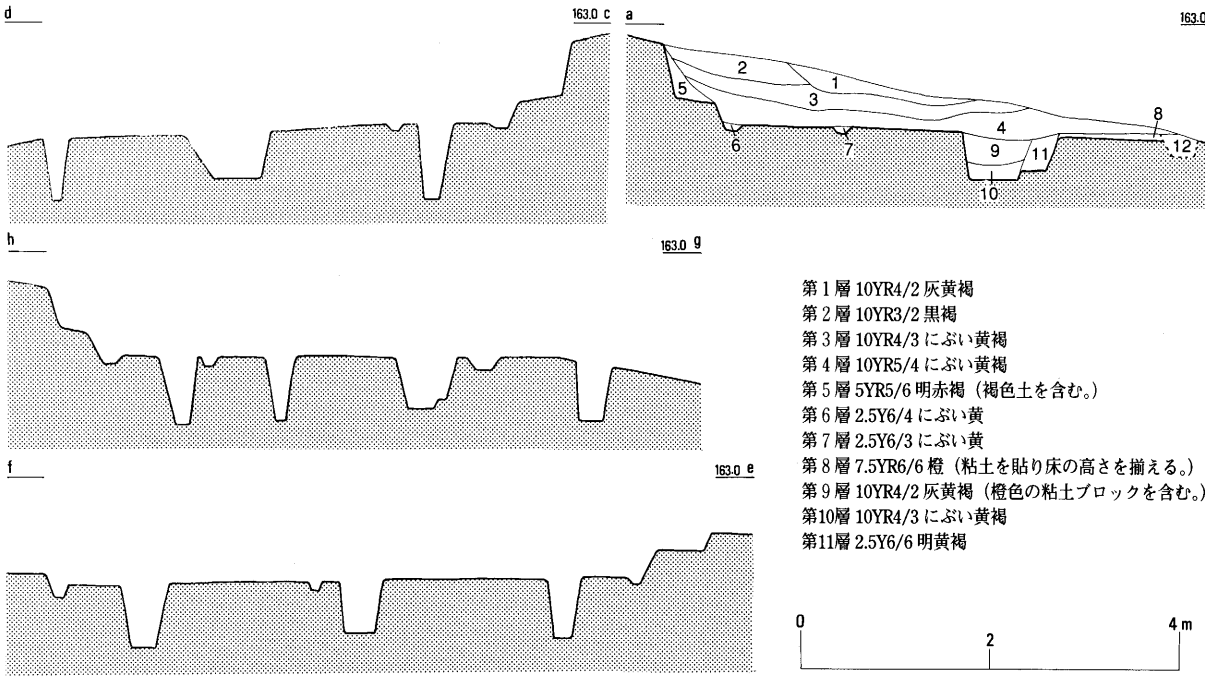
番号	器種	大きさ	形態手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壷	口径20.7 現存高2.9	口縁部を横ナデした後に4条の櫛描波状文を巡らす。	砂粒を含む。焼成良。にぶい黄橙10YR6/4。口縁部20%現存。	
2	石斧	長さ3.7 厚さ0.7	偏平片刃石斧。刃部が1.5㌢程残っている。輝岩か。		

第5号住居跡（第10図）

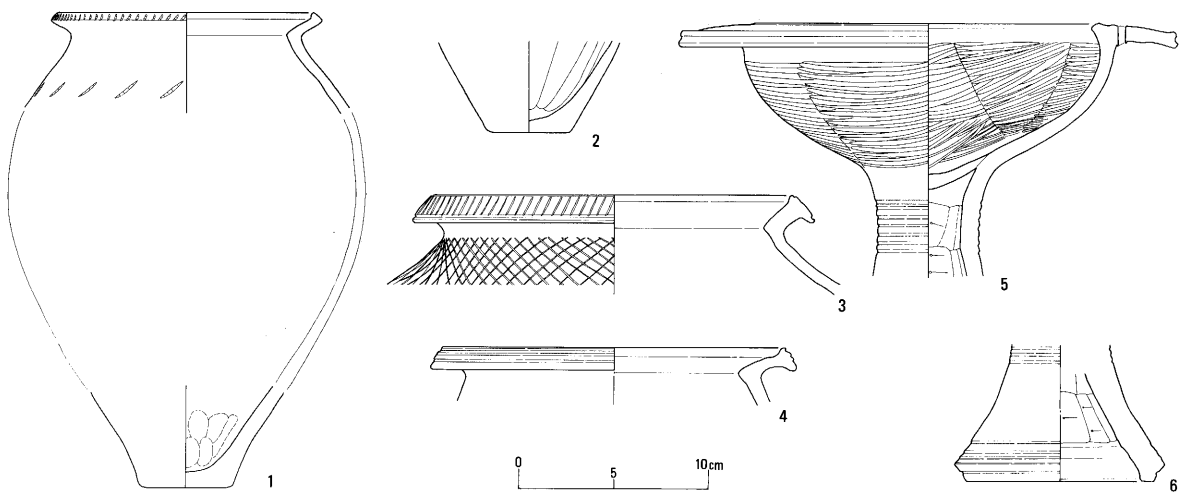
10-A-1で検出された住居跡である。4本柱穴から6本柱穴の住居跡へ、西壁と床面を共有しながら拡張されている。テラスの高さは床面から高さ25㌢、幅45㌢である。この住居跡は第2号掘立柱建物より古いが、第4号溝との関係は不明である。拡張後の住居跡の規模は南北軸が7.32㍍、東西軸が現存長5.26㍍で、確認面から床面までの深さは最も深い所が96㌢、壁溝の深さは床面から6㌢である。拡張以前の住居跡は南北軸4.68㍍、東西軸の現存長3.47㍍である。中央ピットは不整楕円形を呈し、長径99㌢、短径48㌢である。深さは最深部が50㌢である。この中央ピットから深さ5㌢ほどの床溝が南北に伸びる。この住居跡に関係のある柱穴は全部で10本検出された。柱穴はP1が径41㌢・深さ71㌢、P2が径41㌢・深さ79㌢、P3が径52㌢・深さ66㌢、P4が径38㌢・深さ62㌢、P5が径24㌢・深さ64㌢、P6が長径50㌢・短径37㌢・深さ57㌢、P7が径32㌢・深さ70㌢、P8が径33㌢・深さ58㌢、P9が径28㌢・深さ40㌢、P10が径21㌢・深さ4.7㌢である。



第10図　第5号住居跡



第11図　第５号住居跡土層断面図



第12図　第５号住居跡出土遺物

第５号住居跡出土遺物（第12図）

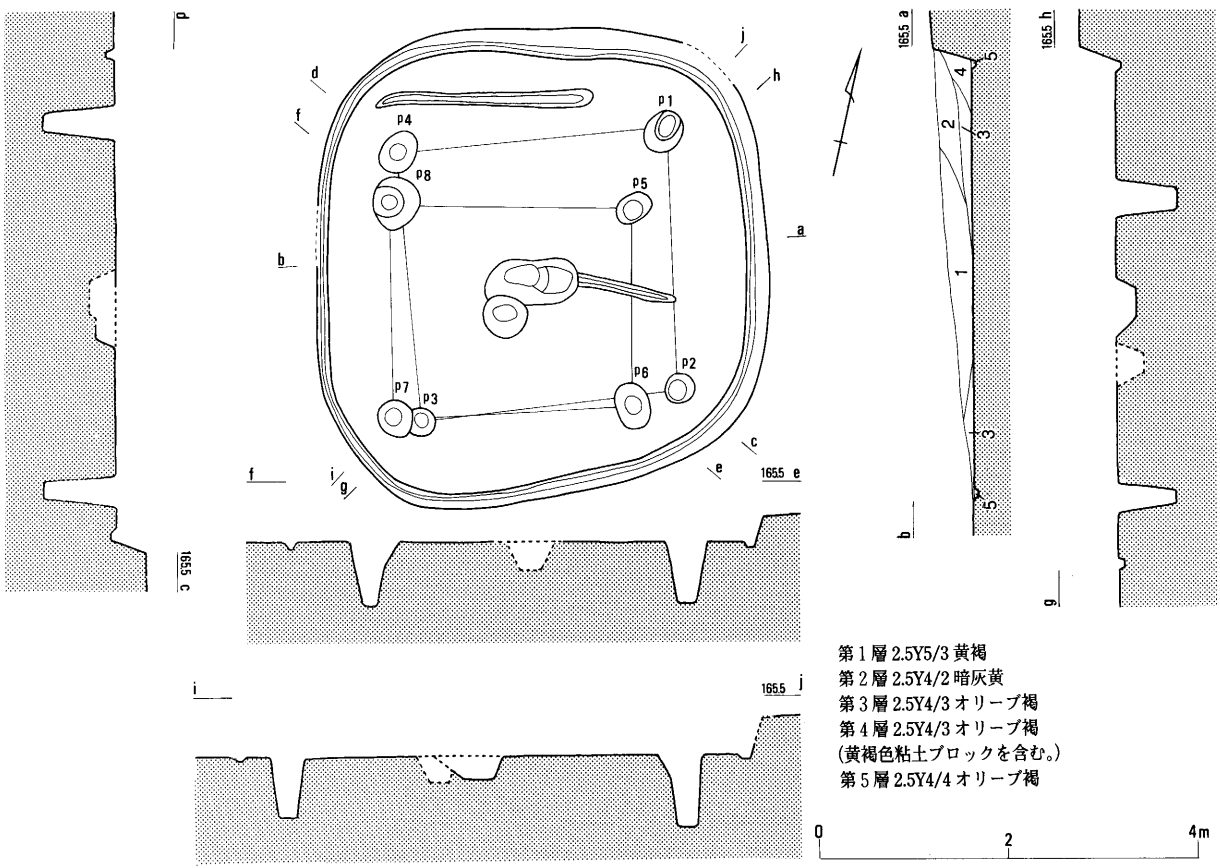
（　）は推定値　単位cm

番号	器種	大きさ	形態手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕	口径13.3 底径4.9 器高（25.0）	口縁部を横ナデした後に木口状工具による押圧。肩部にも同様に施文している。底部内面指頭による押圧。	微砂粒を含む。焼成良好。にぶい黄橙10YR6/3。口縁部10%・底部80%現存。	
2	甕	底径4.9 現存高4.9	外面は箆磨きと思われる。火を受けている。内面は指ナデ。	砂粒を含む。焼成良好。明赤褐色2.5YR5/6。底部60%現存	
3	壷	口径18.8 現存高5.3	口縁部に箆による刻目をもつ。胴部外面に箆による斜格子目文をもつ。	微砂粒・赤色粒（土器の粉）を含む。焼成良。にぶい黄褐10YR5/3。口縁部10%現存	
4	甕	口径18.0 現存高3.0	口縁部に凹線３条。	砂粒を含む。焼成良好。にぶい黄褐10YR7/4。口縁部20%現存。	
5	高坏	口径17.9 最大径26.2 現存高13.3	口縁部横ナデ。坏部内外面箆磨き。脚部凹線７条。脚部内面箆削り。鍔部分に径４㎜の小孔。	微砂粒を含む。焼成良好。にぶい橙5YR6/3。坏部70%現存。	北側壁溝出土。
6	高坏	底径9.9 現存高7.2	脚端部に凹線文。内面箆削り。	砂粒を含む。焼成良。にぶい褐7.5YR5/3。脚部30%現存。	

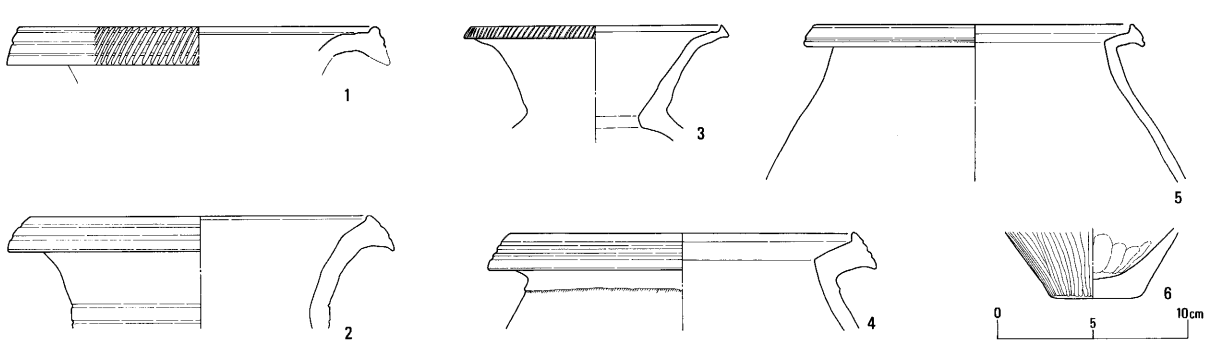
第６号住居跡（第13図）

10-d-1で検出された住居跡である。柵列と重複しており、これより古い。柱穴の配列から南壁と西壁を共有しながら拡張されていると思われる。

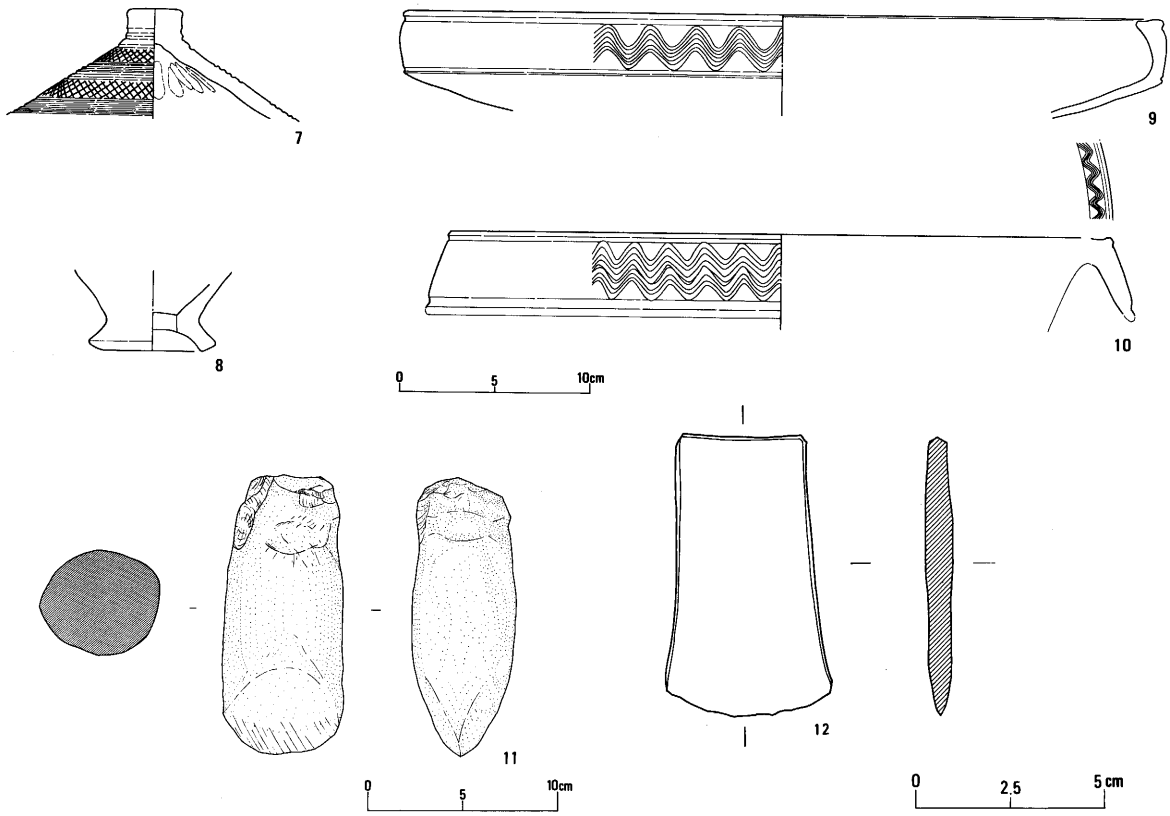
住居跡の規模は長辺が5.1㍍、短辺が4.8㍍で、確認面から床面までの深さは最も深い所が38㌢、壁溝の深さは床面から5㌢である。中央ピットは二箇所検出された。拡張後の住居跡に伴う中央ピットは不整楕円形を呈し、長径98㌢・短径48㌢、深さは最深部が27㌢である。この中央ピットから深さ３㌢ほどの床溝が東に1.1㍍伸びている。拡張以前の住居跡の中央ピットは径48㌢・深さ23.5㌢である。柱穴は全部で８本検出された。P1は長径50㌢・短径38㌢・深さ76㌢、P2は径32㌢・深さ46㌢、P3は径30㌢・深さ57㌢、P4は長径48㌢・短径37㌢・深さ73㌢、P5は長径44㌢・短径29㌢・深さ63㌢、Ｐ６は長径51㌢・短径36㌢・深さ50㌢、Ｐ７は径37㌢・深さ61㌢、Ｐ８は長径58㌢・短径52㌢・深さ65㌢である。



第13図　第６号住居跡



第14図　第６号住居跡出土遺物１



第15図　第６号住居跡出土遺物２（11は1：4）

第６号住居跡出土遺物（第14・15図）

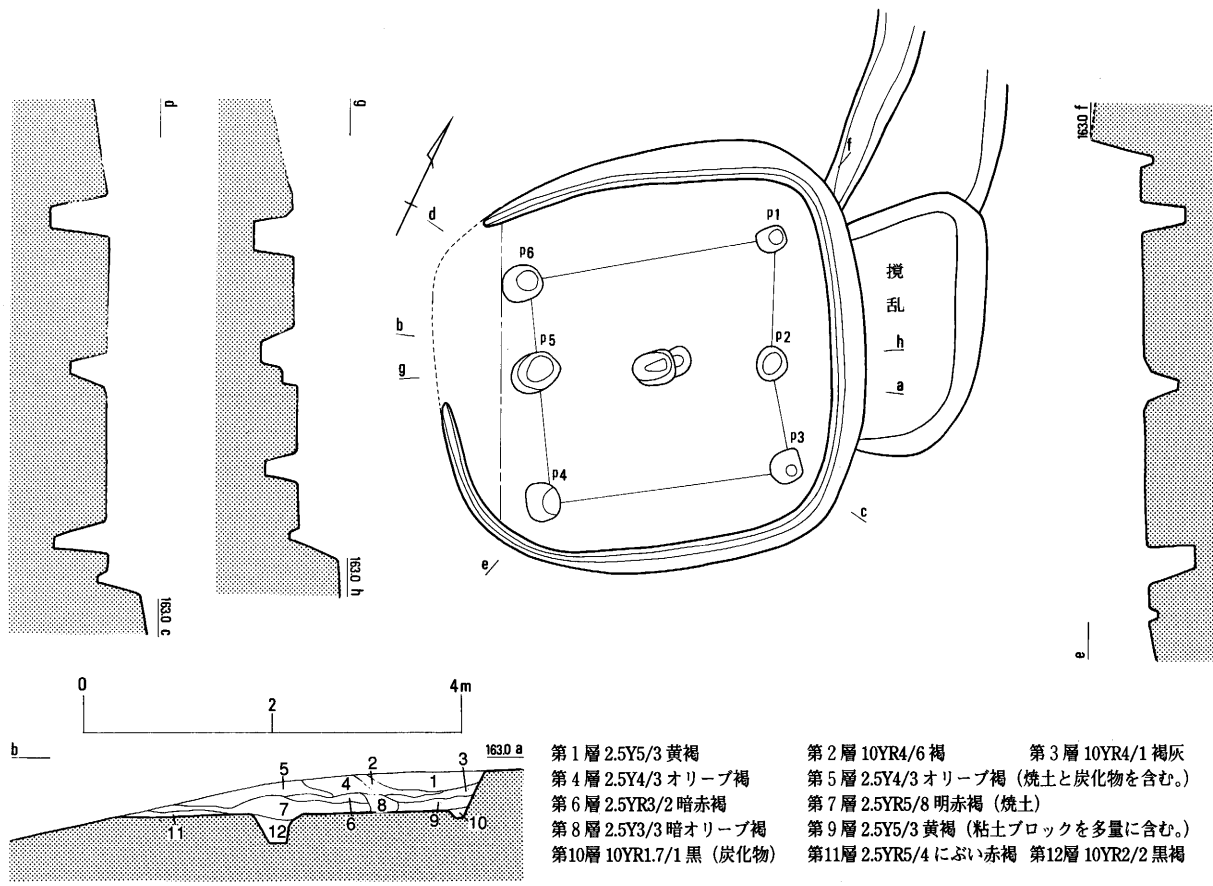
単位 cm

番号	器種	大きさ	形態手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壷	口径18.63 現存高1.6	口縁部を横ナデした後に篦による刻み目。凹線は３条か。	砂粒を含む。焼成良好。明黄褐10YR7/6。口縁部20%現存。	P2より出土。
2	壷	口径17.8 現存高5.9	口縁部に凹線３条。	鉄分粒子が多い。焼成良好。橙7.5YR7/6。口縁部30%現存	
3	壷	口径13.2 現存高6.1	口縁部に篦による刻目。	砂粒を含む。焼成良好。黒10YR1.7/1。口縁部40%現存	北中央ピット出土。
4	甕	口径18.0 現存高5.1	口縁部に凹線３条。胴部外面上半は刷毛目か。	砂粒を含む。焼成良好。明赤褐5YR5/6。口縁部20%現存。	
5	甕	口径16.6 現存高8.3	口縁部に凹線２条。胴部外面は篦磨きと思われる。	砂粒を含む。焼成良好。黒10YR1.7/1。胴上部30%現存。	
6	甕	底径5.0 現存高3.7	外面は篦磨き。内面は指頭による押え。	砂粒を含む。焼成良好。橙7.5YR6/6。底部100%現存。	
7	蓋	現存幅15.4 現存高5.8	甕の蓋と思われる。外面は５条一単位の凹線と篦描き斜格子文。内面は指頭による押え。	砂粒を含む。焼成良好。にぶい黄橙10YR6/4。40%現存。	第５号住出土土器とセットか。
8	甕	底径5.0 現存高4.2	脚部内外面横ナデ。火を受けている。	砂粒を含む。焼成良好。黒褐10YR3/1。底部40%現存。	
9	高坏	口径40.0 現存高5.2	口縁部に櫛描波状文。	砂粒を含む。焼成良好。にぶい黄橙10YR7/4。口縁部20%現存。	
10	器台	口径34.8 現存高4.1	口縁部に櫛描波状文。	砂粒を含む。焼成良好。にぶい黄橙10YR7/4。口縁部20%現存。	
11	石斧	刃縁部幅6.1 長さ14.6 厚さ5.5	磨製太型蛤刃石斧。基端は平基。	石材は安山岩。	
12	鉄斧	刃縁部幅4.2. 長さ7.3 厚さ0.6	板状鉄斧である。錆化が進んでいるが破損箇所は見られない。		壁溝直上より出土。

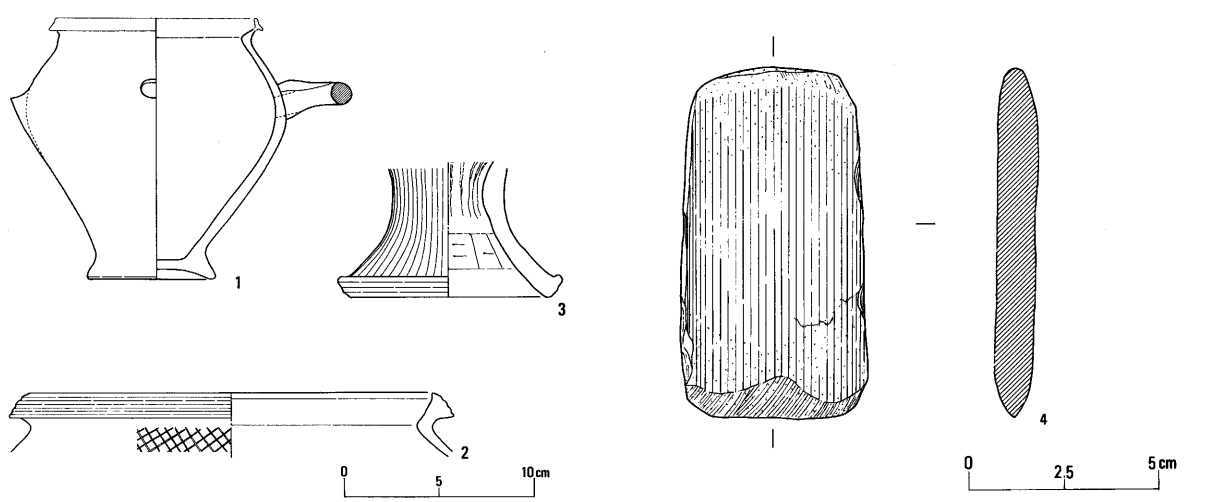
第７号住居跡（第16図）

10-d-2で検出された六本柱穴の隅丸方形を呈する住居跡である。床面上で炭化物が多数検出され覆土中にも多数の焼土と炭化物を含む。火災により焼失・廃棄された住居跡と思われる。また、中央ピットは炭化物と焼土ブロックの混入した黒褐色の単一土層で火災により埋まったものと思われる。

住居跡の規模は一辺が4.5㍍で、確認面から床面までの深さは最も深い所が45㌢、壁溝の深さは床面から7～11㌢である。中央ピットは楕円形を呈し、長径47㌢・短径26㌢、深さは34㌢である。柱穴は全部で6本検出された。P1は径34㌢・深さ44㌢、P2は径35㌢・深さ31.5㌢、P3は径38㌢・深さ56㌢、P4は径41㌢・深さ48㌢、P5は長径53㌢・短径40㌢・深さ30㌢、P 6 は径40㌢・深さ57㌢である。



第16図　第７号住居跡



第17図　第７号住居跡出土遺物

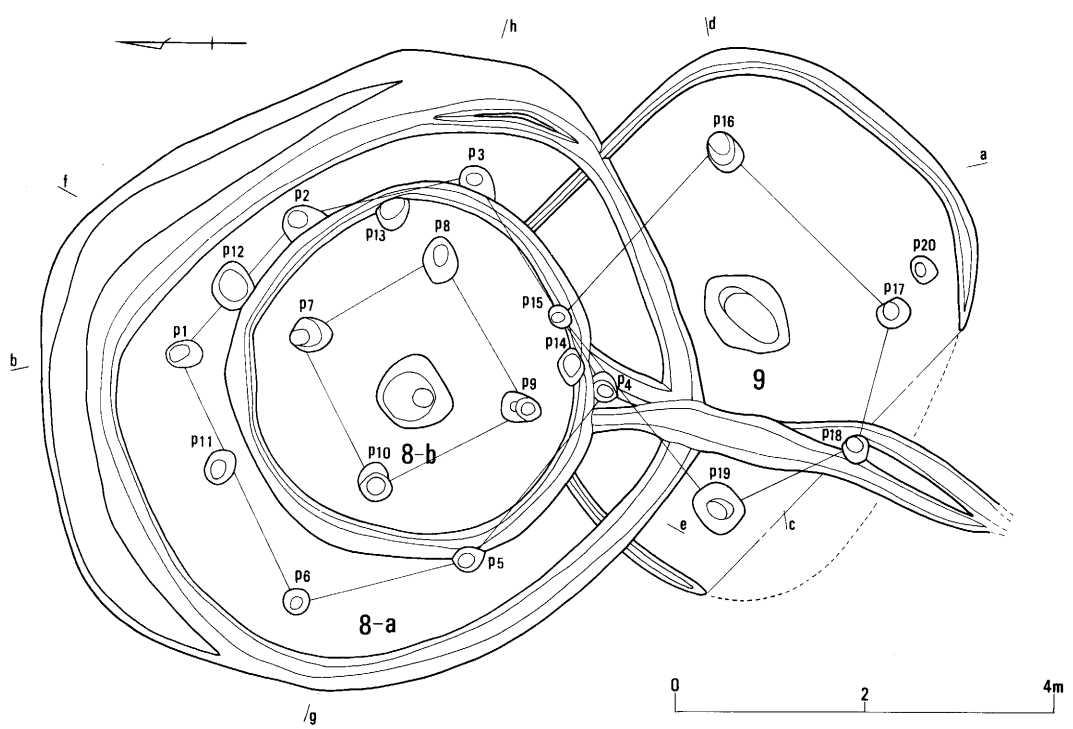
第７号住居跡出土遺物（第17図）　　単位 cm

番号	器種	大きさ	形態手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	注口土器	口径10.3 底径6.5 器高13.1	注口部分の側面に把手をもつ。器面の調整は火災のため火を受けており不明。	砂粒を含む。焼成良。橙 7.5YR7/6。50%現存。	壁溝出土。
2	壷	口径21.1 現存高2.3	口縁部に凹線３条。外面に篦描き斜格子文。	砂粒を含む。焼成良好。浅黄橙 10YR8/4。口縁部20%現存	
3	高坏	底径10.4 現存高7.1	脚部外面は篦磨き。内面は篦削り。	微砂粒を含む。焼成良好。橙 7.5YR7/6。脚部40%現存	
4	石斧	刃縁部幅4.5 長さ9.2 厚さ1.0	本来は片刃と思われるが、両面に刃が付けられている。	石材は緑泥片岩。	

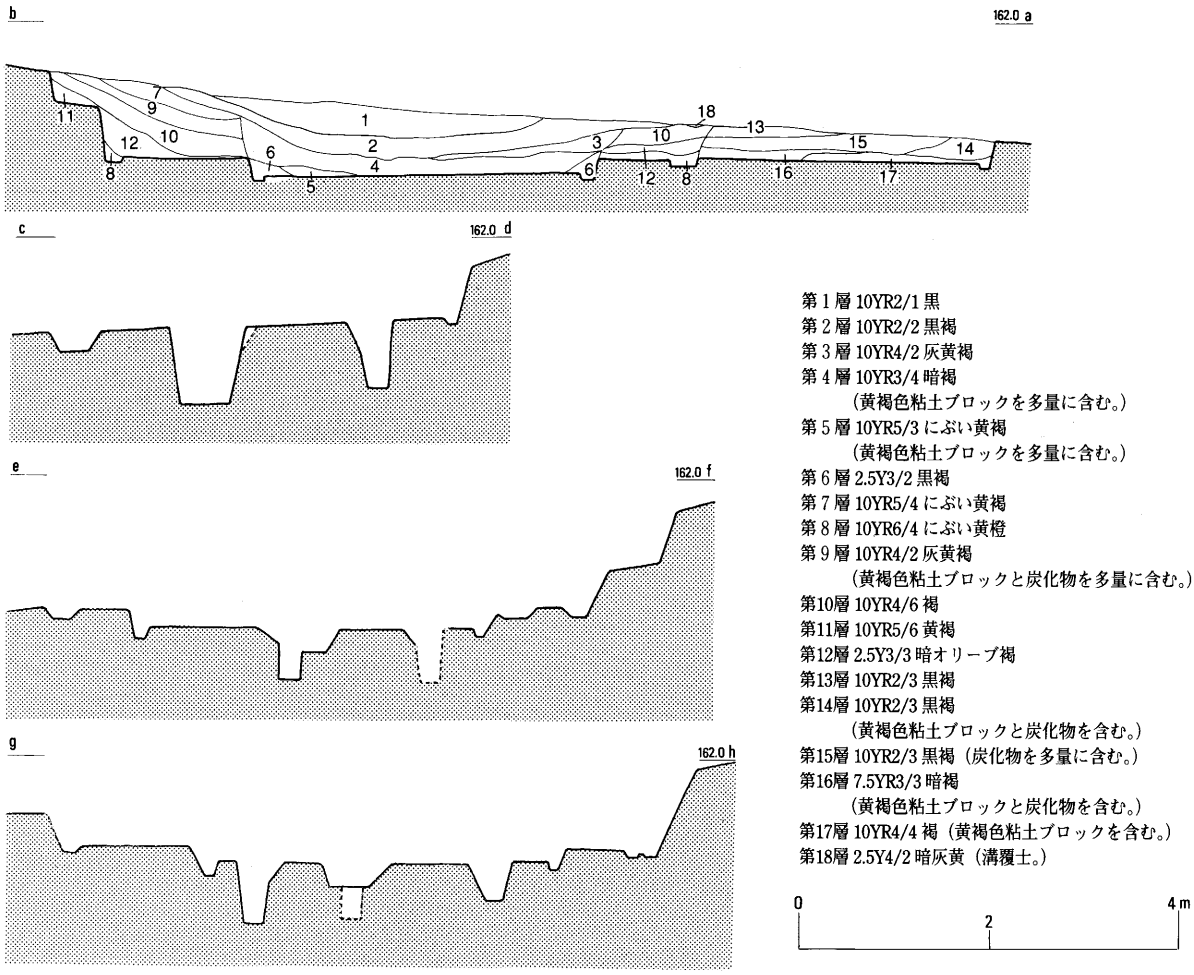
第８号住居跡（第18図）

10-b-3で検出された住居跡である。二軒の住居跡の重複が認められる。古い住居跡を第8-a 号住居跡、新しい住居跡を第8-b 号住居跡とする。また、第８号住居跡は第９号住居跡より新しく、第３号溝は第8-a 号住居跡より新しい。ただし、第３号溝と第8-b 号住居跡の関係は不明である。

第8-a 号住居跡は隅丸長方形の６本柱穴の住居跡である。確認面から床面までの深さは最も深い所で100㌢、壁溝の深さは5～8㌢である。規模は長辺が7.0㍍、短辺が6.2㍍で中央ピットは第8-b 号住居跡と共有している。検出された柱穴の大きさはP1が長径38㌢・短径28㌢・深さ53㌢、P2が径45㌢・深さ53㌢、P3が径30㌢・深さ52㌢、P4が径33㌢・深さ42㌢、P5が長径36㌢・短径28㌢・深さ62㌢、P６が径28㌢・深さ50㌢、P11が長径38㌢・短径32㌢・深さ55㌢、P12が長径52㌢、短径46㌢・深さ10㌢、P13が長径36㌢・短径32㌢・深さ17㌢、P14が長径40㌢・短径32㌢・深さ12㌢である。また、この住居跡にはわずかだか床溝が残っており、住居跡南隅から外に4.5㍍ほど伸びて第14号段状遺構に切られている。



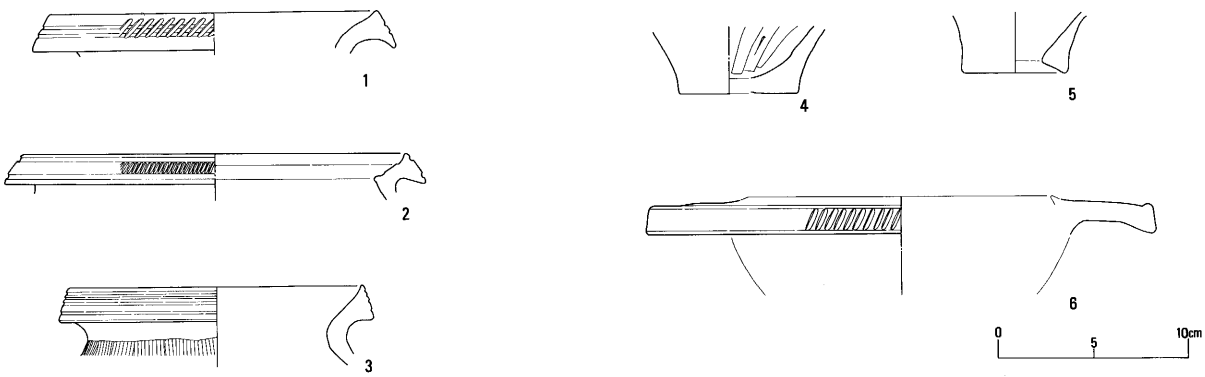
第18図　第８・９号住居跡



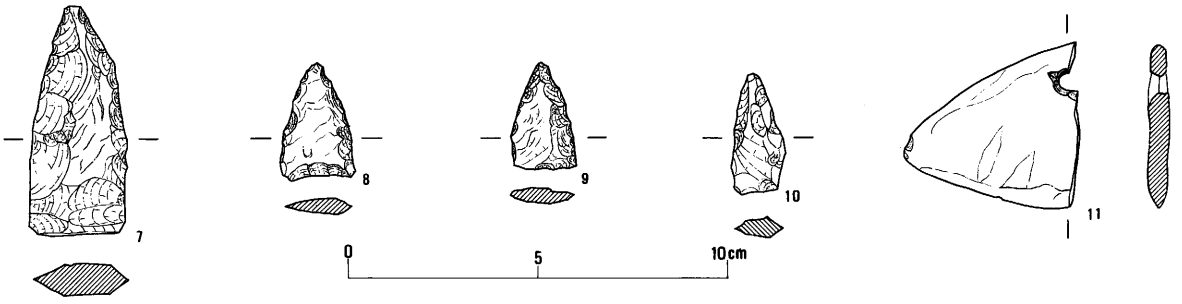
第19図　第８・９号住居跡土層断面図

第8-b 号住居跡は径3.6㍍の四本柱穴の円形住居跡である。中央ピットは先述のとおり第8-a 号住居跡と共有する。中央ピットの大きさは対角線の長さが80㌢ほどの台形で深さは25㌢である。また、柱穴状に深くなった所の深さは55㌢で中央ピットの埋没後に掘り込まれたものである。この中央ピットの最下層は黒色の炭化物層であった。

柱穴はP7が長径43㌢・短径36㌢・深さ60㌢、P8が長径45㌢・短径36㌢・深さ40㌢、P9が長径41㌢・短径30㌢・深さ39㌢、P10が長径42㌢・短径33㌢・深さ65㌢である。P13・P14についてはこの住居跡との関係は考えられない。P15は第９号住居跡の柱穴である。また、第8-a 号住居跡と同様に南壁から溝が4.5㍍ほど伸びて第14号段状遺構に切られている。



第20図　第８号住居跡出土遺物１



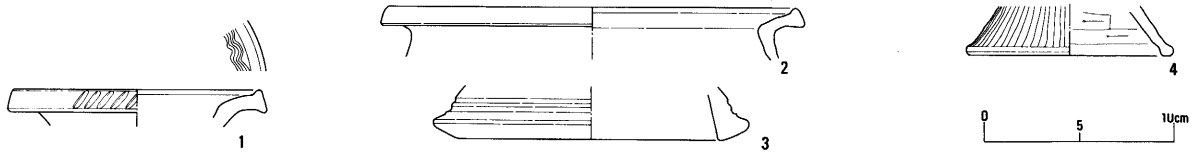
第21図　第８号住居跡出土遺物２

第８号住居跡出土遺物（第20・21図）　　単位 cm

番号	器種	大きさ	形態手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壷	口径17.1 現存高2.2	口縁部を横ナデした後に篦による刻み目。凹線は２条。	砂粒を含む。焼成良。にぶい褐7.5YR5/4。口縁部10%現存。	第8-b号住居跡出土。
2	甕	口径20.0 現存高2.5	口縁部に篦による刻み目。凹線は２条。	砂粒を含む。焼成良。黒褐10YR3/2。口縁部10%現存	〃
3	甕	口径15.4 現存高4.2	口縁部に凹線４条。胴部外面刷毛目。	砂粒を含む。焼成良。にぶい橙7.5YR7/4。口縁部60%現存	〃
4	甕	底径6.2 現存高3.5	胴部内面は篦削り。	砂粒を含む。焼成良好。にぶい黄橙10YR3/7。底部30%現存。	第8-a号住居跡出土。
5	甑	底径5.4 現存高3.2	器面調整は不明。甕の底部を抜いて甑としたものと思われる。	砂粒を含む。焼成良。浅黄橙10YR8/4。底部100%現存。	〃
6	高坏	最大径26.8 現存高1.8	外面は篦磨き。内面は不明。	砂粒を含む。焼成良好。にぶい黄橙10YR6/4。鍔部10%現存。	〃
7	石鏃	鏃身長6.0 幅1.5 厚さ0.8	平基式石鏃。	石材はサヌカイト。	〃
8	石鏃	鏃身長3.1 幅2.0 厚さ0.4	凹基式石鏃。	石材はサヌカイト。	第8-b号住居跡P10出土。
9	石鏃	鏃身長2.8 幅1.7 厚さ0.4	平基式石鏃	石材はサヌカイト。	第8-a号住居跡出土。
10	石鏃	鏃身長3.1 幅1.5 厚さ0.5	平基式石鏃。	石材はサヌカイト。	〃
11	石包丁	残存長4.9 残存幅5.3 厚さ0.5	内孔0.45 外孔0.7	石材はホーンフェルスか。	〃

第９号住居跡（第18図）

南西の壁が失われているが隅丸長方形の５本柱穴の住居跡である。確認面から床面までの深さは最も深い所で60㌢、壁溝の深さは4㌢である。規模は長辺が5.2㍍、短辺の現存長が4.2㍍である。中央ピットの大きさは長径109㌢・短径76㌢・深さ81㌢である。検出された柱穴の大きさはP15が径28㌢・深さ37㌢、P16が長径44㌢・短径34㌢・深さ68㌢、P17が径36㌢・深さ66㌢、P18が径30㌢・深さ51㌢、P19が径56㌢・深さ64㌢、P20が径28㌢・深さ59㌢である。



第22図　第９号住居跡出土遺物

第9号住居跡出土遺物（第22図）　　単位 cm

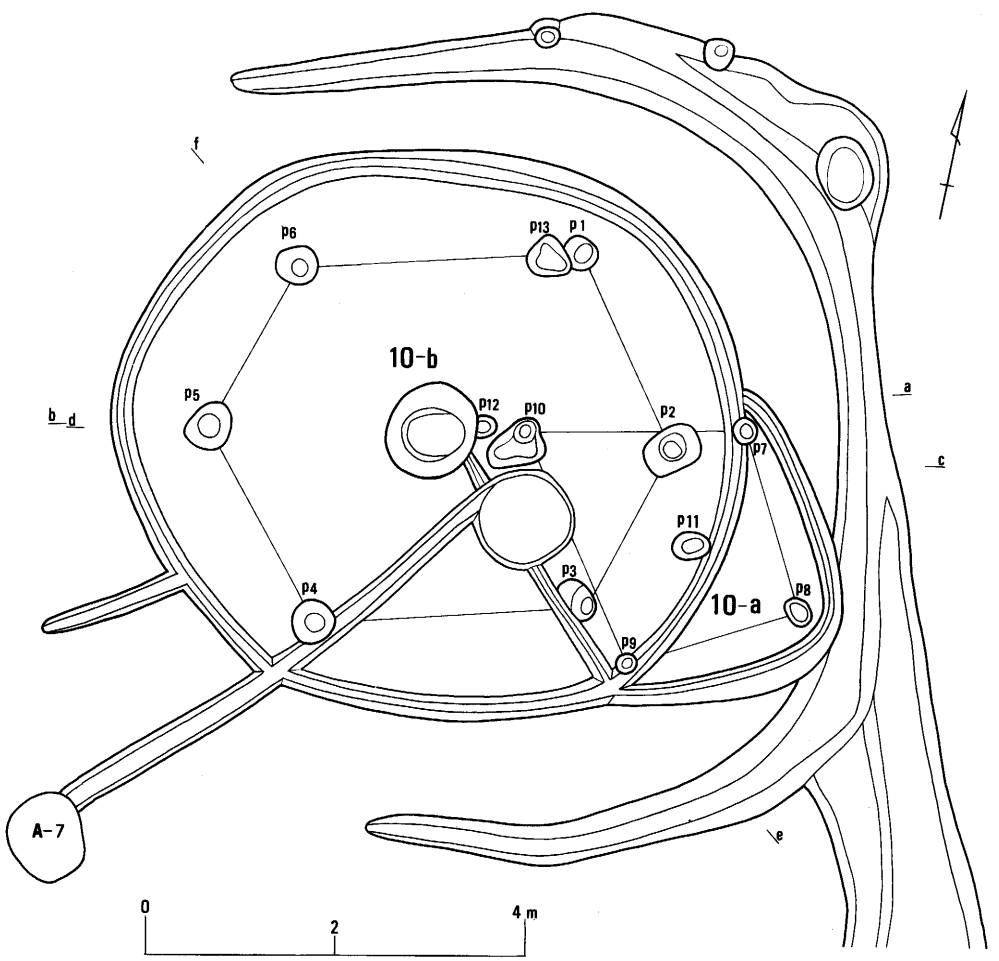
番号	器種	大きさ	形態手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壷	口径12.8 現存高1.9	口縁部を横ナデした後に篦による刻み目を施す。	砂粒を含む。焼成良好。明黄褐10YR7/6。口縁部10%現存。	
2	甕	口径21.3 現存高2.8	調整不明。	砂粒を含む。焼成良。明黄褐2.5Y6/6。口縁部10%現存。	
3	高坏	底径13.7 現存高2.8	脚部に凹線2条。内面は篦削りと思われるが不明。	砂粒を含む。焼成良。にぶい黄橙10YR7/4。脚部10%現存。	
4	高坏	底径10.6 現存高2.6	脚部外面篦磨き。内面は篦削り。	砂粒を含む。焼成良。にぶい黄橙10YR7/4。脚部10%現存。	

第10号住居跡（第23図）

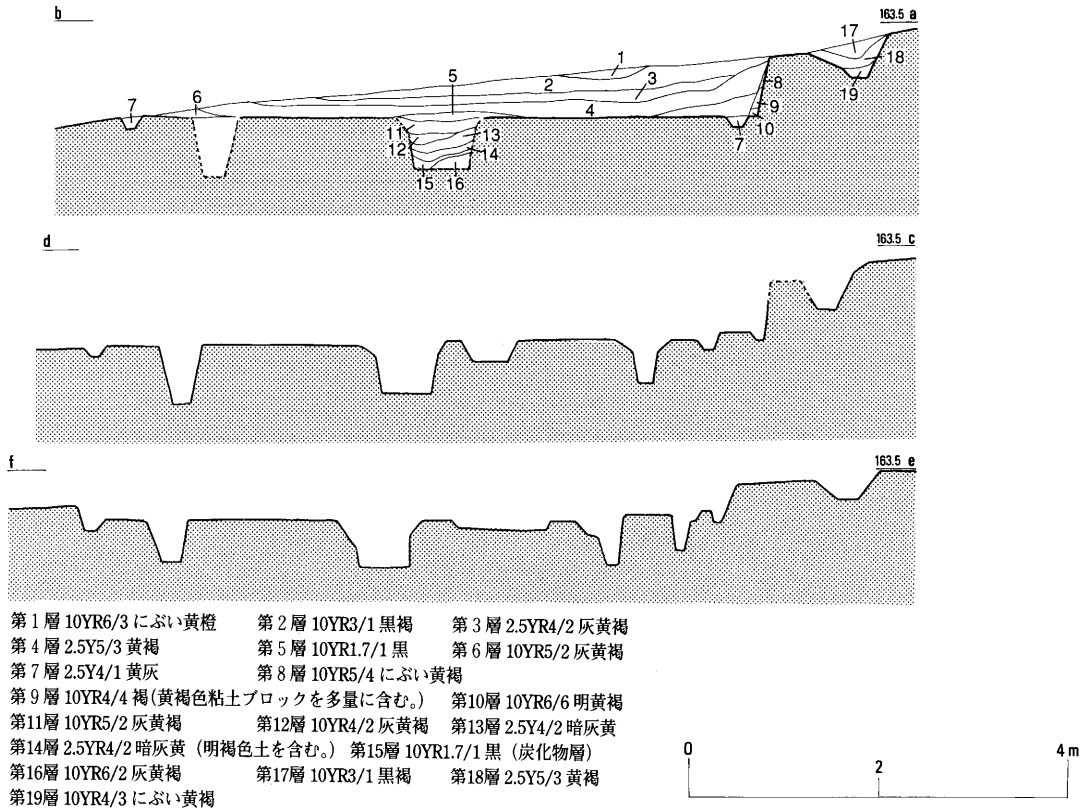
10-a-3で検出された住居跡である。小型の住居跡と重複している。新しい住居跡を第10-b号住居跡、古い住居跡を第10-a号住居跡とする。

第10-a号住居跡は第10-b号住居跡に切られている。検出された壁は長辺が290㌢・短辺が250㌢である。この住居跡は柱穴の配置から菱形に近いかなり変則的な形態を呈している。また、P11は中央ピットと思われる。検出された柱穴の大きさはP7が径27㌢・深さ40㌢、P8が長径31㌢・短径25㌢・深さ37㌢、P9が径22㌢・深さ36㌢、P10が径20㌢・深さ41㌢、P11が長径41㌢・短径28㌢・深さ26㌢、P12が径23㌢・深さ4.2㌢である。

第10-b号住居跡は長辺が6.8㍍、短辺が6.02㍍の楕円形を呈する6本柱穴の住居跡である。確認面か



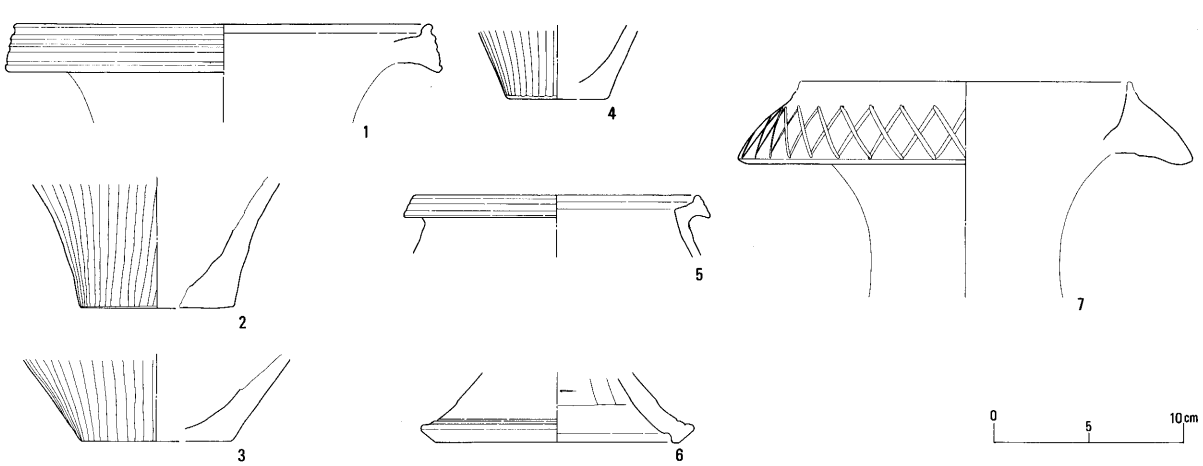
第23図　第10号住居跡



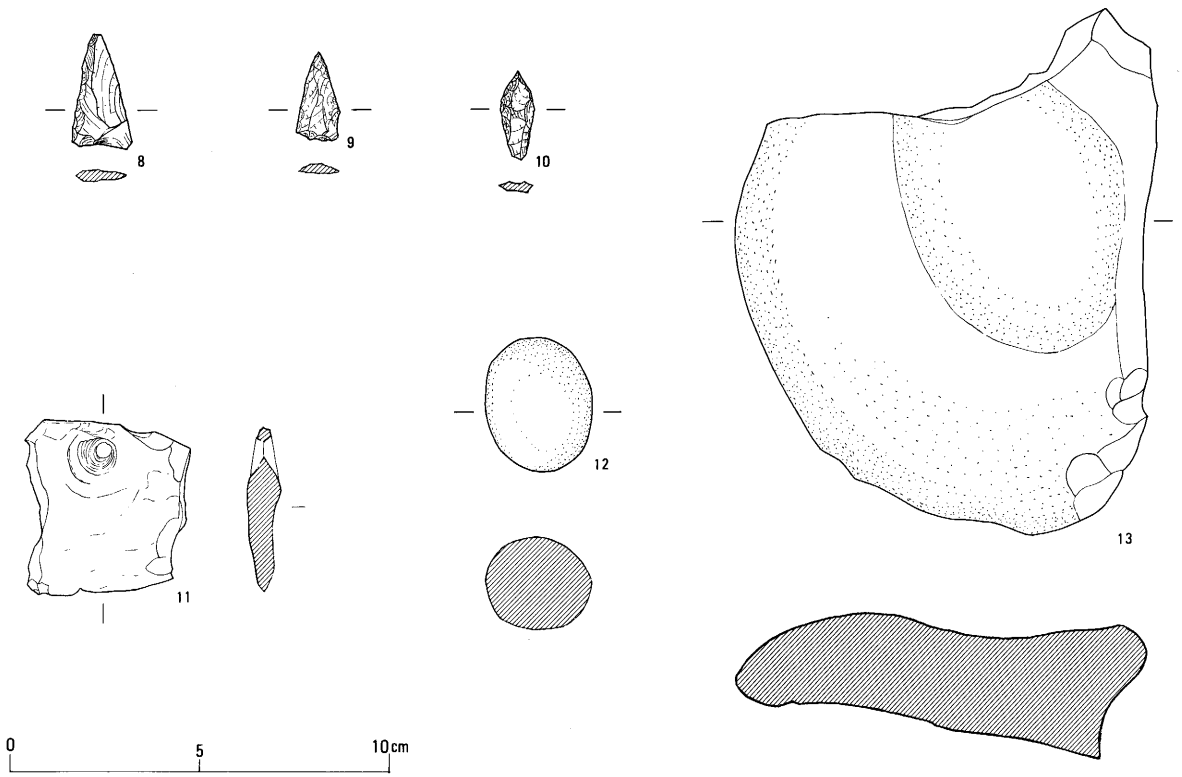
第24図　第10号住居跡土層断面図

ら床面までの深さは最も深い所で43㌢、壁溝の深さは4～8㌢である。中央ピットの大きさは径102㌢・深さ50㌢である。検出された柱穴の大きさはP1が径32㌢・深さ43㌢、P2が長径63㌢・短径44㌢・深さ43㌢、P3が長径45㌢・短径19㌢、深さ46㌢、P4が径45㌢・深さ48㌢、P5が径51㌢・深さ60㌢、P6が径41㌢・深さ43㌢である。中央ピット南東隣りの土壙は径103㌢・深さ6㌢を測り、ここから床溝状の溝が壁を越えて伸びA-7号土壙に繋がっている。住居跡と溝・土壙の関係は不明である。しかし、壁から150㌢ほど南西に伸びている短い溝は間違いなくこの住居跡に伴うものである。

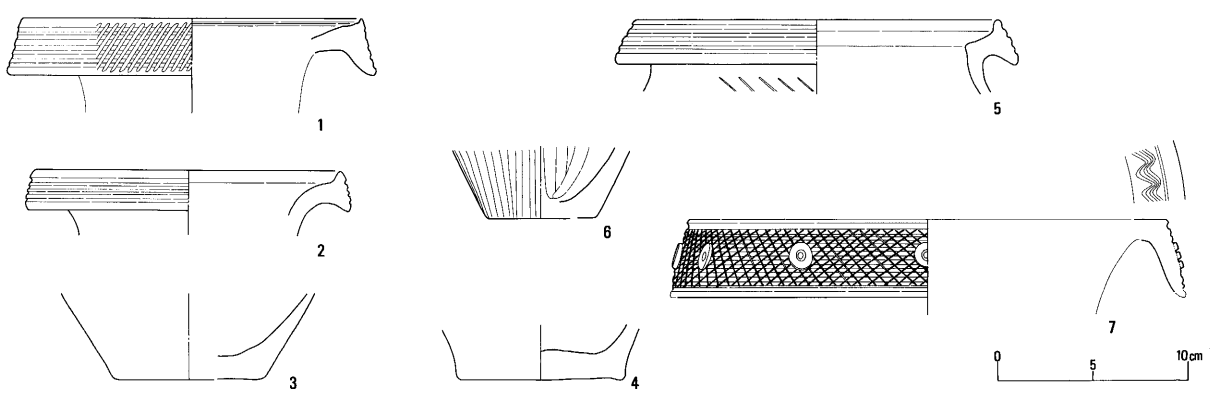
第10号住居跡には西壁を除き三辺を囲むように溝が掘られている。この溝は第10-b号住居跡のために掘られた溝で斜面を流れる雨水を防ぐものと思われる。深さは最も深いところで40㌢である。段状遺構・溝・掘立柱建物と重複関係にあるが残念ながら新旧は不明である。



第25図　第10号住居跡出土遺物1



第26図　第10号住居跡出土遺物２



第27図　第10号住居跡関連溝出土遺物

第10号住居跡出土遺物（第25図）

単位 cm

番号	器種	大きさ	形態手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壷	口径21.5 現存高2.5	口縁部に凹線４条を施す。	砂粒を含む。焼成良好。橙5YR6/6。口縁部10%現存。	第10-b号住居跡出土。
2	壷	底径8.1 現存高6.6	胴部外面は箆磨き。内面は不明。	砂粒を含む。焼成良好。橙7.5YR7/6。底部30%現存	第10-b号住居跡壁溝出土。
3	壷	底径8.0 現存高4.3	胴部外面は箆磨き。内面は不明。	砂粒を含む。焼成良好。にぶい黄橙10YR7/4。底部30%現存	第10-b号住居跡出土。
4	甕	底径5.4 現存高3.9	胴部外面は箆磨き。内面は不明。	砂粒を含む。焼成良好。明赤褐2.5YR5/6。底部20%現存。	〃
5	甕	口径14.9 現存高3.3	口縁部は凹線と思われるが摩滅している。調整不明。	砂粒を含む。焼成良好。にぶい黄2.5Y6/4。口縁部10%現存。	〃
6	高坏	底径12.9 現存高3.7	脚端部に凹線２条を施す。内面は箆削り。	微砂粒を含む。焼成良好。明赤褐5YR5/6。脚部10%現存。	〃
7	器台	最大径23.9 現存高3.8	肥厚した口縁部に箆による斜格子目文を施す。	砂粒を含む。焼成良好。明黄褐10YR7/6。口縁部40%残存。	第10-b号住居跡壁溝出土。

第10号住居跡出土遺物（第26図）　　単位 cm

番号	器種	大きさ	形態手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
8	石鏃	鏃身長3.0 幅1.6 厚さ0.4	先端部が破損している。凹基式石鏃。	石材はサヌカイト。	第10-b 号住居跡出土。
9	石鏃	鏃身長2.3 幅1.2 厚さ0.3	平基式石鏃。	石材はサヌカイト。	第10-b 号住居跡壁溝出土。
10	石鏃	鏃身長2.48 幅0.9 厚さ0.3	凸基式石鏃	石材はサヌカイト。	第10-b 号住居跡北側暗渠出土。
11	石包丁	残存長4.4 残存幅4.4 厚さ0.9	内孔0.4 外孔1.1	火を受けて赤化している。石材は緑泥片岩か。	第10-b 号住居跡床面直上出土。
12	磨石	長さ3.5 幅2.8 厚さ2.4		石材は安山岩。	第10-b 号住居跡床面出土。
13	石皿	残存長13.9 幅11.0		石材は砂岩。	〃

第10号住居跡関連溝出土遺物（第27図）　　単位 cm

番号	器種	大きさ	形態手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壷	口径17.7 現存高3.0	口縁部の５条の凹線上を篦で沈線を入れる。	砂粒を含む。焼成良好。にぶい橙 7.5YR6/4。口縁部20%現存。	
2	壷	底径16.0 現存高3.4	口縁部に凹線４条を施す。	砂粒を含む。焼成良。橙 7.5YR7/6。底部10%現存。	
3	壷	底径7.8 現存高3.5	胴部外面は篦磨きと思われる。内面は不明。	粒の揃った砂粒を多量に含む。焼成良好。灰黄褐10YR4/2。底部30%現存。	
4	壷	底径8.3 現存高3.0	調整は不明。	砂粒を含む。焼成良好。にぶい赤褐 5YR5/4。底部70%現存。	
5	甕	口径19.0 現存高3.9	口縁部は凹線４条を施す。	砂粒を含む。焼成良。にぶい黄橙 10YR7/4。口縁部10%現存。	
6	甕	底径5.7 現存高3.8	胴部外面篦磨き。内面は指ナデ。	粒の揃った砂粒を多量に含む。焼成良好。にぶい赤褐5YR5/4。底部40%現存。	
7	器台	最大径26.9 現存高4.8	垂下した口縁部に篦による斜格子目文と円形浮文を施す。	砂粒を含む。焼成良。橙 7.5YR7/6。口縁部10%残存。	

第11号住居跡（第28図）

9-c-3で検出された住居跡である。第12号住居跡と重複関係にあり、これより新しい。

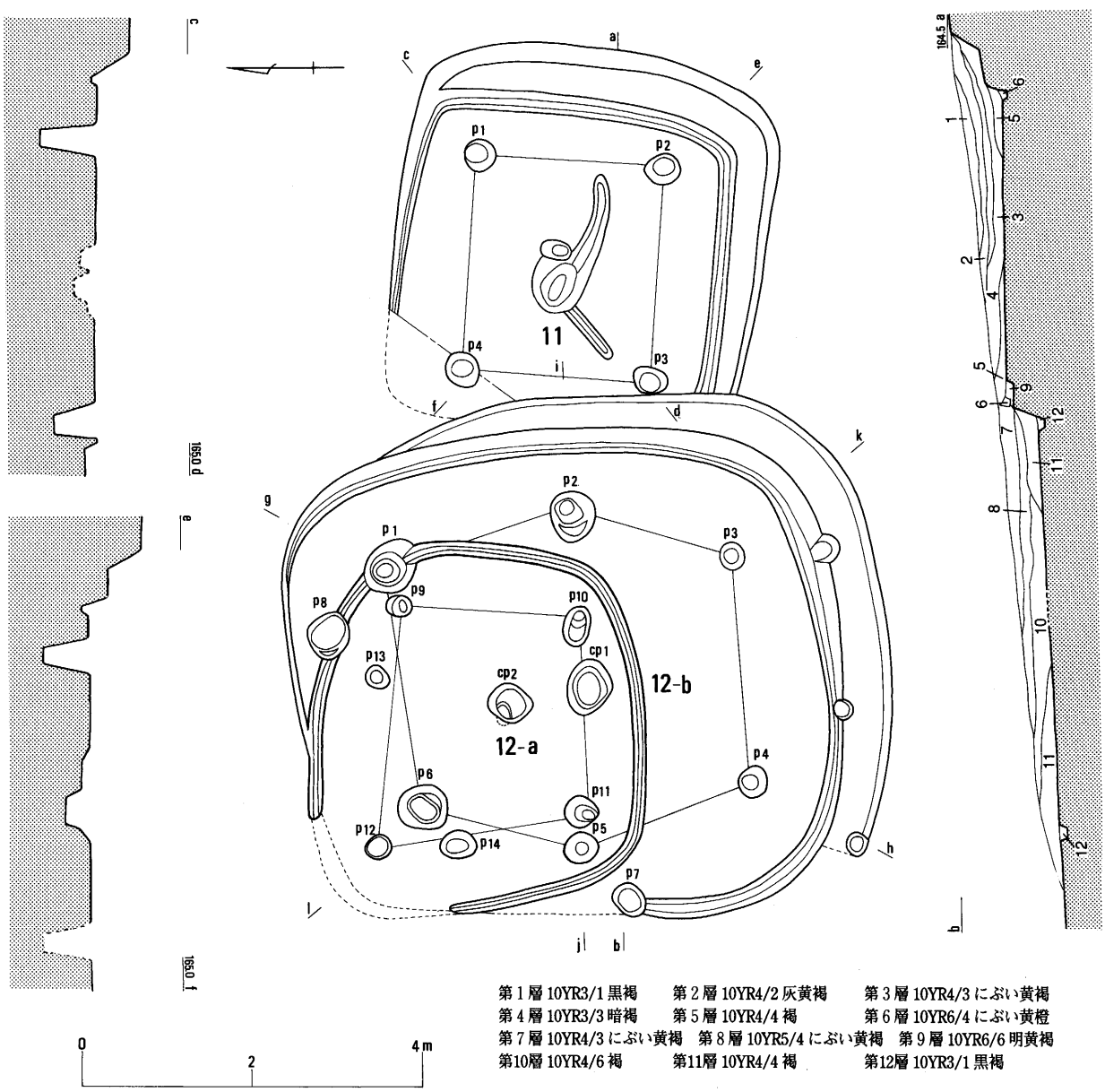
４本柱穴の隅丸方形を呈するこの住居跡は東壁と南壁にテラスをもち、南北軸が4.34㍍・東西軸が4.4㍍を測る。確認面からテラスまでは最も深いところで40㌢、テラスから床面までの深さは20㌢である。中央ピットは長径が推定で76㌢・短径65㌢で深さは30㌢である。この中央ピットからは２本の床溝が伸びている。検出された柱穴の大きさはP1が径36㌢・深さ65㌢、P2が径41㌢・深さ49㌢、P3が径42㌢・深さ60㌢、P4が径40㌢・深さ48㌢、P5が長径36㌢・短径22㌢・深さ18㌢である。

第12号住居跡（第28図）

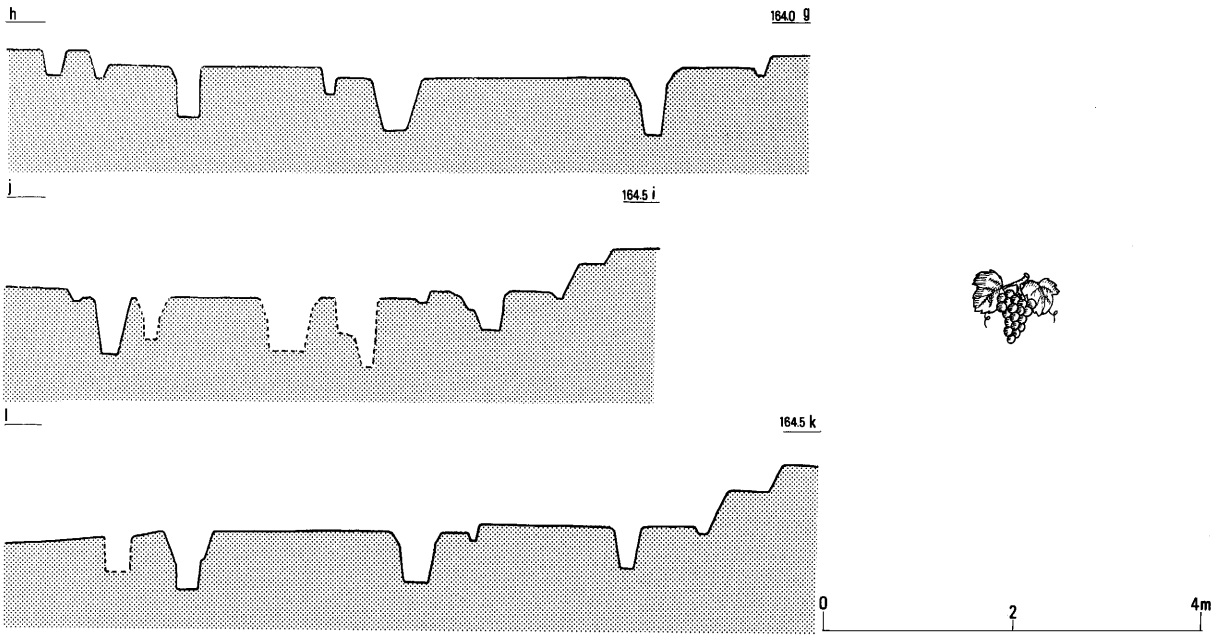
9-A-3で検出された住居跡である。２軒の住居跡の重複で新しい住居跡を第12-b 号住居跡、古い住居跡を第12-a 号住居跡とする。

第12-a号住居跡は第12-b号住居跡の床面上で検出された住居跡である。プランは隅丸のやや歪な長方形を呈する。長辺は4.4㍍・短辺は推定で3.96㍍である。中央ピットのCP2は二段に掘り込まれている。径は48㌢・深さは25㌢、最深部は53㌢である。検出された柱穴の大きさはP9が径30㌢・深さ48㌢、P10が長径43㌢・短径30㌢・深さ74㌢、P11が径41㌢・深さ44㌢、P12が径31㌢・深さ36㌢、P13が径30㌢・深さ46㌢、P14が長径42㌢・短径34㌢・深さ36㌢である。

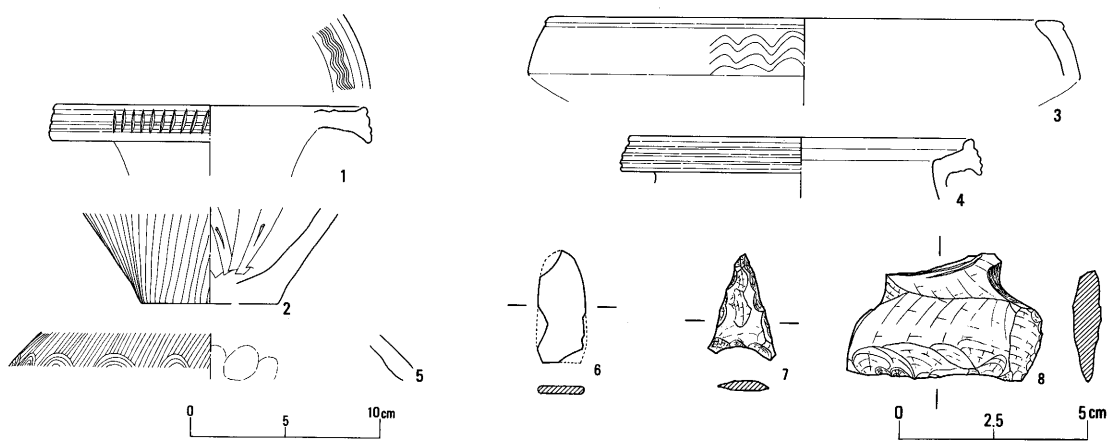
第12-b号住居跡は6本柱穴で隅丸長方形を呈する。この住居跡も東壁と南壁にテラスをもち、長辺が7.04㍍・短辺が推定で6.1㍍である。確認面からテラスまでは最も深いところが26㌢、テラスから床面までの深さは36㌢である。中央ピットのCP1は長径が66㌢・短径55㌢・深さは56㌢である。検出された柱穴の大きさはP1が長径71㌢・短径54㌢・深さ68㌢、P2が径58㌢・深さ40㌢、P3が径30㌢・深さ44㌢、P4が径38㌢・深さ47㌢、P5が径39㌢・深さ58㌢、P6が径56㌢・深さ55㌢、P7が径41㌢・深さ35㌢、P8が径56㌢・深さ31㌢である。南壁の3本の柱穴は第5号掘立柱建物のものである。



第28図　第11・12号住居跡



第29図　第12号住居跡断面図



第30図　第11・12号住居跡出土遺物

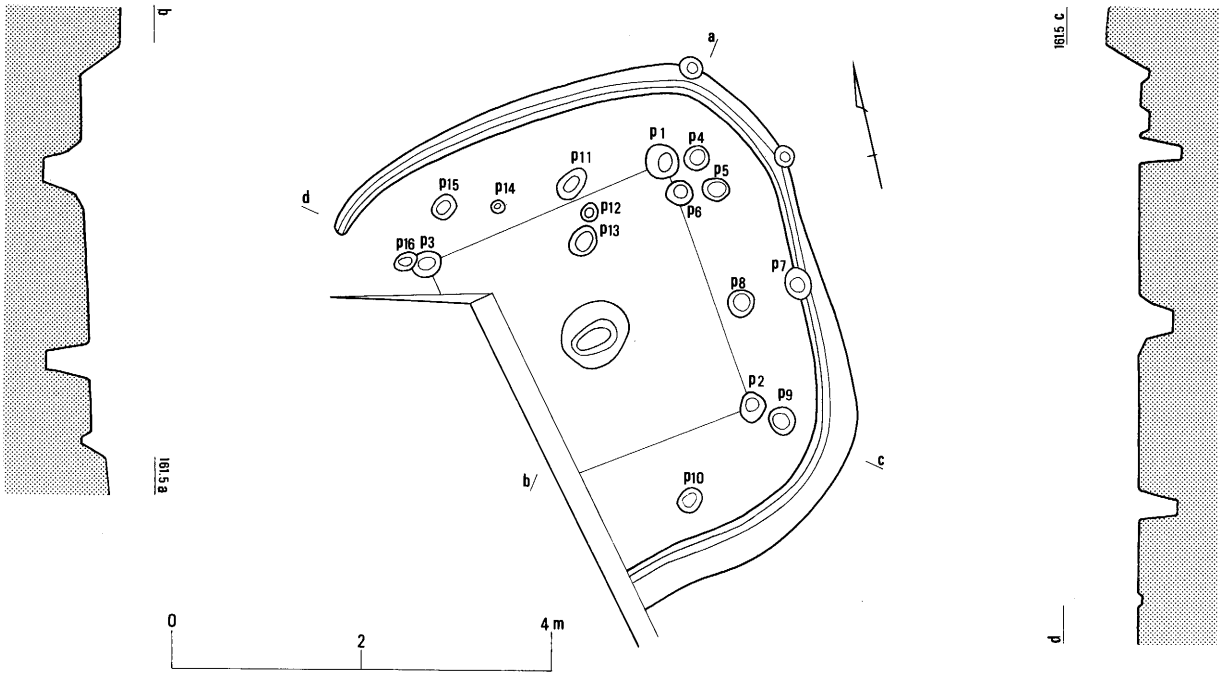
第11号・12号住居跡出土遺物（第30図）

単位 cm

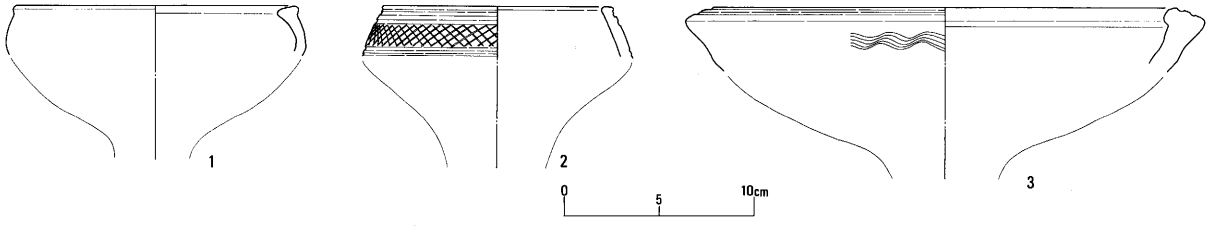
番号	器種	大きさ	形態手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壷	口径18.2 現存高1.9	口縁部に凹線と箆による刻目を施す。内面に6条の櫛描き文。	砂粒を含む。焼成良。にぶい黄橙10YR7/4。口縁部10%現存。	第11号住居跡出土。
2	壷	底径7.2 現存高5.1	胴部外面は箆磨き。内面は箆削り。	砂粒を含む。焼成良好。にぶい黄橙10YR6/4。底部30%現存。	〃
3	高坏	口径25.3 現存高3.1	胴部外面に櫛描き波状文。内面は不明。	砂粒を含む。焼成良。にぶい黄橙10YR7/4。口縁部10%現存。	〃
4	甕	口径18.0 現存高3.2	口縁部に凹線4条を施す。端部は大きく立ち上がる。	砂粒を含む。焼成良好。橙7.5YR7/6。口縁部30%現存。	〃
5	壷	径21.2 現存高2.4	箆磨きの後に櫛描き波状文を施す。内面は指頭による圧痕。	砂粒が少ない。焼成良好。にぶい赤褐5YR5/4。胴部10%現存。	第12-b号住居跡出土。
6	鉄片	長さ3.0 幅1.2 厚さ0.2	錆化が進み厚さが2㍉となっているが実際は1㍉程度と思われる。鉄鏃ないしは鉈の先端部。		第11号住居跡出土。
7	石鏃	鏃身長2.8 幅1.8 厚さ0.3	凹基式石鏃。	石材はサヌカイト。	第12-b号住居跡出土。
8	打製石包丁	残存高3.4 残存幅5.2 厚さ0.8	抉りの部分が摩滅している。	石材はサヌカイト。	〃

第13号住居跡（第31図）

9-A-4で検出された住居跡である。一辺が5.4㍍の隅丸方形を呈する4本柱穴の住居跡である。確認面から床面までは最も深いところで40㌢、壁溝の深さは6㌢である。中央ピットは長径が76㌢・短径62㌢で深さは32㌢である。検出された柱穴の大きさはP1が径35㌢・深さ43㌢、P2が径28㌢・深さ43㌢、P3が径31㌢・深さ43㌢である。この住居跡の床面検出時に多くの炭化材と焼土を検出しており、火災住居と思われる。この他に13本の柱穴が住居跡内で発見されているがこの住居跡とは関係は認められない。P4以下の大きさは次のとおりである。P4は径24㌢・深さ18㌢、P5は径28㌢・深さ7㌢、P6は径23㌢・深さ7㌢、P7は径29㌢・深さ11㌢、P8は径27㌢・深さ12㌢、P9は径27㌢・深さ7㌢、P10は径26㌢・深さ12㌢、P11は長径38㌢・短径23㌢・深さ28㌢、P12は径19㌢・深さ12㌢、P13は長径33㌢・短径30㌢・深さ13㌢、P14は径14㌢・深さ9㌢、P15は径27㌢・深さ27㌢、P16は長径20㌢・短径16㌢・深さ17㌢である。



第31図　第13号住居跡



第32図　第13号住居跡出土遺物

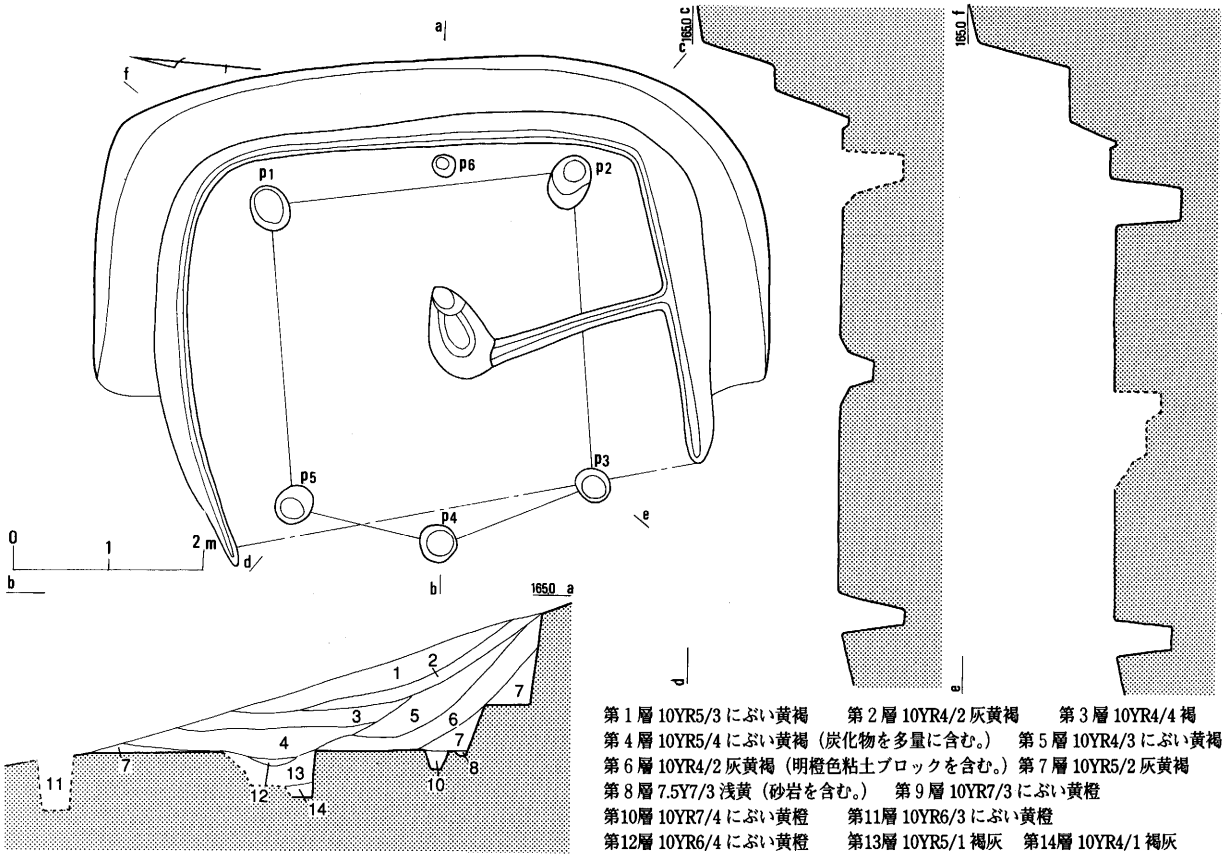
第13号住居跡出土遺物（第32図）

単位 cm

番号	器種	大きさ	形態手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	高坏	口径14.6 現存高2.6	口縁部の両端が肥厚している。	砂粒を含む。焼成良好。にぶい黄橙10YR7/4。口縁部10%現存。	
2	高坏	口径12.0 現存高2.7	2条1単位の凹線文の間に篦で斜格子目文を施す。	微砂粒を含む。焼成良好。橙5YR6/6。口縁部10%現存。	
3	高坏	口径24.2 現存高3.3	口縁端部が内側に肥厚して上面に凹線を2条もつ。坏部外面に櫛描き波状文を施す。	砂粒を含む。焼成良。にぶい黄橙10YR7/4。口縁部30%現存。	

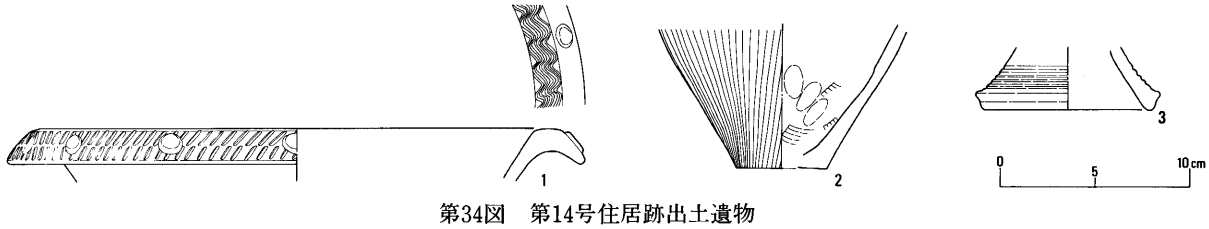
第14号住居跡（第33図）

7-c-2の急斜面で検出された住居跡である。南北辺が7.2㍍、東西辺の現存長が4.8㍍の隅丸方形を呈する５本柱穴の住居跡である。確認面からテラスまでは最も深いところが84㌢、テラスから床面までの深さは40㌢、壁溝の深さは５～７㌢である。中央ピットは長径が100㌢・短径64㌢・深さは浅いところが34㌢、最も深いところが46㌢である。柱穴の大きさは、P1が長径48㌢・短径40㌢・深さ74㌢、P2が長径59㌢・短径44㌢・深さ64㌢、P3が径36㌢・深さ63㌢、P4が径40㌢・深さ60㌢、P5が長径44㌢・短径36㌢・深さ70㌢、P6が径24㌢・深さ20㌢である。



第１層 10YR5/3 にぶい黄褐　第２層 10YR4/2 灰黄褐　第３層 10YR4/4 褐
第４層 10YR5/4 にぶい黄褐（炭化物を多量に含む。）　第５層 10YR4/3 にぶい黄褐
第６層 10YR4/2 灰黄褐（明橙色粘土ブロックを含む。）第７層 10YR5/2 灰黄褐
第８層 7.5Y7/3 浅黄（砂岩を含む。）　第９層 10YR7/3 にぶい黄橙
第10層 10YR7/4 にぶい黄橙　第11層 10YR6/3 にぶい黄橙
第12層 10YR6/4 にぶい黄橙　第13層 10YR5/1 褐灰　第14層 10YR4/1 褐灰

第33図　第14号住居跡



第34図　第14号住居跡出土遺物

第14号住居跡出土遺物（第34図）　　単位 cm

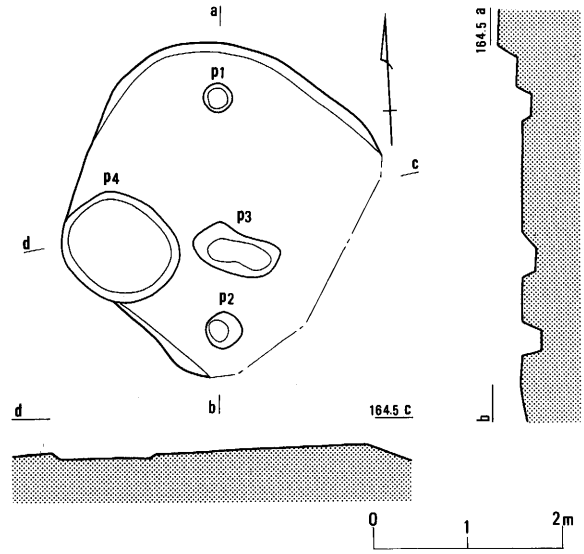
番号	器種	大きさ	形態手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壷	口径29.6 現存高3.7	口縁部に櫛描き波状文と円形浮文を施す。	砂粒を含む。焼成良好。橙 5YR6/6。口縁部20%現存。	
2	甕	底径4.8 現存高7.6	胴部外面は箆磨き。内面は木口状工具による成形の後に指頭により押さえる。	微砂粒を含む。焼成良好。橙 5YR6/6。底部40%現存。	
3	高坏	底径8.8 現存高3.3	脚部に凹線を５条もつ。	砂粒を含む。焼成良好。にぶい黄橙 10YR6/3。脚部20%現存。	

b 小竪穴状遺構

第1号小竪穴状遺構（第35図）

16-d-0で検出された遺構である。南北の長さが3.1㍍、東西の現存長が2.9㍍の不正方形を呈すると思われる遺構である。南東壁は斜面のため消失している。

確認面から床面までの深さは最も深いところで20㌢である。床面からは2本の柱穴と2基の土壙が検出されている。大きさはP1が径32㌢・深さ14㌢、P2が径40㌢・深さ14㌢、P3が長径90㌢・短径42㌢・深さ14㌢、P4が長径90㌢・短径42㌢・深さ14㌢である。出土遺物は内面を指ナデした甕である。

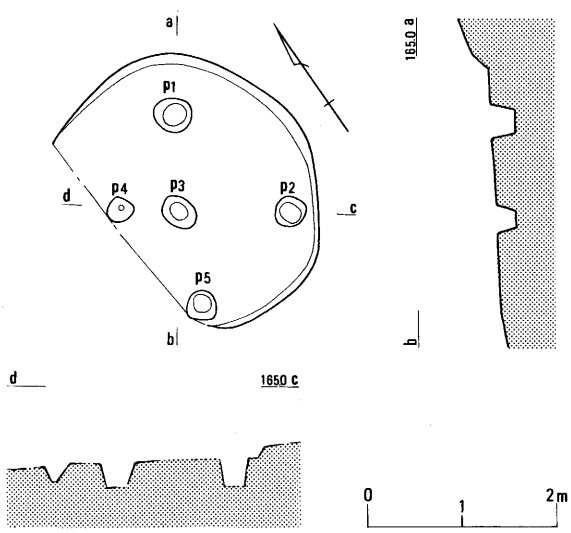


第35図 第1号小竪穴状遺構

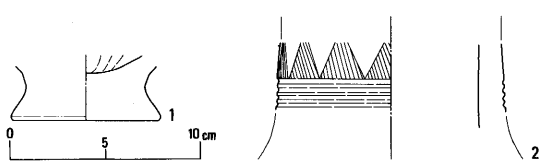
第2号小竪穴状遺構（第36図）

11-c-1で検出された遺構である。南北の長さが2.96㍍、東西の現存長が2.16㍍の円形を呈すると思われる遺構である。西壁は斜面のため消失している。

確認面から床面までの深さは最も深いところで18㌢である。床面からは5本の柱穴が検出されている。大きさはP1が径36㌢・深さ26㌢、P2が径33㌢・深さ27㌢、P3が長径41㌢・短径28㌢・深さ22㌢、P4が径26㌢・深さ18㌢である。P5が径31㌢・深さ16㌢である。この遺構より鋸歯文を施した器台の破片が1片出土している。



第36図 第2号小竪穴状遺構

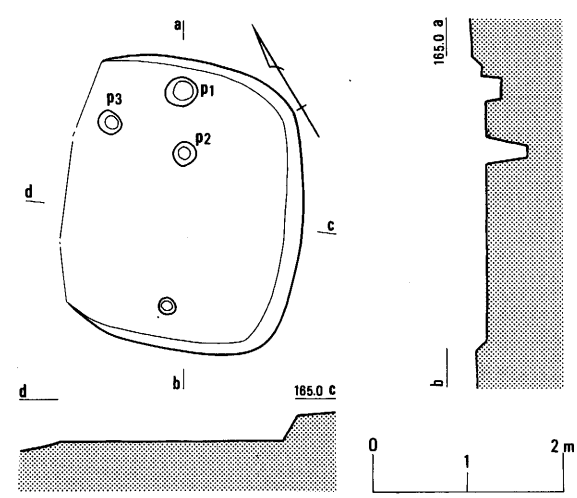


第37図 第1・2号小竪穴状遺構出土遺物

第3号小竪穴状遺構（第38図）

9-a-2で検出された遺構である。南北の長さが3.0㍍、東西の現存長が2.5㍍で隅丸方形を呈すると思われる遺構である。北西壁は斜面のため消失している。

確認面から床面までの深さは最も深いところで26㌢である。床面からは4本の柱穴が検出されている。大きさはP1が径33㌢・深さ18㌢、P2が径25㌢・深さ43㌢、P3が長径90㌢・短径42㌢・深さ14㌢、P4が径24㌢・深さ9㌢である。



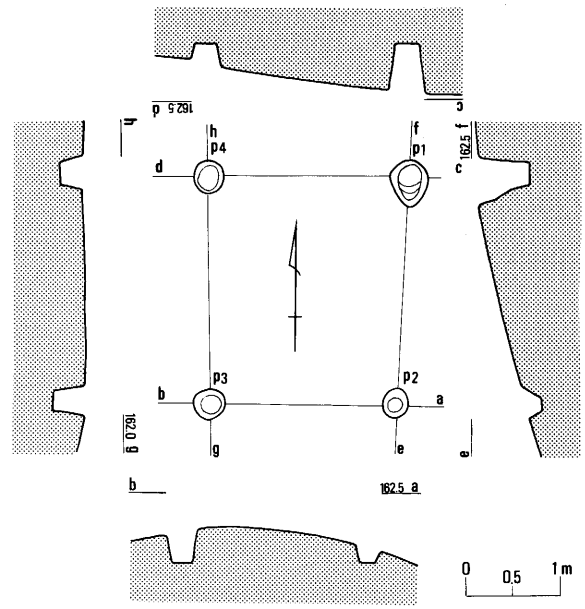
第38図 第3号小竪穴状遺構

c　掘立柱建物跡

第１号掘立柱建物跡（第39図）

17-A-1で検出された建物跡である。P1とP2の桁の長さが2.43㍍、P3とP4の桁の長さが2.36㍍で、P1とP4の梁の長さが2.1㍍、P2とP3の梁の長さが1.95㍍である。

柱穴の大きさはP1が長径42㌢・短径40㌢・深さ54㌢、P2が径27㌢・深さ23㌢、P3が径35㌢・深さ33㌢、P4が径33㌢・深さ24㌢である。高床式倉庫と考えられる。

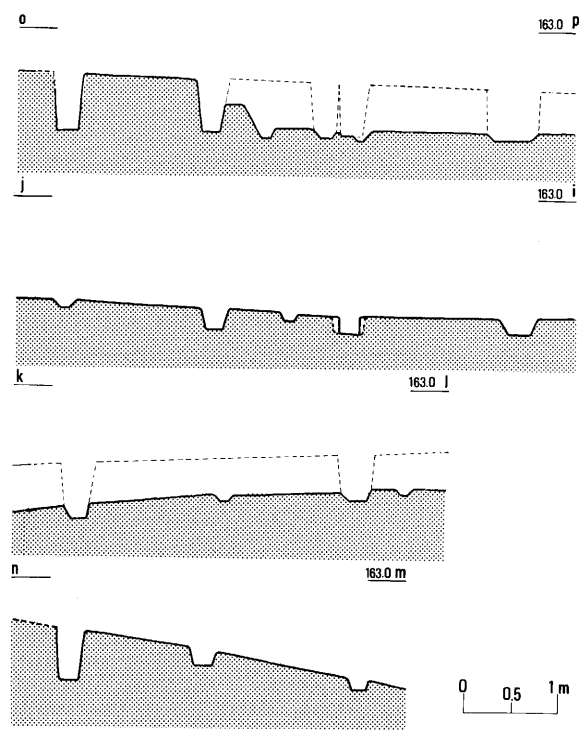


第39図　第1号掘立柱建物跡

第２号掘立柱建物跡（第10・40図）

10-A-1で検出された建物跡である。第５号住居跡第４号溝と重複しており、これより新しい。

建物の大きさは梁２間×桁３間でP11からP15の桁の長さが4.8㍍、P19からP16の桁の長さが4.8㍍である。梁の長さはP11からP19の長さが3.03㍍、P15からP16の長さが3.1㍍である。梁のP11とP19の間にはP20が検出されたが、P15とP16の間に柱穴は確認できなかった。また、P11とP15の桁にP13とP14が検出されたが、P14が本来の柱穴の位置である。柱穴の大きさはP11が径28㌢・深さ58㌢、P12が径37㌢・深さ56㌢、P13が径23㌢・深さ8㌢、P14が径20㌢・深さ5㌢、P15が長径50㌢・短径32㌢・深さ18㌢、P16が長径41㌢・短径35㌢・深さ18㌢、P17が径30㌢・深さ18㌢、P18が長径43㌢・短径36㌢・深さ20㌢、P19が径27㌢・深さ8㌢、P20が径27㌢・深さ23㌢である。



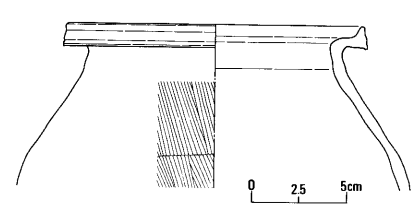
第40図　第２号掘立柱建物跡断面図

第３号掘立柱建物跡（第42図）

9-A-2で検出された建物跡である。

建物の大きさは梁１間×桁３間でP1からP4の桁の長さが4.96㍍、P8からP5の桁の長さが4.9㍍である。梁の長さはP1からP8の長さが3.23㍍、P4からP5の長さが3.1㍍である。

柱穴の大きさはP1が長径40㌢・短径35㌢・深さ68㌢、P2が長径35㌢・短径27㌢・深さ50㌢、P3が長径33㌢・短径29㌢・深さ36㌢、P4が長径43㌢・短径40



第41図　第３号掘立柱建物跡P7出土遺物

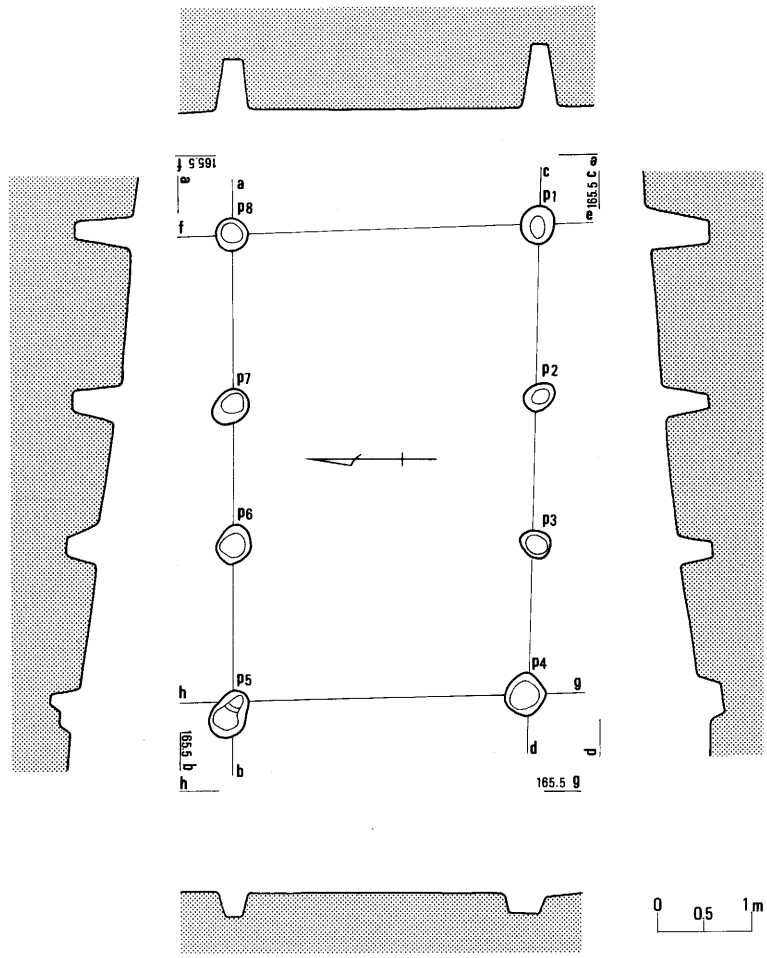
㌢・深さ25㌢、P5が長径53㌢・短径39㌢・深さ30㌢、P6が長径43㌢・短径35㌢・深さ31㌢、P7が長径42㌢・短径33㌢・深さ50㌢、P8が径34㌢・深さ60㌢である。P7から口径15.4㌢の刷毛目を施した甕が出土している。

第4号掘立柱建物跡（第43図）

9-d-2で検出された建物跡である。第3号掘立柱建物跡の西隣に位置する。

建物の大きさはP1からP2の桁の長さが2.25㍍、P4からP3の桁の長さが2.15㍍である。梁の長さはP1からP4の長さが1.9㍍、P2からP3の長さが1.8㍍である。

柱穴の大きさはP1が径25㌢・深さ50㌢、P2が長径28㌢・短径22㌢・深さ18㌢、P3が長径29㌢・短径25㌢・深さ22㌢、P4が長径30㌢・短径25㌢・深さ40㌢である。



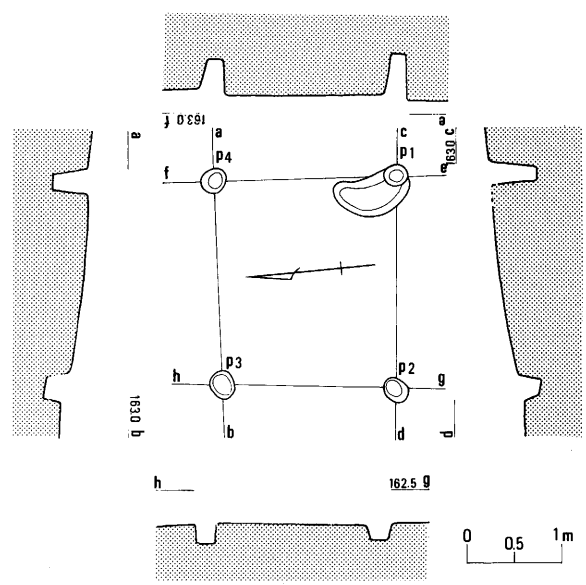
第42図　第3号掘立柱建物跡

第5号掘立柱建物跡（第44図）

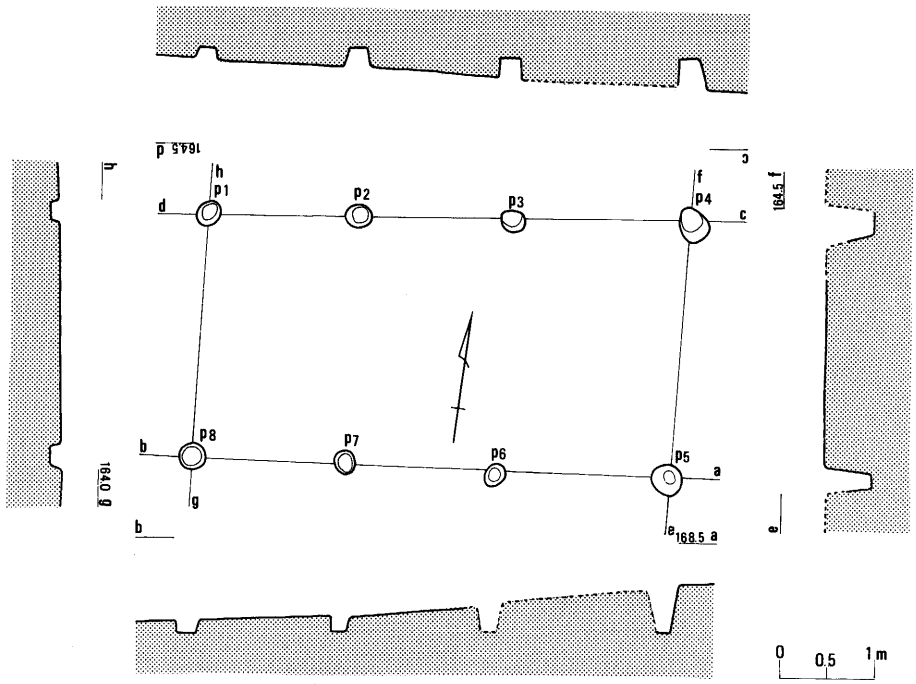
9-A-3で検出された建物跡である。第10号住居跡並びに第12号住居跡と重複関係にある。第10号住居跡との関係は不明だが第12号住居跡より新しい。

建物の大きさは梁1間×桁3間でP1からP4の桁の長さが5.12㍍、P8からP5の桁の長さが5.09㍍である。梁の長さはP1からP8の長さが2.25㍍、P4からP5の長さが2.7㍍である。

柱穴の大きさはP1が長径24㌢・短径28㌢・深さ12㌢、P2が長径28㌢・短径25㌢・深さ20㌢、P3が長径25㌢・短径22㌢・深さ20㌢、P4が長径38㌢・短径30㌢・深さ34㌢、P5が径33㌢・深さ50㌢、P6が長径26㌢・短径21㌢・深さ30㌢、P7が径22㌢・深さ16㌢、P8が径28㌢・深さ15㌢である。



第43図　第4号掘立柱建物跡

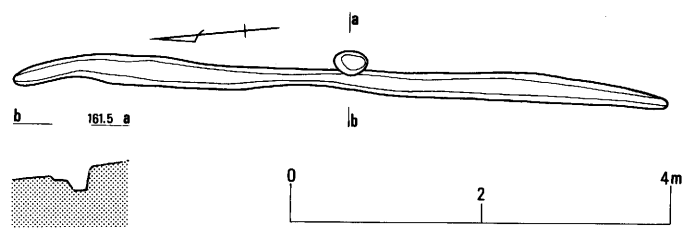


第44図　第５号掘立柱建物跡

d　段状遺構

第１号段状遺構（第45図）

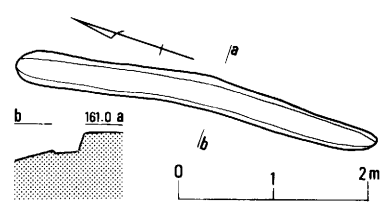
17-a-2の標高161㎝の等高線に沿って検出された遺構である。長さ6.9㍍、幅は最も広い所で31㌢、深さ20㌢の溝の状に検出されたが、本来は段状遺構と考えられる。



第45図　第１号段状遺構

第２号段状遺構（第46図）

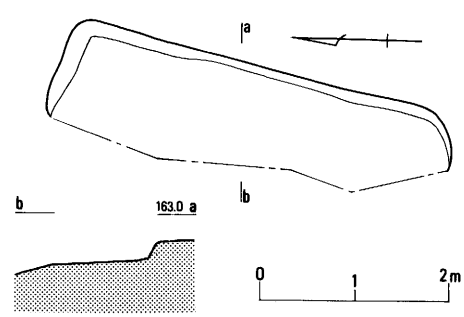
17-b-2の標高160.5㎝の等高線に沿って検出された遺構である。長さ3.9㍍、幅は最も広い所で37㌢、深さ20㌢の溝の状態で検出されたが本来は段状遺構と考えられる。



第46図　第２号段状遺構

第３号段状遺構（第47図）

16-a-1の標高162.5㎝の等高線に沿って検出された遺構である。長さ4.24㍍、幅は最も広い所で120㌢、深さは確認面から17㌢である。

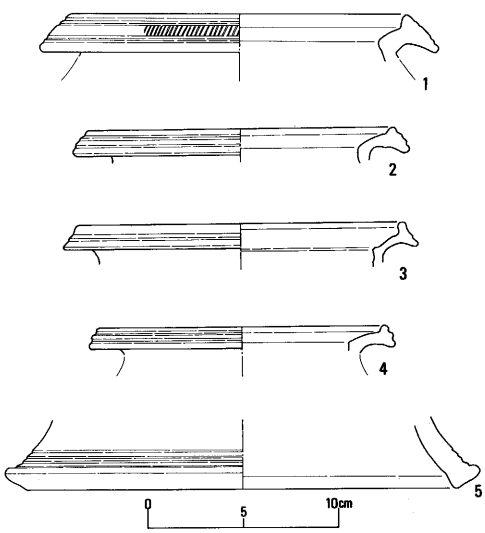


第47図　第３号段状遺構

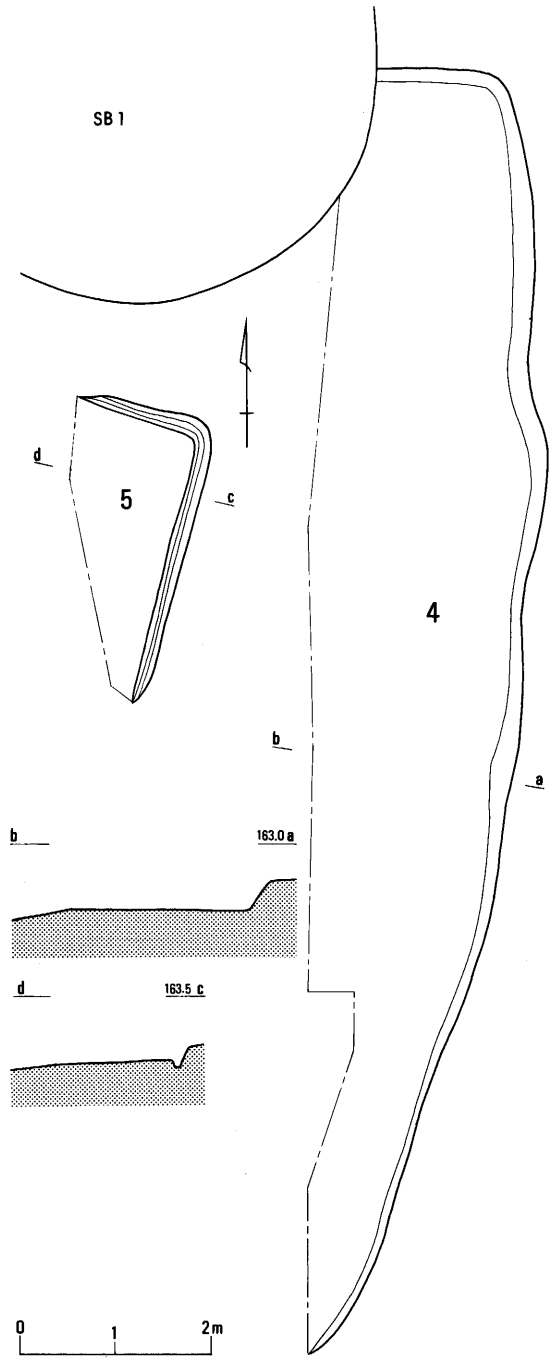
第４号段状遺構（第48図）

14-b-1から15-b-1の標高163㎝の等高線に沿って検出された遺構である。第１号住居跡と重複するが前後関係は不明である。長さは13.58㍍、幅は最も広い所で2.44㍍、確認面から床面までの深さは34㌢である。この遺構からは甕４点と器台１点が出土している。１は推定口径17.5㌢、現存高2.5㌢のにぶい黄橙色の甕であ

る。口縁部に篦で刻みを入れた後に凹線を施している。2は推定口径16.0㌢、現存高1.9㌢を測るにぶい黄橙色の甕である。口縁部に3条の凹線を施している。3は推定口径17.0㌢、現存高2.3㌢を測る橙色の甕である。口縁部の凹線は明確ではない。4は推定口径15.0㌢、現存高1.4㌢を測るにぶい浅黄色の土器である。胎土は精製されて緻密で、焼成は良好である。口縁部には非常に明瞭な2条の凹線を施している。5は推定底径21.0㌢、現存高3.8㌢を測るにぶい黄褐色の器台である。



第49図　第4号段状遺構出土遺物

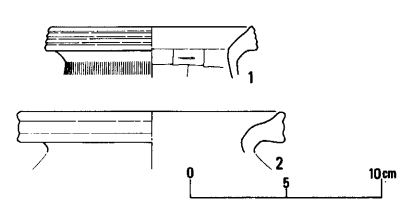


第48図　第4・5号段状遺構

第5号段状遺構（第48図）

第4号段状遺構の南隣り、標高162.5㍍の等高線に沿って検出された遺構である。長さは3.08㍍、幅は最も広い所で1.5㍍、確認面から床面までの深さは15㌢である。壁溝の幅は20㌢、深さは8㌢である。この遺構からは甕2点が出土している。

1は口径10.5㌢、現存高2.7㌢のにぶい橙色の甕である。口縁部の3本の凹線は不明瞭で退化している。2は口径13.2㌢、現存高2.1㌢を測るにぶい黄橙色の甕である。口縁部の2条の凹線は退化している。

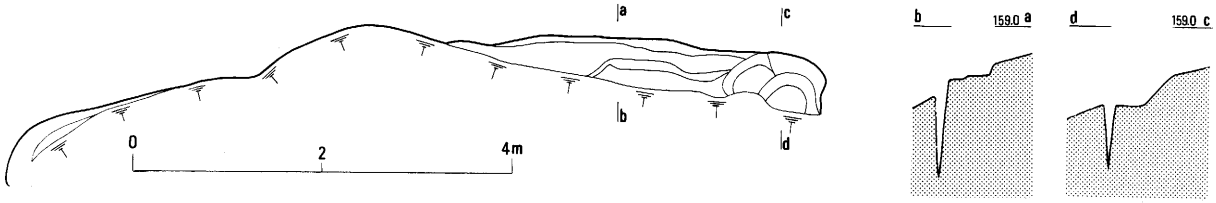


第50図　第5号段状遺構出土遺物

第6号段状遺構（第51図）

15-a-3の標高158.5㍍の等高線に沿って検出された遺構である。長さは8.62㍍、幅は最も広い所で62㌢である。床面と土壙は二段に形成されているが、これは地面のひび割れと陥没に伴うものらしい。

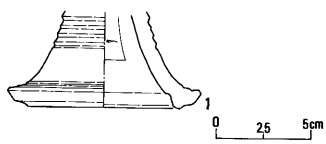
この遺構に沿って幅12㌢ほどの地割れが検出されている。このため遺構の大半が失われ形状が変形されている。



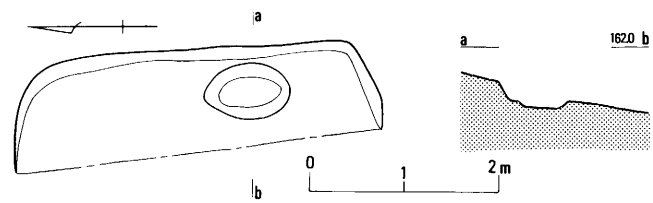
第51図　第６号段状遺構

第７号段状遺構（第52図）

14-A-2の標高160.5㍍の等高線に沿って検出された遺構である。長さは3.9㍍、幅は最も広い所で1.14㍍、確認面から床面までの深さは20㌢である。床面からは長径92㌢・短径59㌢・深さ８㌢の土壙が検出されている。この遺構からは高坏１点が出土している。底径は17.5㌢、現存高2.5㌢のにぶい赤褐色の土器である。外面には凹線を施し内面は篦削りされている。



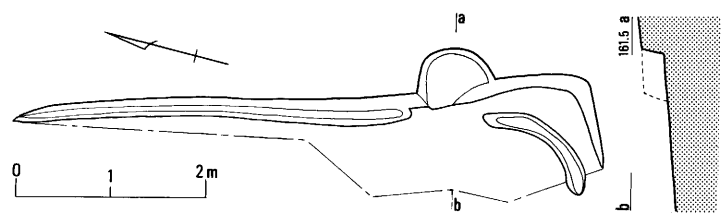
第53図　第７号段状遺構出土遺物



第52図　第７号段状遺構

第８号段状遺構（第54図）

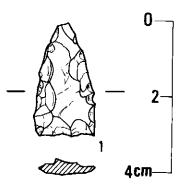
13-b-2の標高161㍍の等高線に沿って検出された遺構である。長さは6.22㍍、幅は最も広い所で1.3㍍、確認面から床面までの深さは30㌢である。壁溝の幅は20㌢、深さは6㌢である。



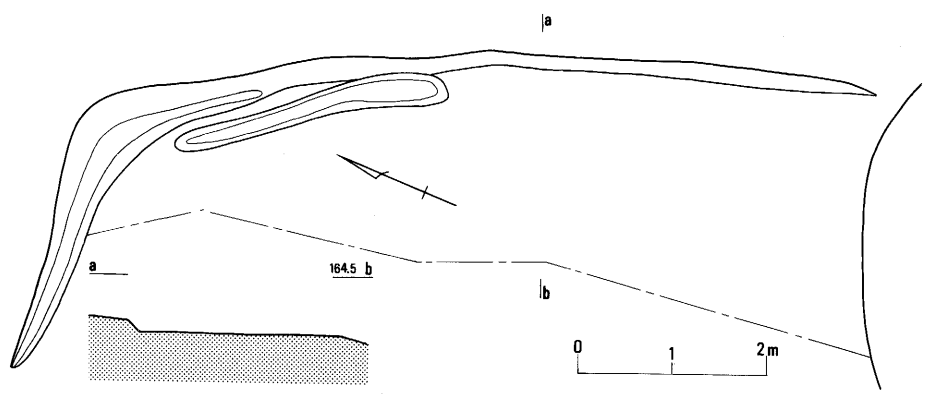
第54図　第8号段状遺構

第９号段状遺構（第55図）

第４号住居跡と重複関係にあるが前後は不明である。11-b-1から12-a-1にかけて検出された。長さは8.6㍍、幅は最も広い所で2.65㍍、確認面から床面までの深さは10㌢である。壁際に部分的に深さ８㌢ほどの溝をもっている。石鏃が床面上から１点出土している。



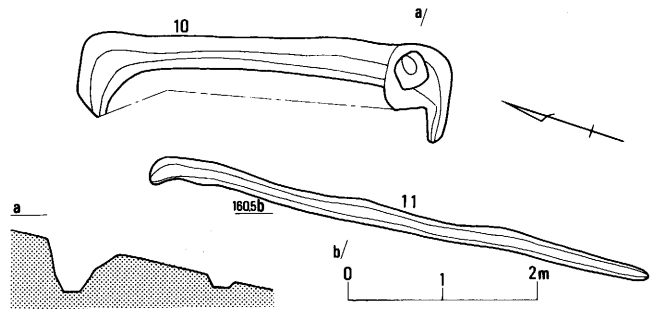
第56図　第９号段状遺構出土遺物



第55図　第9号段状遺構

第10号段状遺構（第57図）

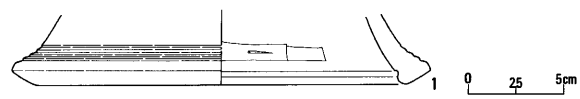
12-d-2の標高160㍍の等高線に沿って検出された遺構である。長さは3.95㍍、幅は最も広い所で76㌢、確認面から床面までの深さは16㌢、溝の深さは4㌢である。南隅の土壙の深さは40㌢である。



第57図　第10・11号段状遺構

第11号段状遺構（第57図）

第10号段状遺構の西隣りで検出された。長さは5.4㍍、幅は最も広い所で25㌢、溝の深さは4㌢である。この遺構からは器台が出土している。底径は19.3㌢の浅黄色の土器である。



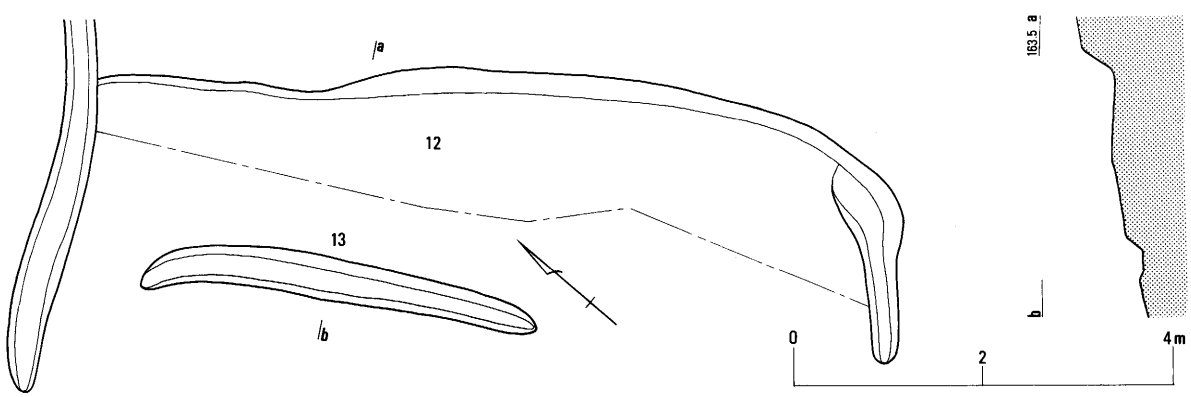
第58図　第11号段状遺構出土遺物

第12号段状遺構（第59図）

11-d-1の標高161㍍の等高線に沿って検出された遺構である。第4号溝と重複関係にあるが新旧は不明である。長さは8.65㍍、幅は最も広い所で1.6㍍、確認面から床面までの深さは30㌢、南隅の溝の深さは8㌢である。

第13号段状遺構（第59図）

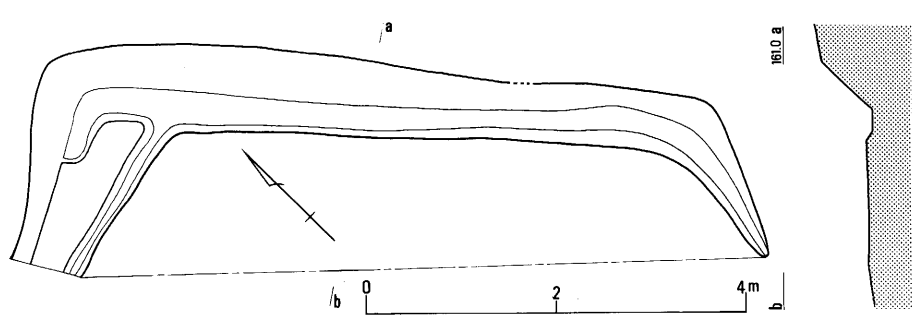
第12号段状遺構の西隣りで検出された。長さは4.24㍍・幅は46㌢・深さは5㌢である。



第59図　第12・13号段状遺構

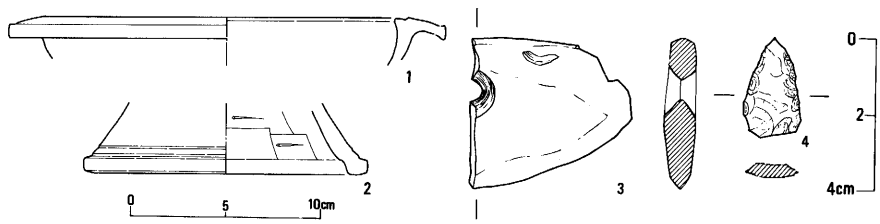
第14号段状遺構（第60図）

11-c-3の標高160.5㍍の等高線に沿って検出された遺構である。第8号住居跡から伸びる溝と重複関係にあるが新旧は不明である。長さは8㍍、幅は最も



第60図　第14号段状遺構

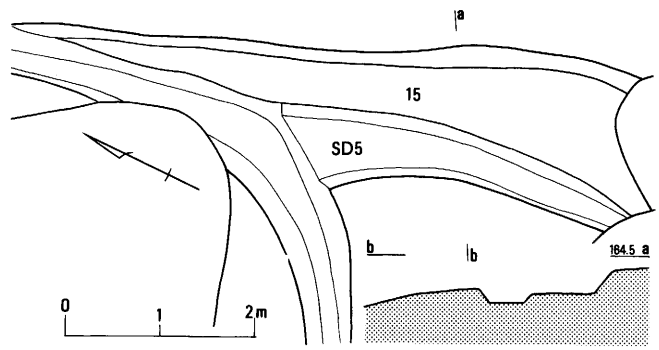
広い所で2.4㍍、確認面から床面までの深さは48㌢、溝の深さは8㌢である。出土遺物の1と2は異なる個体の高坏と思われる。2は内面を篦削りした底径13.5㌢と推定される脚部の破片である。3は幅4㌢・現存長4.3㌢・厚さ8㍉の安山岩の石包丁である。4は長さ2.7㌢・幅1.6㌢・厚さ4㍉のサヌカイトでできた石鏃である。



第61図　第14号段状遺構出土遺物

第15号段状遺構（第62図）

10-d-2の標高163.5㍍の等高線に沿って検出された遺構である。第10号住居跡関連溝と重複関係にあり、これより古い。現存長は6.6㍍、幅は最も広い所で1.2㍍、確認面から床面までの深さは23㌢である。



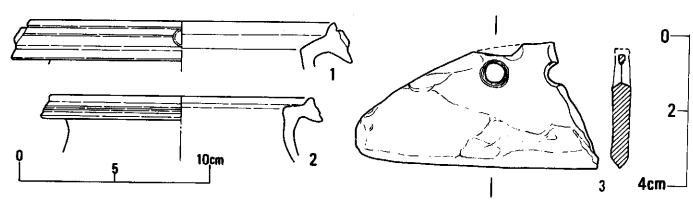
第62図　第15号段状遺構

第16号段状遺構（第64図）

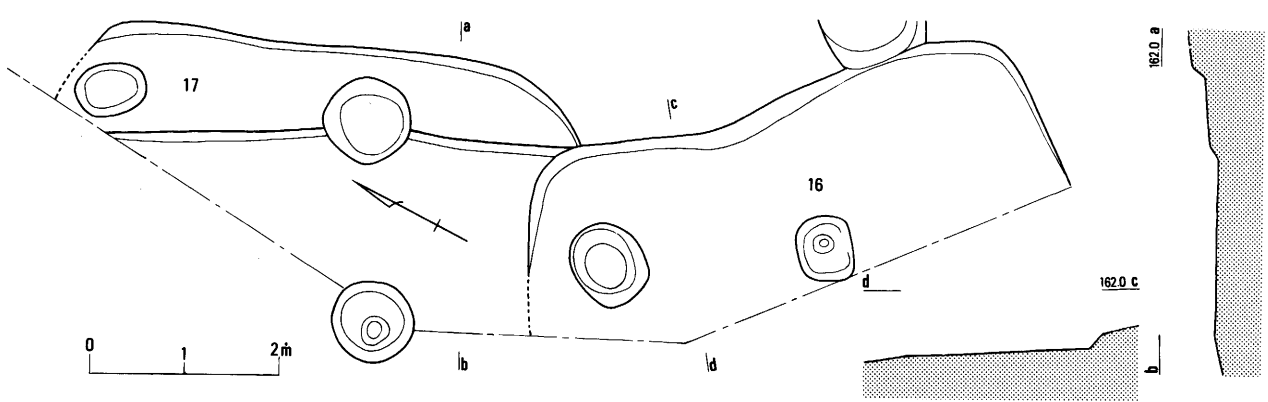
10-d-3の標高161.5㍍の等高線に沿って検出された遺構である。第17号段状遺構と重複関係にありこれより新しい。長さは5.6㍍、幅は最も広い所で2.2㍍、確認面から床面までの深さは20㌢である。A-8号・13号・14号土壙と重複し、A-8号土壙より古い。他の遺構との新旧関係は不明である。

第17号段状遺構（第64図）

第16号段状遺構と重複関係にある。長さは5.3㍍、幅は最も広い所で2.9㍍、確認面から床面までの深さは15㌢である。この遺構も2つの段状遺構が重複したものかもしれない。A-11号・12号・15号土壙と重複しているが新旧関係は不明である。出土遺物の1は推定口径16㌢のにぶい赤褐色の甕である。2は口径13.6㌢のにぶい黄橙色の甕で口縁部に凹線を施している。1・2とも調整は不明である。3は現存長6.4㌢・幅3.3㌢・厚さ5㍉の安山岩を用いた石包丁である。



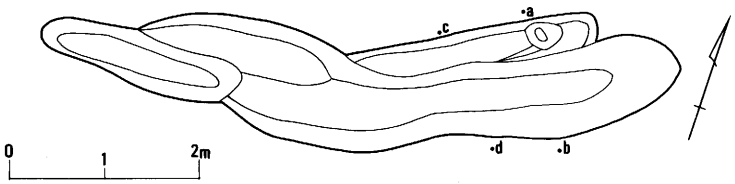
第63図　第17号段状遺構出土遺物



第64図　第16・17号段状遺構

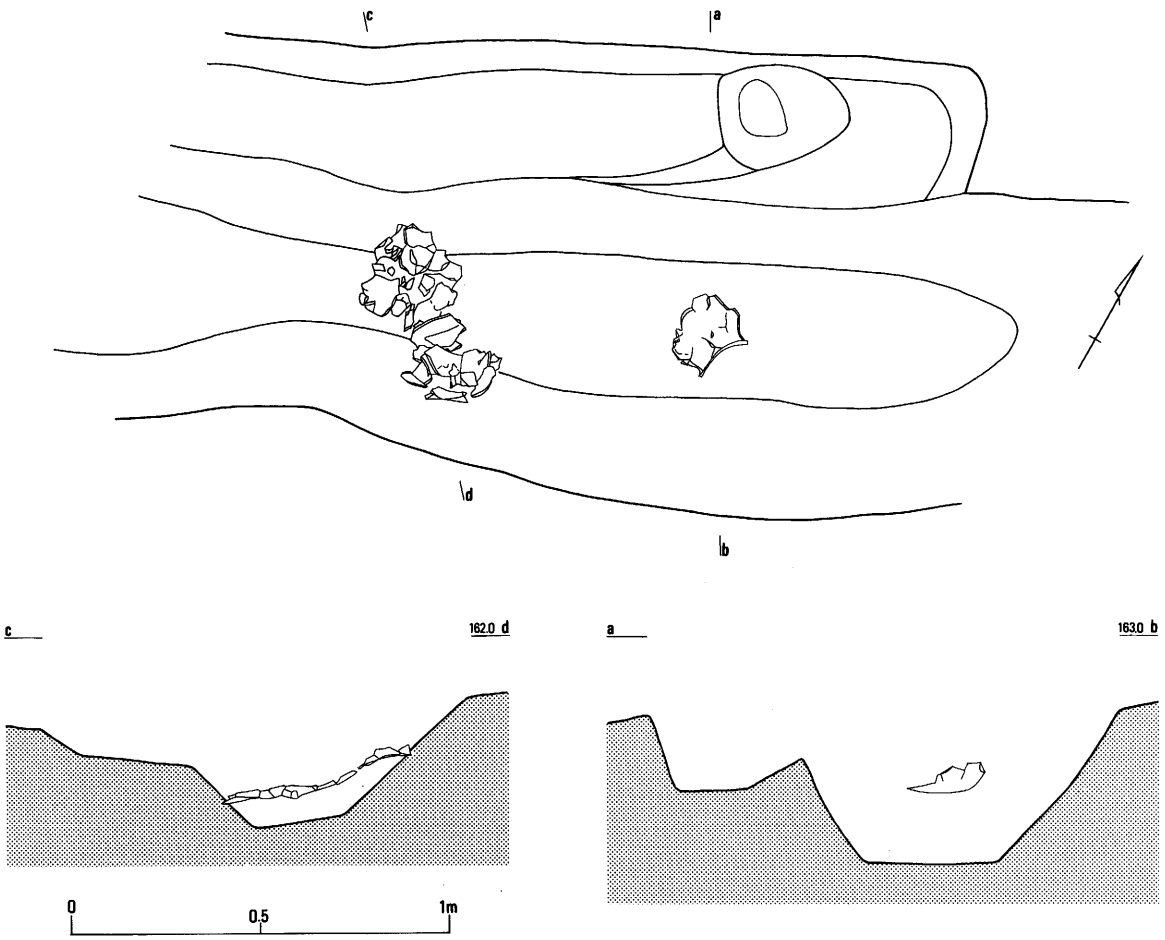
e 溝

第1号溝（第65・66図）



第65図 第1号溝

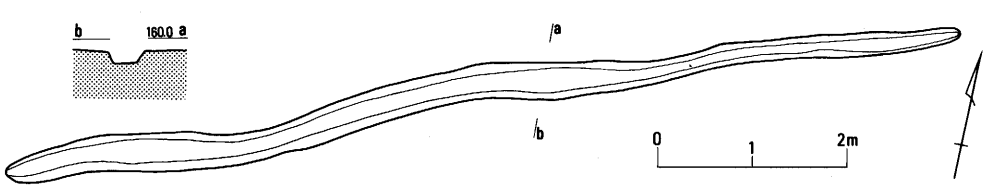
14-d-1から14-b-1にかけて検出された遺構である。溝と言うより土壙とした方が正しいかもしれない。斜面に沿って造られている。この溝は推定で幅85㌢と45㌢の2条の溝が重複しており、土器が出土した方の溝が新しいと思われる。2条の溝を合わせた長さは6.72㍍・幅は最も広いところで1.22㍍・深さは40㌢である。



第66図 第1号溝遺物出土状況図

第2号溝（第67図）

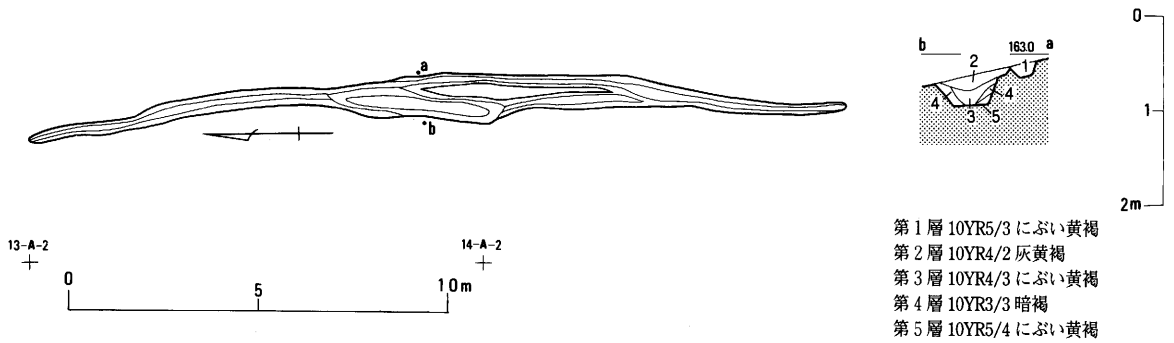
14-a-2から14-a-3にかけて検出された遺構である。溝の一部は第3号住居跡と重複していると推測される。もしこの推測が正しければ第3号住居跡より新しい。検出された溝の長さは10.17㍍・幅は最も広いところで40㌢・深さは12㌢である。

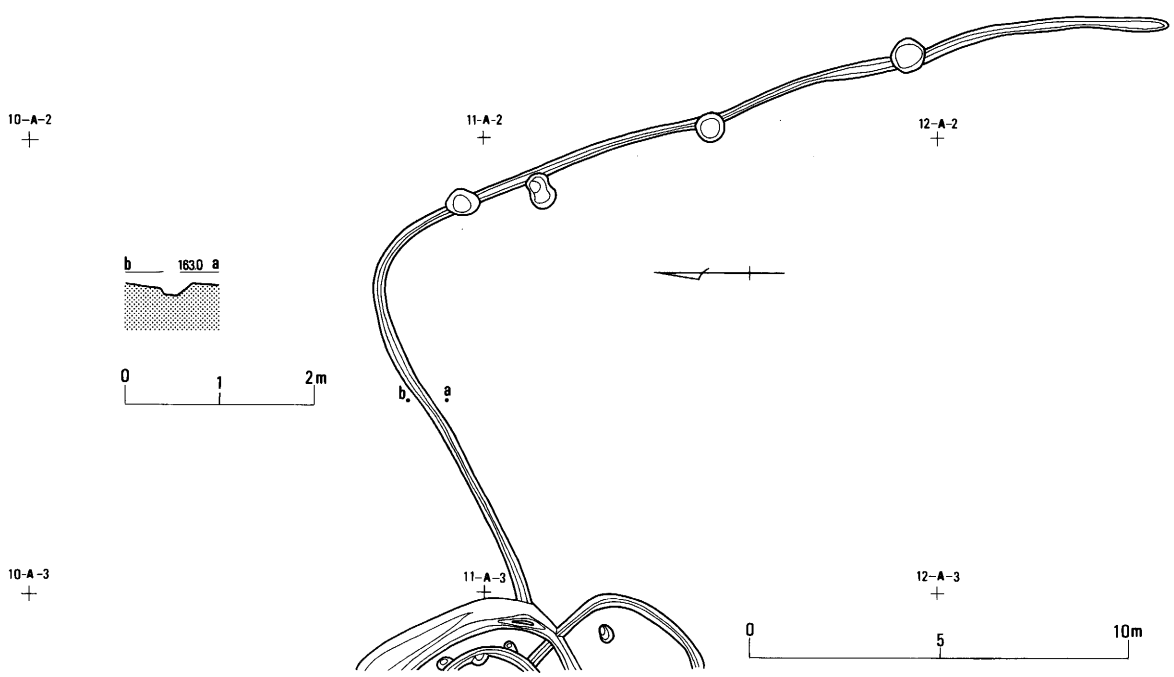


第67図 第2号溝

第３号溝（第68図）

14-d-1から北に48㍍、10-b-2から西に曲り斜面に沿って９㍍の長さで検出された。総長は57㍍である。この溝は第１号・第４号・第8-a住居跡と重複しており、第8-a住居跡より新しい。また、第２号・第７号住居跡との同時存在はあり得ない。幅は40㌢～50㌢・深さは最も深いところで33㌢・平均的には12㌢ほどである。





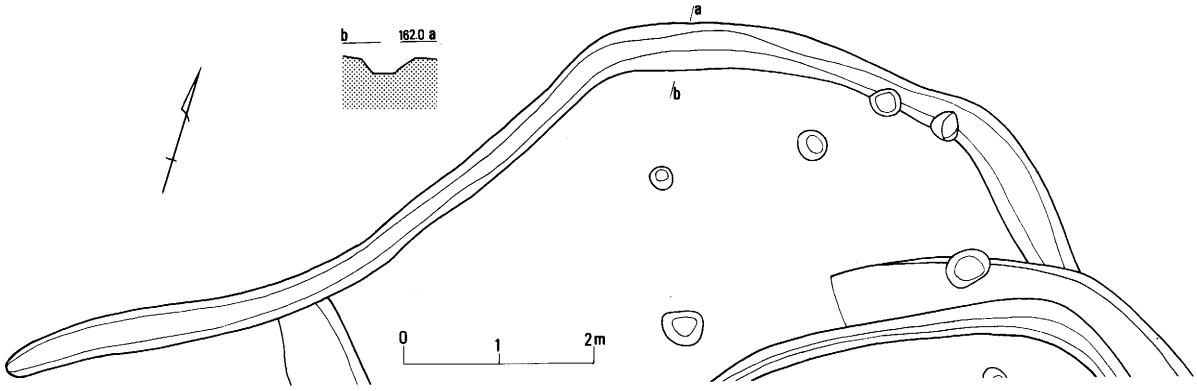
第68図　第３号溝（1：200）

第４号溝（第69図）

11-c-2から11-b-3にかけて検出された遺構である。溝は第２号掘立柱建物、第５号住居跡、第12号段状遺構と重複している。第12号段状遺構との新旧関係は不明だが、第２号掘立柱建物と第５号住居跡より古い。検出された溝の長さは13㍍、幅は最も広いところで50㌢、深さは20㌢である。

第５号溝（第62図）

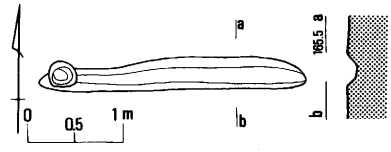
第10号住居跡関連溝と第７号住居跡の間で検出された。第10号住居跡関連溝、第７号住居跡、第15号段状遺構と重複関係にあるが新旧は不明である。溝の長さは3.8㍍、幅は１㍍～37㌢、深さは14㌢である。



第69図　第４号溝

第６号溝（第70図）

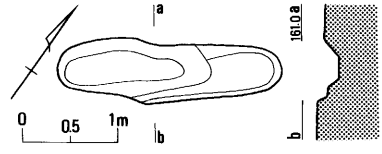
9-d-1で検出された。溝の長さは2.8㍍、幅は32㌢、深さは８㌢である。



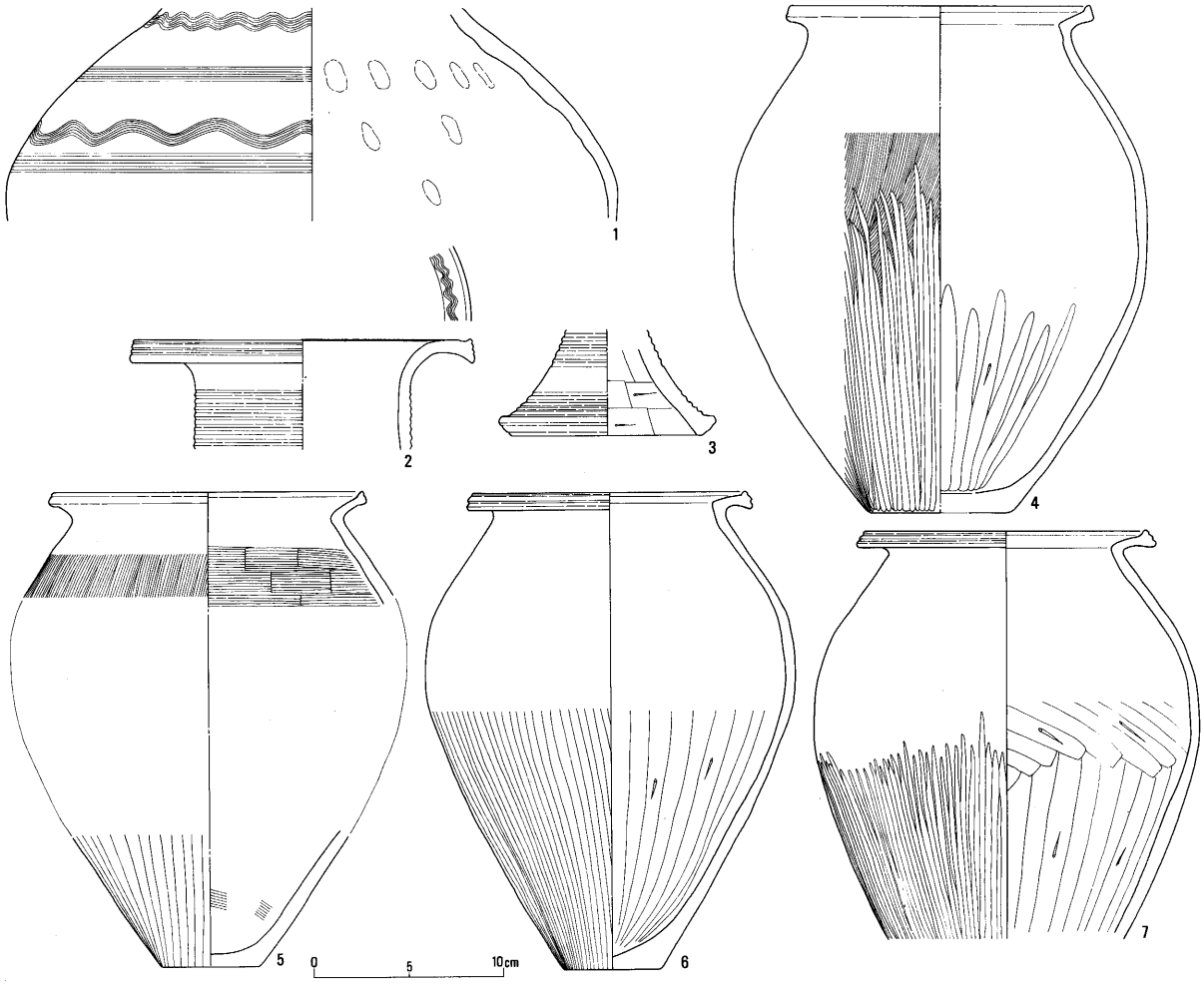
第70図　第６号溝

第７号溝（第71図）

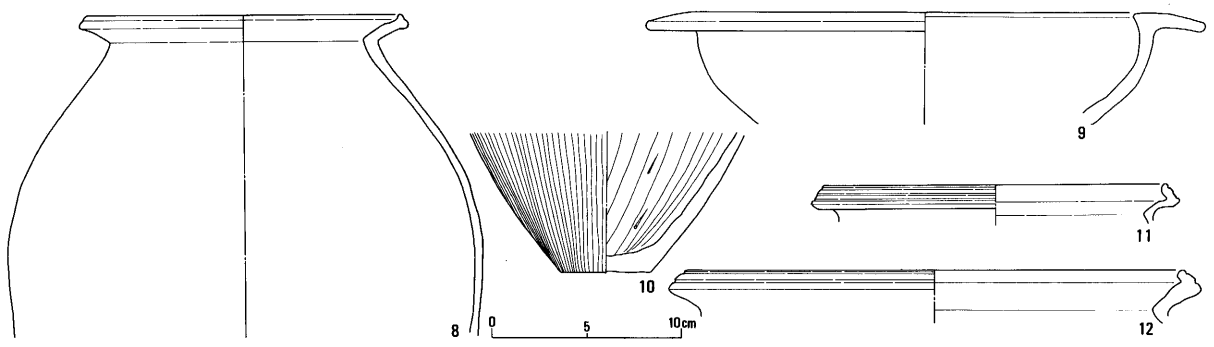
13-b-2で検出された遺構である。溝と言うより土壙とした方が正しいかもしれない。溝の長さは2.35㍍・幅は60㌢・深さは10㌢である。



第71図　第７号溝



第72図　第１号溝出土遺物



第73図　第１・３・４号溝出土遺物

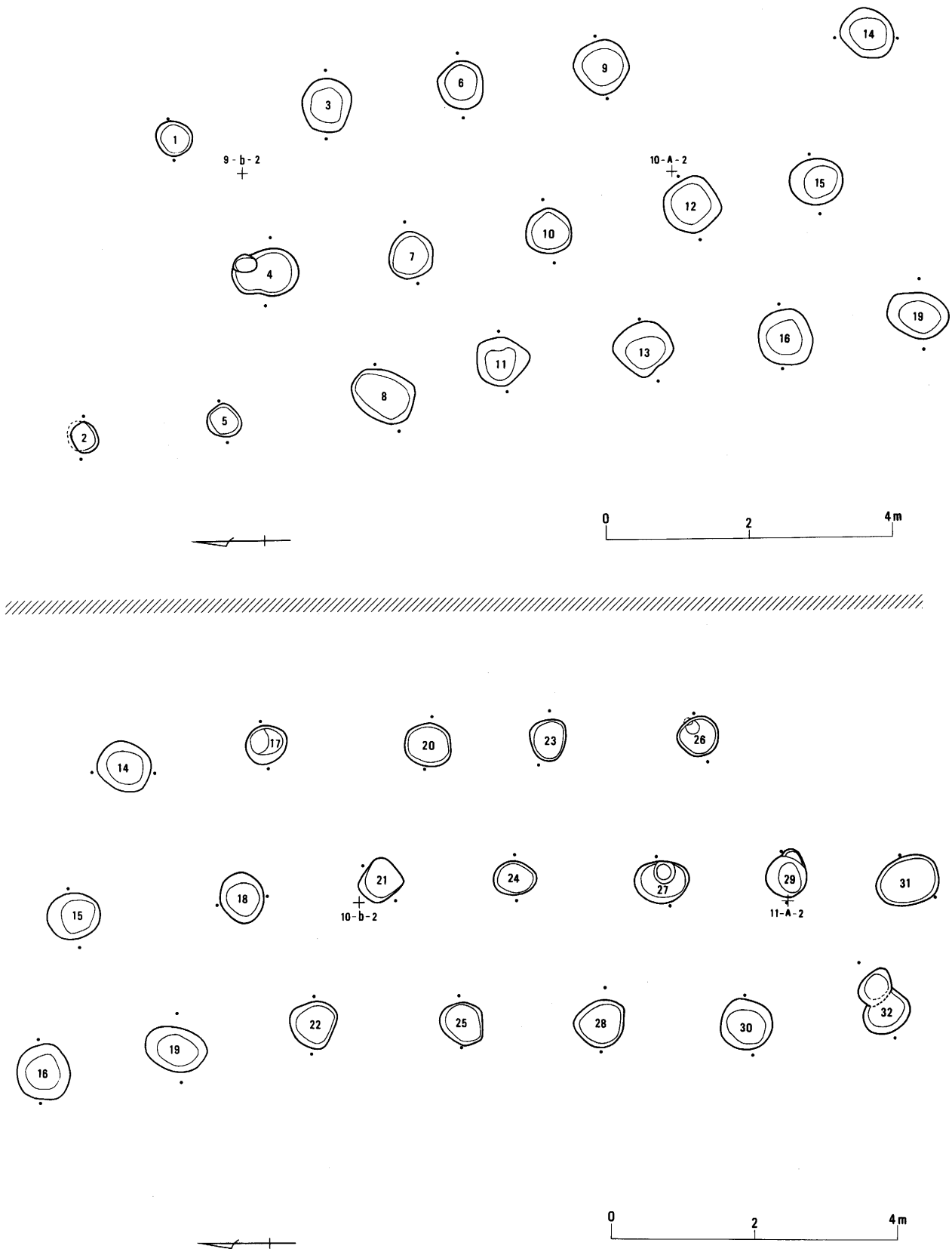
第１・3・4号溝出土遺物（第72・73図）　　単位 cm

番号	器種	大きさ	形態手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壷	最大径32.2 現存高11.2	胴部外面は櫛状工具により波状文と平行沈線を入れる。	砂粒を含む。焼成良好。にぶい橙5YR6/4。胴部10%現存。	第１号溝出土。
2	壷	口径17.7 現存高5.8	口縁部に凹線３条、頸部に凹線８条を施す。	砂粒を含む。焼成良好。にぶい黄橙10YR7/4。口縁部20%現存	〃
3	高坏	底径9.9 現存高5.6	脚部外面に凹線、内面は篦削り。	砂粒を含む。焼成良好。にぶい黄橙10YR7/4。脚部30%現存	〃
4	甕	口径15.6 器高26.7 最大径21.7 底径7.6	胴部外面は刷毛目成形の後に篦磨き。内面下半部は篦削りではなく指ナデ。	砂粒を含む。焼成良好。にぶい黄橙10YR7/4。40%現存。	〃
5	甕	口径16.2 底径5.2	胴部外面刷毛目成形の後篦磨き。内面は刷毛目を消している。推定される器高は25㌢。	微砂粒を含む精製された胎土。焼成良好。にぶい黄褐10YR5/3。口縁部20%・底部30%現存。	〃
6	甕	口径14.2 器高25.1 最大径19.4 底径5.1	口縁部に明瞭な凹線を２条施す。胴部外面篦磨き。内面下半部は篦削り。	砂粒を含む。焼成良好。にぶい赤褐5YR5/4。80%現存。	〃
7	甕	口径14.7 最大径26.9 現存高21.5	口縁部に明瞭な凹線を２条施す。胴部外面篦磨き。内面下半部は篦削り。	砂粒を含む。焼成良好。橙7.5YR6/6。70%現存。	〃
8	甕	口径16.4 最大径24.9 現存高16.9	口縁部の凹線は不明。器面の調整不明。胴部に煤付着。	砂粒を含む。焼成良好。橙7.5YR7/6。口縁部・胴部30%現存。	〃
9	高坏	口径21.8 最大径29.3	現存高5.9。調整不明。	砂粒を含む。焼成良。明黄褐10YR7/6。口縁部20%現存	第３号溝出土。
10	甕	底径4.8 現存高7.4	胴部外面篦磨き、内面篦削り。	砂粒を含む。焼成良好。黒10YR1.7/1。底部40%現存。	〃
11	甕	口径17.9 現存高2.1	口縁部に凹線を３条施す。	微砂粒を含む。焼成良好。にぶい黄橙10YR6/3。口縁部10%現存。	第４号溝出土。
12	甕	口径26.0 現存高2.8	口縁部に凹線を２条施す。	砂粒を含む。焼成良好。にぶい黄橙10YR7/4。口縁部30%現存。	〃

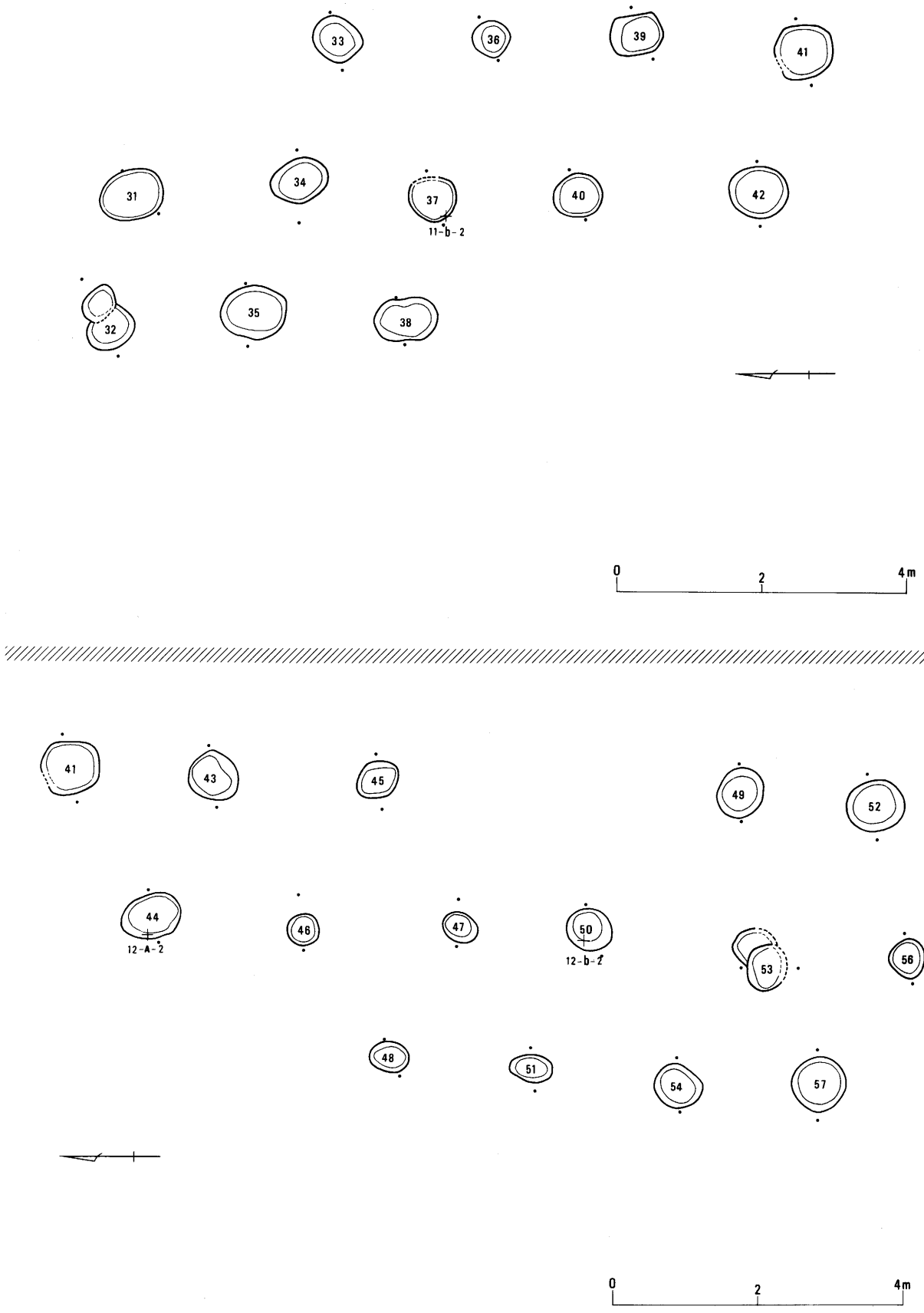
f　柵列・土壙・柱穴

柵列（第74～78図）

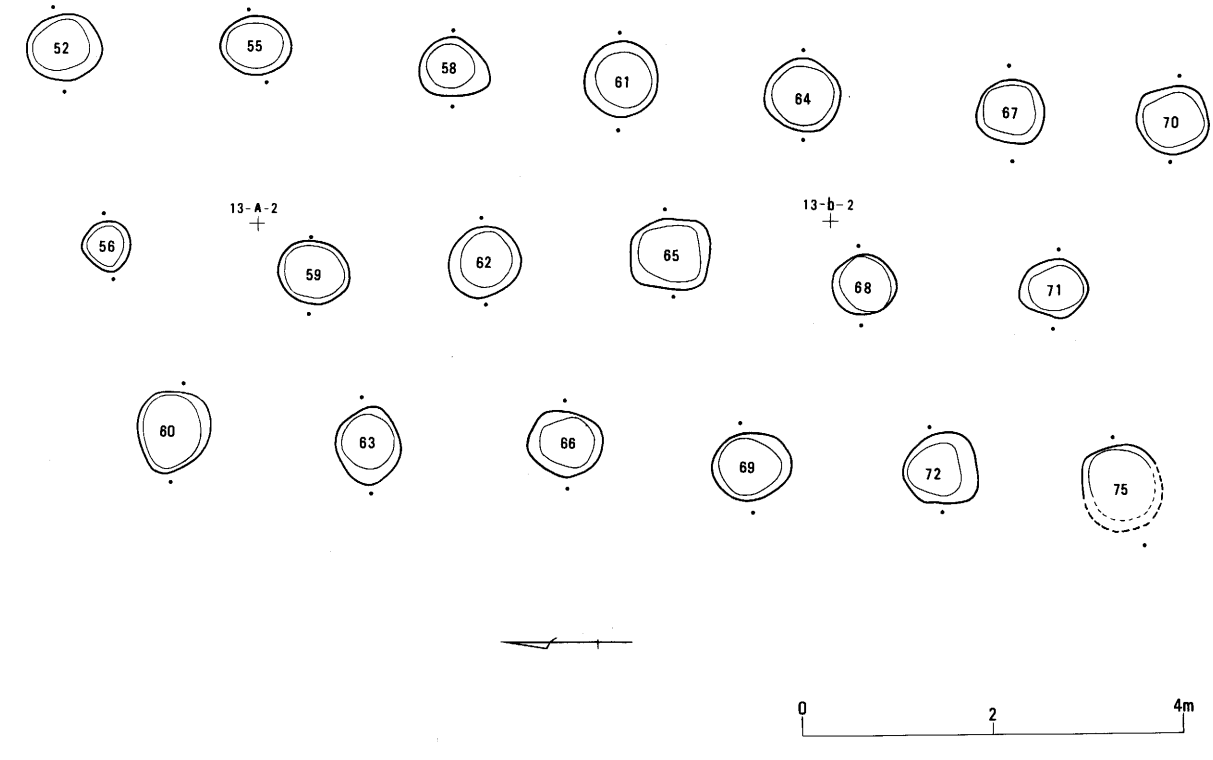
A区で検出された土壙のうち77基は9-A-2から14-A-2にかけて検出された柵列である。この柵列は３列５㍍の幅で57㍍にわたり造られている。柵列の重複関係は総ての遺構に対して新しく位置づけられる特徴をもつ。また、斜面に対して上段・中段・下段の土壙の底部は建物跡の柱穴とは異なり、高さを揃えるような工夫は凝らされていない。出土遺物は一切なく造られた時期は不明である。

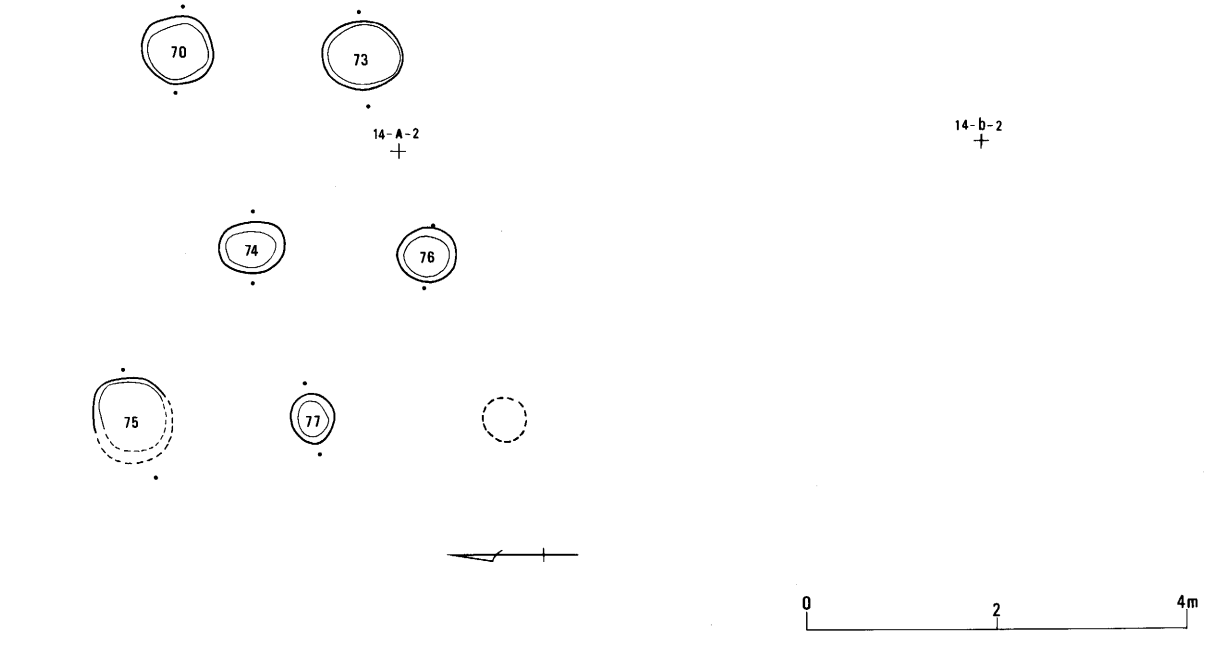

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
19
9-b-2
10-A-2
0
2
4m
14
17
20
23
26
15
18
21
10-b-2
24
27
29
11-A-2
31
16
19
22
25
28
30
32
0
2
4m

第74図　柵列１

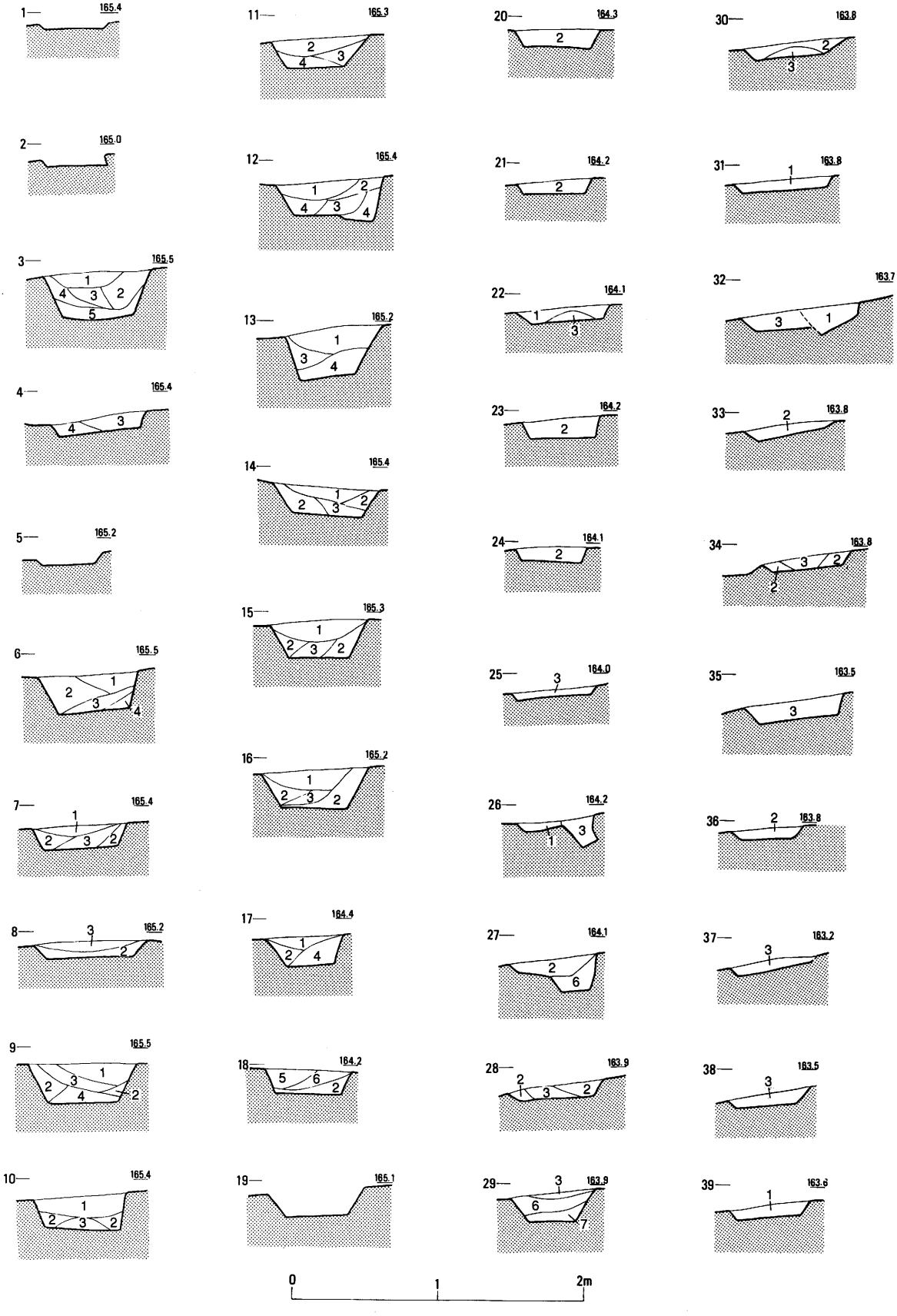

33
36
39
41
31
34
37
11-b-2
40
42
32
35
38
0
2
4m
41
43
45
49
52
44
12-A-2
46
47
50
12-b-2
53
56
48
51
54
57
0
2
4m

第75図　柵列 2


52
55
58
61
64
67
70
13-A-2
56
59
62
65
13-b-2
68
71
60
63
66
69
72
75
0
2
4m

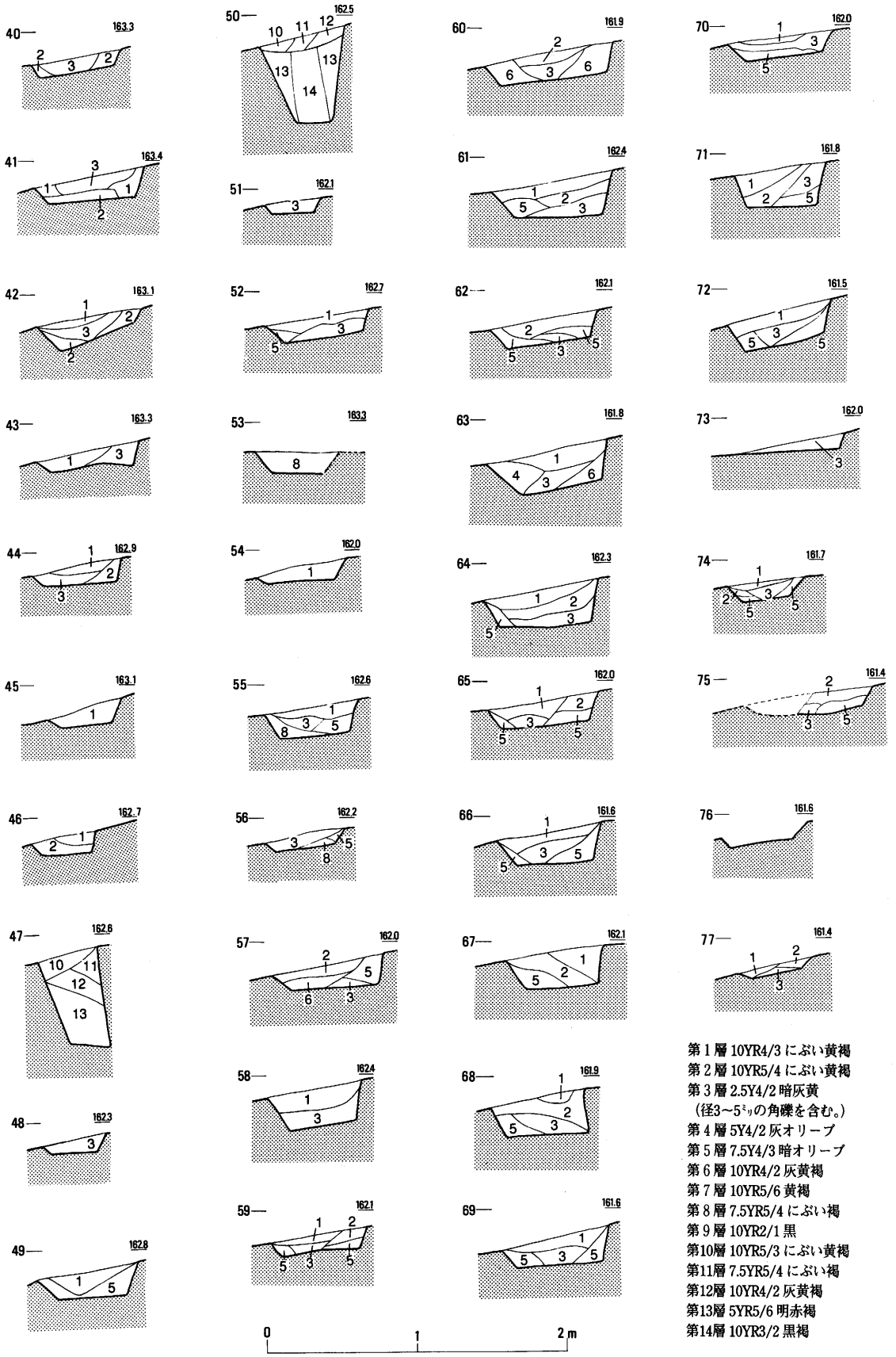

70
73
14-A-2
14-b-2
74
76
75
77
0
2
4m

第76図　柵列 3



第77図　柵列土層断面図１（1：40）

※土層断面図の左ポイントは平面図の西側ポイント、右ポイントは平面図の東側ポイントである。



第1層 10YR4/3 にぶい黄褐
第2層 10YR5/4 にぶい黄褐
第3層 2.5Y4/2 暗灰黄
（径3～5㎝の角礫を含む。）
第4層 5Y4/2 灰オリーブ
第5層 7.5Y4/3 暗オリーブ
第6層 10YR4/2 灰黄褐
第7層 10YR5/6 黄褐
第8層 7.5YR5/4 にぶい褐
第9層 10YR2/1 黒
第10層 10YR5/3 にぶい黄褐
第11層 7.5YR5/4 にぶい褐
第12層 10YR4/2 灰黄褐
第13層 5YR5/6 明赤褐
第14層 10YR3/2 黒褐

第78図　柵列土層断面図2

※土層断面図の左ポイントは平面図の西側ポイント、右ポイントは平面図の東側ポイントである。

第Ⅰ表　A区柵列土壙計測一覧表　　単位 cm

番号	長径	短径	深さ	グリッド	番号	長径	短径	深さ	グリッド
1	50	48	4	9-A-1	40	66	58	8	11-A-1
2	44	40	6	9-A-2	41	80	74	15	〃
3	74	66	30	9-A-1	42	80	70	15	〃
4	92	66	9	9-A-2	43	70	68	11	12-A-1
5	48	44	6	〃	44	82	60	12	12-A-2
6	66	64	25	9-A-1	45	56	47	11	12-A-1
7	64	58	15	9-A-2	46	42	42	11	12-A-2
8	88	66	12	〃	47	50	40	64	〃
9	78	72	26	9-A-1	48	54	44	8	〃
10	64	60	22	9-A-2	49	66	64	19	12-A-1
11	74	68	19	〃	50	64	56	56	12-A-2
12	80	72	24	10-A-2	51	60	38	8	〃
13	80	68	30	9-A-2	52	78	70	14	12-A-1
14	72	70	19	10-A-1	53	64	56	14	12-A-2
15	74	66	25	10-A-2	54	68	60	10	〃
16	80	74	26	〃	55	74	60	18	13-A-1
17	60	54	21	10-A-1	56	54	48	9	12-A-2
18	70	60	17	10-A-2	57	76	76	16	〃
19	84	64	18	〃	58	76	62	22	13-A-1
20	64	58	11	10-A-1	59	76	64	11	13-A-2
21	58	52	9	〃	60	88	76	18	12-A-2
22	66	60	8	10-A-2	61	80	78	24	13-A-1
23	58	48	11	10-A-1	62	76	74	16	13-A-2
24	60	48	9	〃	63	80	68	24	〃
25	64	60	5	10-A-2	64	78	76	24	13-A-1
26	56	54	4	10-A-1	65	84	74	16	13-A-2
27	76	60	5	〃	66	78	70	20	〃
28	68	64	9	10-A-2	67	70	64	22	13-A-1
29	67	58	20	11-A-1	68	66	63	25	13-A-2
30	74	68	9	10-A-2	69	82	72	18	〃
31	88	66	6	11-A-1	70	74	70	12	13-A-1
32	68	50	11	11-A-2	71	72	61	24	13-A-2
33	67	62	6	11-A-1	72	80	72	20	〃
34	80	56	6	〃	73	82	72	7	13-A-1
35	90	68	11	11-A-2	74	68	52	10	13-A-2
36	55	48	7	11-A-1	75	88	84	13	〃
37	64	61	6	〃	76	64	58	7	14-A-2
38	85	56	8	11-A-2	77	52	46	5	13-A-2
39	72	54	7	11-A-1					

土壙

A区では土壙列を除き17基の土壙が検出されている。このなかの7基は壁の崩落のために形状の変わったものもあるが袋状土壙と呼ばれる貯蔵穴である。ここでは特に重要と思われるものについてのみ説明することにして、他は一覧表で計測値を示すに留める。なお、土壙番号はB区の土壙との混乱を避けるため、A-1号～A-17号までの番号を付ける。

A-1号土壙（第79図）

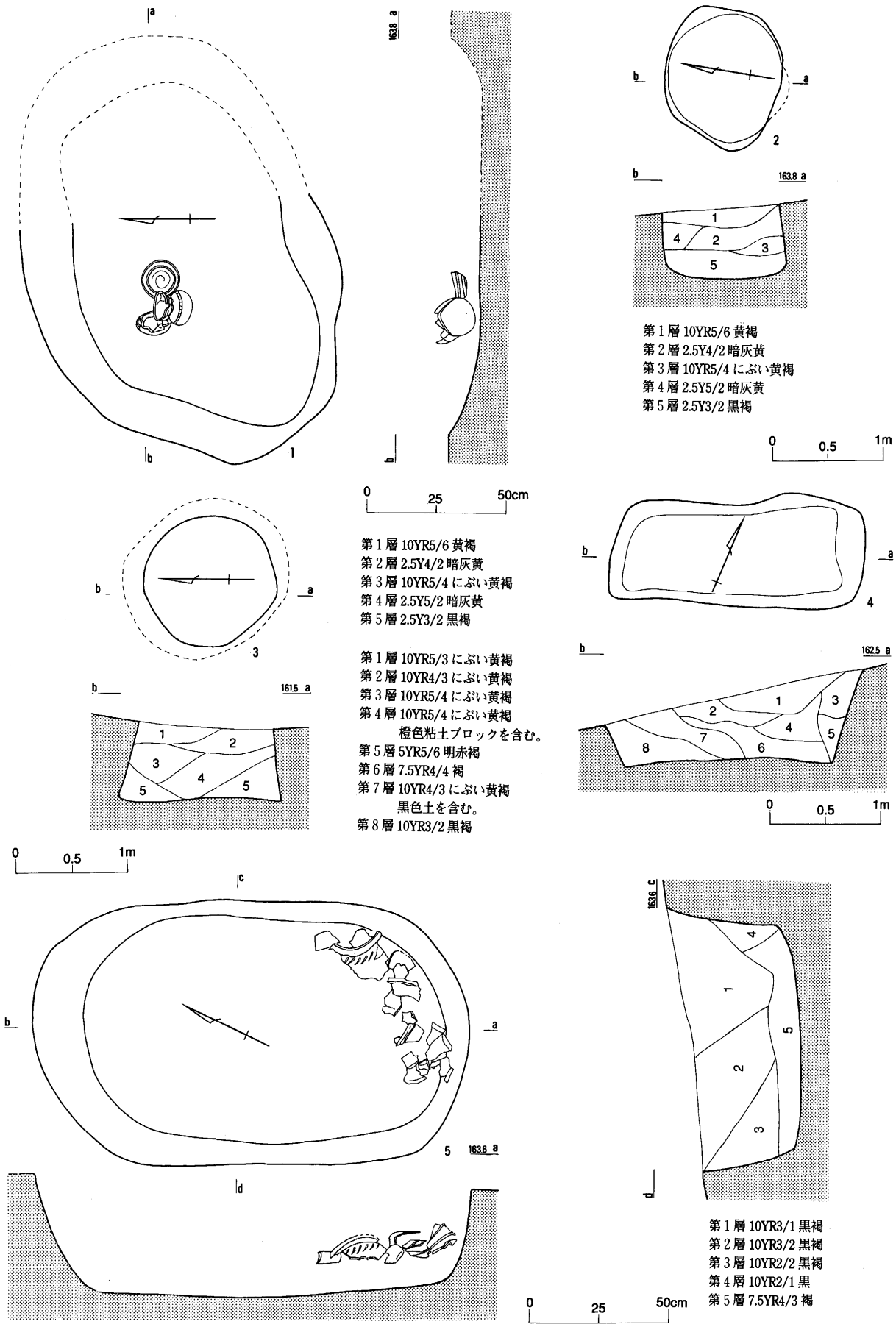
15-b-0で検出された土壙である。半分近くを撹乱により壊されている。土壙の現存長は95㌢・幅110㌢・深さは10㌢である。TK208型式併行の須恵器の蹴1点と坏身2点の他に土師器も出土しているが図示し得なかった。遺構検出時に古墳の主体部の可能性を考えたがプランは検出できなかった。次に周溝の可能性を考えたが撹乱のため確証を得られなかった。古墳ならば一辺が8㍍内外で墳丘の高さが50㌢程の墳丘墓の系統を引く方墳の可能性がある。遺物の出土地点は丘陵頂部の最高所から5～6㍍離れた所であるから、これらの遺物は周溝からの出土となる。全測図にはプラン確認時に考えた周溝の可能性のある範囲を示しておく。土壙とすれば柵列との関係が問われよう。

A-13号・14・15号土壙（第81図）

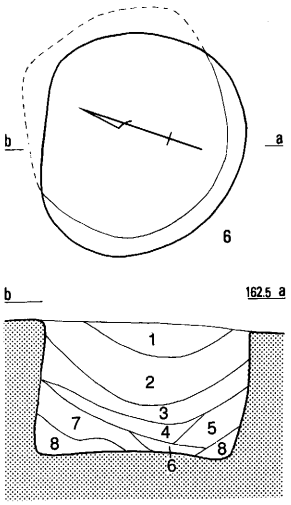
A-13号は10-d-3で検出された土壙である。長径は70㌢・短径59㌢で二段に掘り下げられている。一段目の深さは確認面から28㌢、二段目はそこから更に30㌢掘り下げられている。A-14も10-d-3で検出された土壙である。長径は90㌢・短径75㌢で深さは確認面から40㌢である。A-15は10-a-4で検出された土壙である。長径は87㌢・短径82㌢のほぼ円形の土壙である。この土壙も二段に掘り下げられている。一段目の深さは確認面から28㌢、二段目はそこから更に20㌢掘り下げられている。これらA-13号からA-15号までの三基の土壙は、A-14号土壙がやや東にずれて検出されたために別々の土壙に見えるが、A-13号土壙の二段に掘り下げた穴の中心からA-15号土壙の二段に掘り下げた穴の中心までの距離が4.9㍍あり、第5号掘立柱建物跡の梁の長さの二倍に相当する。A-14号土壙の場所はずれているが、両脇の柱穴から一間2.45㍍の間隔をおいて柱の建てられない位置ではないために、A-13・14・15号土壙は梁が2間4.9㍍の掘立柱建物跡の可能性がある。全測図には建物としての可能性を図示しておく。

第2表　A区土壙計測一覧表　　単位 cm

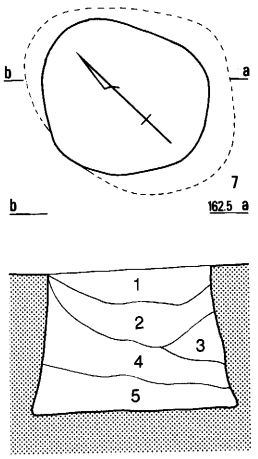
番号	長径	短径	深さ	グリッド	番号	長径	短径	深さ	グリッド
A-1	95	110	10	15-b-0	A-10	60	39	50	9-d-2
A-2	100	84	50	15-d-0	A-11	91	88	32	10-c-3
A-3	173	73	60	12-d-1	A-12	76	54	7	10-c-3
A-4	95	95	58	15-b-2	A-13	70	59	28(30)	10-d-3
A-5	156	94	42	11-d-1	A-14	90	75	40	10-d-3
A-6	120	105	70	11-c-2	A-15	87	82	28(20)	10-a-4
A-7	92	80	75	10-b-3	A-16	108	98	112	9-a-1
A-8	130	100	100	10-d-3	A-17	88	83	18	11-d-1
A-9	123	112	110	10-d-3					



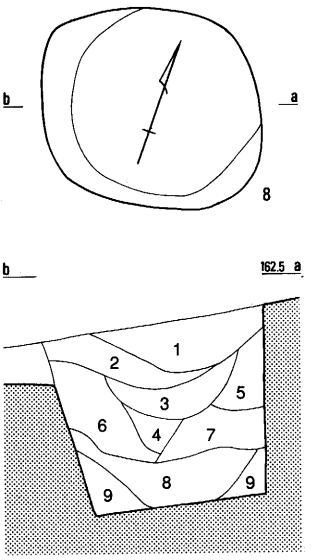
第79図　A-1・2・3・4・5号土壙（A-1・5は1：20）



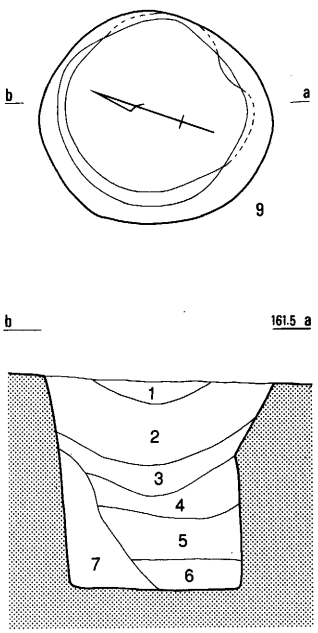
第1層 2.5Y4/2 暗灰黄
第2層 2.5Y3/2 黒褐
第3層 2.5Y3/3 暗オリーブ褐
第4層 2.5Y3/3 暗オリーブ褐
（黄色粘土ブロックを含む。）
第5層 2.5Y4/6 オリーブ褐
第6層 2.5Y4/1 黄灰
第7層 2.5Y4/4 オリーブ褐
第8層 2.5Y5/6 黄褐



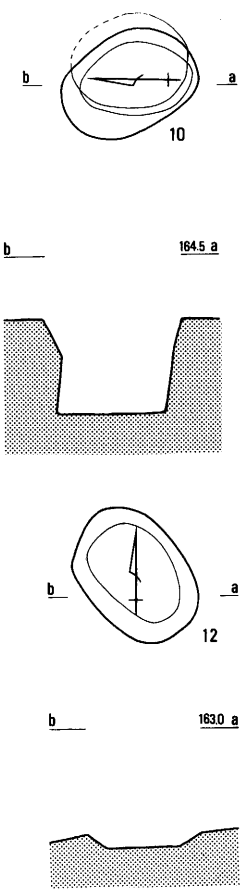
第1層 2.5Y5/3 黄褐
第2層 2.5Y4/3 オリーブ褐
第3層 2.5Y4/3 オリーブ褐
（炭化物を含む。）
第4層 2.5Y3/3 暗オリーブ褐
第8層 2.5Y3/2 黒褐

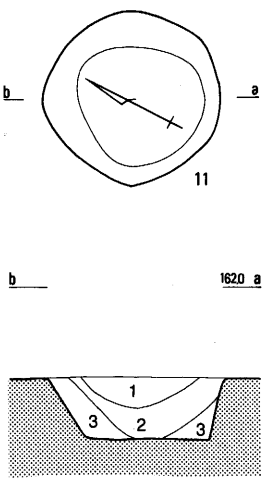


第1層 2.5Y4/2 暗灰黄
第2層 10YR5/3 にぶい黄褐
第3層 10YR5/4 にぶい黄褐
第4層 10YR5/4 にぶい黄褐
黒色土のブロックを含む。
第5層 2.5Y4/2 暗灰黄
第6層 2.5Y3/2 黒褐
第7層 2.5Y3/2 黒褐
黄褐色粘土ブロックを含む。
第8層 2.5Y3/1 黒褐
第9層 10YR4/6 褐
黄褐色粘土ブロックを含む。

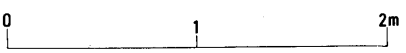


第1層 2.5Y4/3 オリーブ褐
第2層 2.5Y4/2 暗灰黄
第3層 2.5Y5/3 黄褐
第4層 10YR6/4 にぶい黄橙
第5層 2.5Y4/2 暗灰黄
黄褐色粘土ブロックを含む。
第6層 2.5Y4/1 黄灰
第7層 10YR6/3 にぶい黄橙

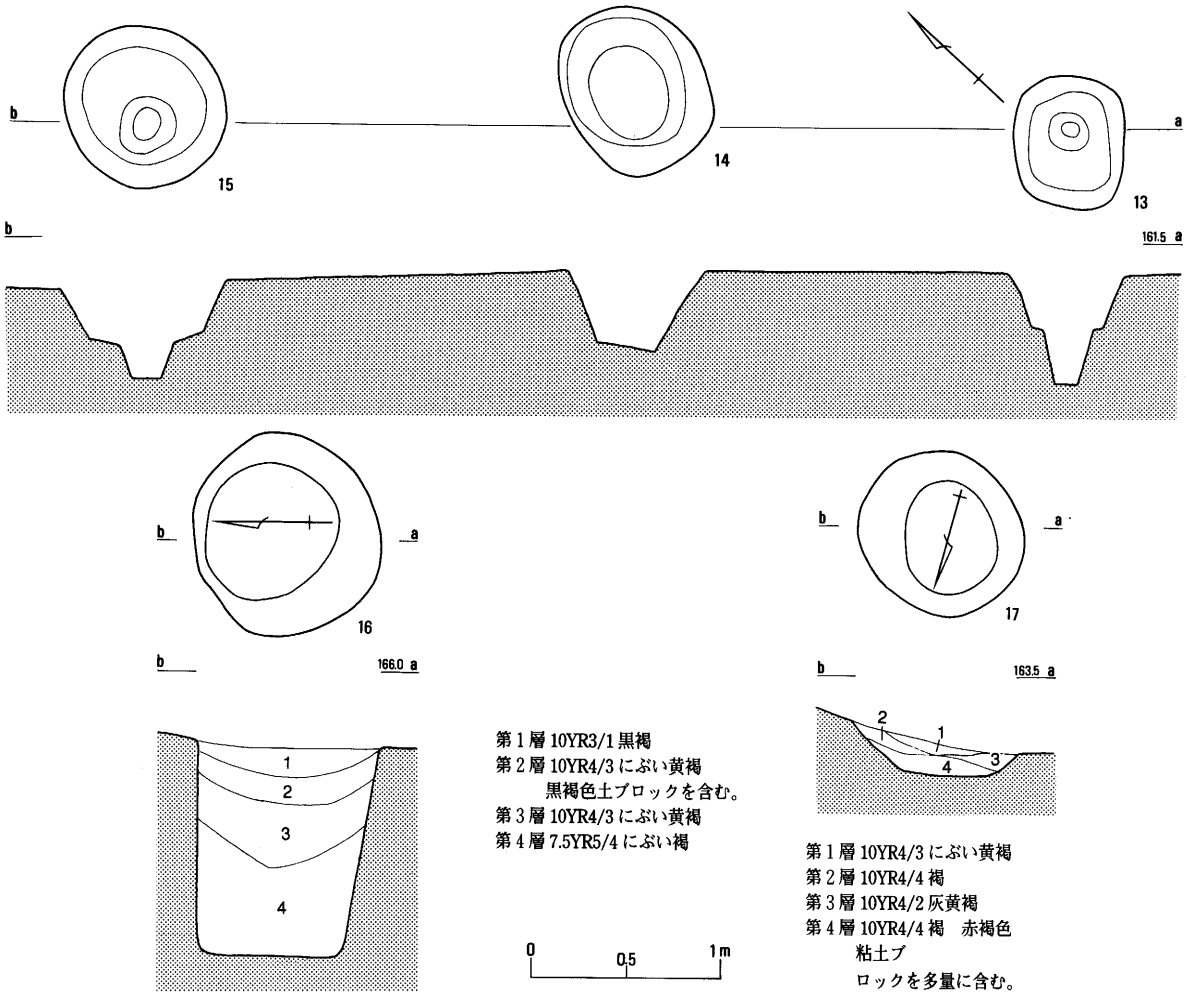




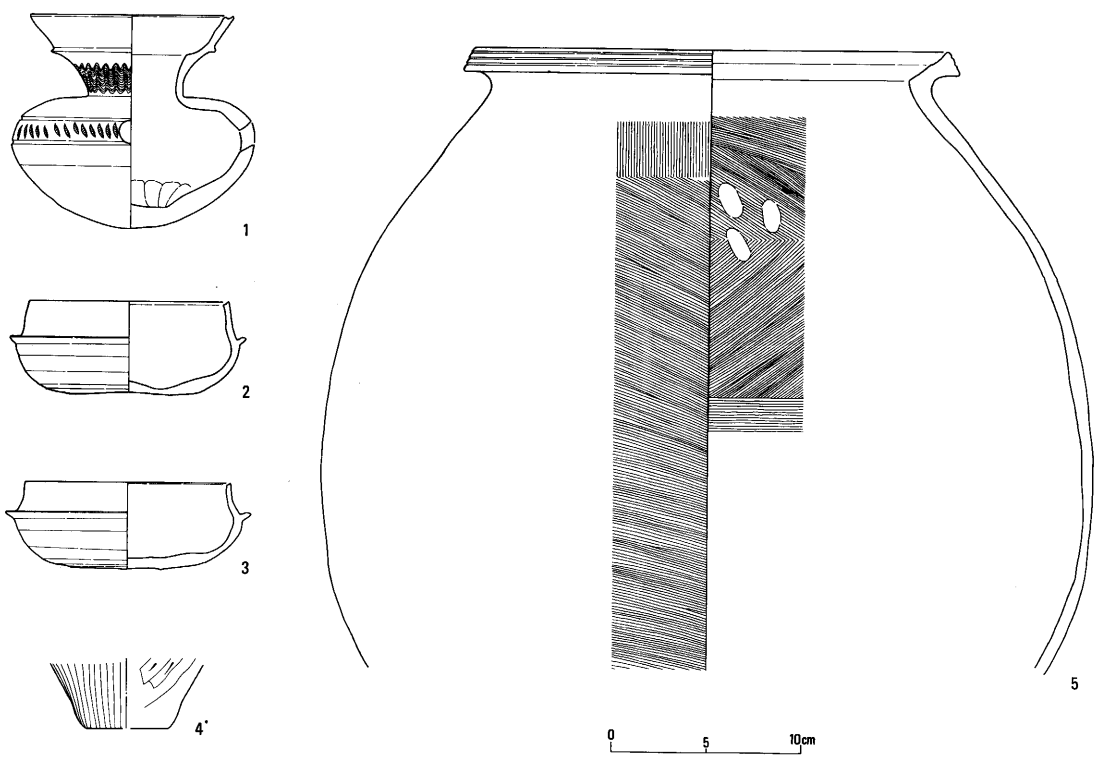
第1層 2.5Y4/3 オリーブ褐
第2層 2.5Y3/3 暗オリーブ褐
第3層 2.5Y4/4 オリーブ褐



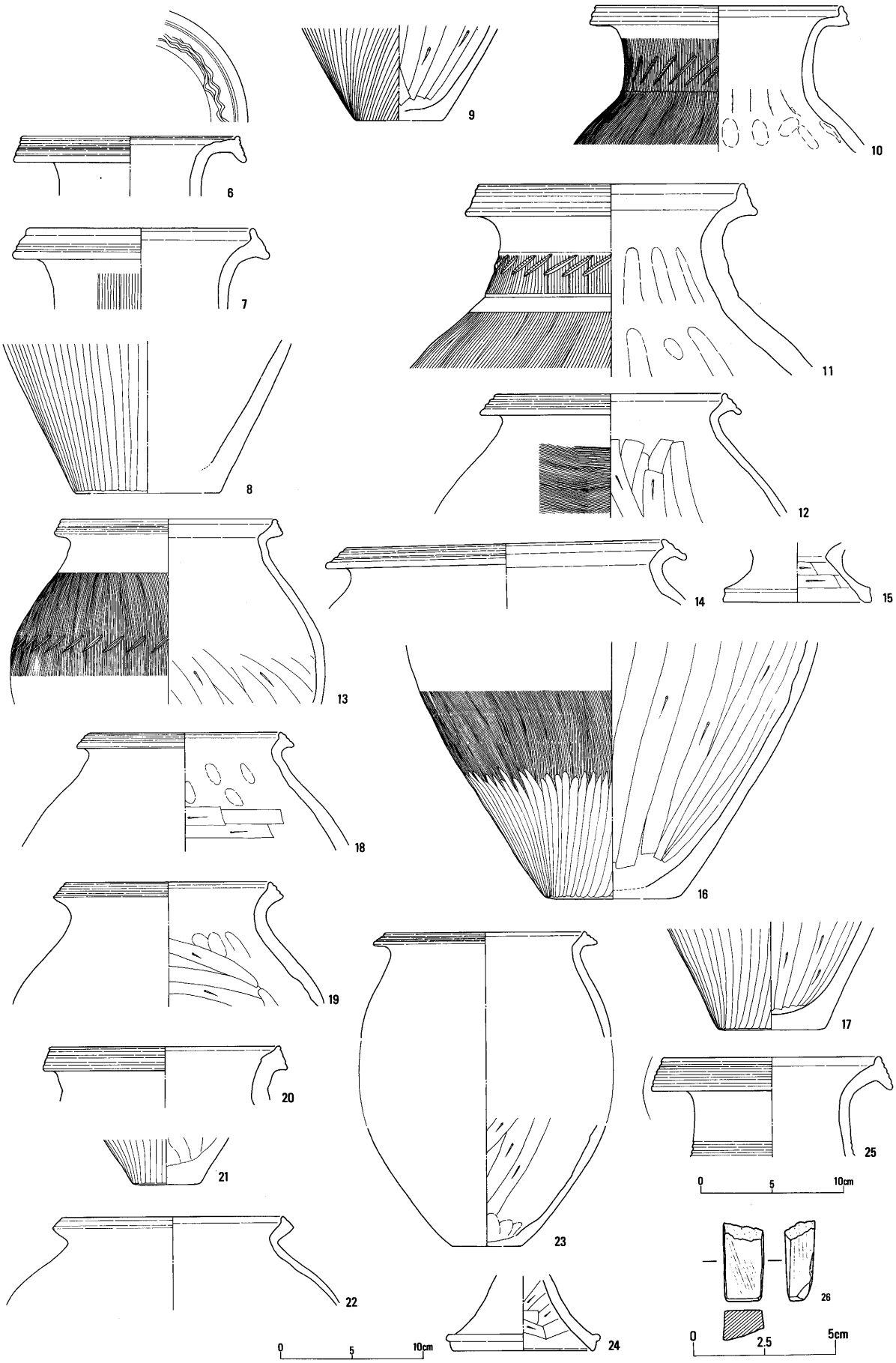
第80図　A-6・7・8・9・10・11・12号土壙



第81図　A-13・14・15・16・17号土壙



第82図　A-1・3・4号土壙出土遺物



第83図　A-5・6・8・10・14号土壙出土遺物

A区土壙出土遺物（第83図）　　単位 cm

番号	器種	大きさ	形態手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕	口径10.6 最大径12.7 器高11.1	頸部に櫛描き波状文を施すが部分的に乱れている。内面底部には指頭圧痕を残す。	粒の大きい長石を含む。焼成良好。暗青灰5B4/1。90%現存。	A-1号土壙出土。
2	坏身	口径10.4 器高4.9	端部の作りは端正で鋭い。器壁の大粒の砂粒が目立つ。	黒色粒を含む。焼成良好。暗青灰5PB4/1。70%現存。	〃
3	坏身	口径10.8 器高4.5	端部の作りは端正で鋭い。器壁の大粒の砂粒が目立つ。	焼成良好。暗紫灰5P4/1。90%現存。	〃
4	甕	底径4.2 現存高3.7	外面は篦磨き。内面下半部は篦削り。	砂粒を含む。焼成良好。にぶい褐7.5YR6/3。底部40%現存。	A-3号土壙出土
5	甕	口径25.0 最大径40.7 現存高32.8	口縁部に凹線3条を施す。胴部外面・内面上半は刷毛目調整。	砂粒を含む。焼成良好。にぶい黄橙10YR6/4。口縁部30%現存。	A-4号土壙出土
6	壷	口径15.0 現存高4.2	口縁部に明瞭な凹線を5条施す。波状文は乱れている。	砂粒を含む。焼成良好。にぶい黄橙10YR7/4。口縁部30%現存。	A-5号土壙出土
7	壷	口径15.6 現存高5.7	口縁部の凹線は不明瞭。頸部は外面刷毛目調整。	砂粒を含む。焼成良。にぶい黄橙10YR7/4。口縁部50%現存。	〃 No.3，No.5
8	壷	底径11.0 現存高10.7	胴部は外面篦磨き。内面は不明。	砂粒を含む。焼成良好。にぶい黄橙10YR7/4。底部20%現存。	〃
9	壷	底径6.0 現存高6.7	胴部外面篦磨き。内面下半は篦削り。	砂粒が多い。焼成良好。にぶい黄橙10YR7/3。底部30%現存。	〃 No.8
10	壷	口径17.2 現存高10.2	頸部に木口状工具による押え。胴部内面は指頭による押え。	砂粒を含む。焼成良好。にぶい黄橙10YR7/4。口縁部20%現存。	〃 No.1
11	壷	口径18.4 現存高13.4	口縁部の凹線は不明瞭である。頸部に木口状工具による押え。	砂粒を含む。焼成良好。橙5YR7/6。口縁部40%現存。	〃 No.2
12	甕	口径16.0 現存高8.7	胴部外面刷毛目調整。内面篦削り。	砂粒を含む。焼成良好。にぶい黄橙10YR7/4。口縁部10%現存。	〃 No.10
13	甕	口径15.0 最大径22.0 現存高13.0	肩部に木口状工具による押圧。胴部内面下半は篦削り。	砂粒を含む。焼成良好。にぶい黄橙10YR7/4。口縁部・胴部10%現存。	〃 No.11
14	甕	口径22.0 現存高4.6	口縁部の凹線はやや雑である。	砂粒を含む。焼成良好。にぶい黄橙10YR7/4。口縁部10%現存。	〃
15	甕	底径10.3 現存高4.2	脚部内面は篦削り。	砂粒を含む。焼成良。橙5YR7/6。脚部50%現存。	〃 No.9
16	壷	底径9.4 現存高18.1	胴部外面篦磨き。内面篦削り。	砂粒を含む。焼成良好。にぶい黄橙10YR6/3。底部30%現存。	A-6号土壙出土。
17	壷	底径7.5 現存高7.6	胴部外面篦磨き。内面篦削り。	砂粒を含む。焼成良。にぶい黄橙10YR7/4。底部50%現存。	〃
18	甕	口径13.5 現存高8.3	胴部外面の調整不明。内面は篦削り。	砂粒を含む。焼成良好。橙5YR6/6。口縁部40%現存。	〃
19	甕	口径14.3 現存高8.7	胴部外面は平滑に仕上げられている。内面は篦削り。	砂粒を含む。焼成良好。にぶい橙5YR6/4。口縁部30%現存。	〃
20	甕	口径16.0 現存高4.1	口縁部の凹線文は浅く弱い。	砂粒を含む。焼成良好。明黄褐10YR7/6。口縁部10%現存。	A-8号土壙出土。
21	甕	底径4.8 現存高3.2	外面篦磨き。内面指ナデ。	砂粒を含む。焼成良好。橙。口縁部80%現存。	〃
22	甕	口径15.4 現存高6.2	口縁部の凹線は横ナデ風。	砂粒を含む。焼成良好。橙7.5YR7/6。底部40%現存。	A-10号土壙出土。
23	甕	口径13.9 底径4.8 推定高22.0	胴部内面下半には篦削りが認められる。	砂粒を含む。焼成良好。にぶい黄橙10YR7/4。口縁・底部40%現存。	〃
24	高坏	底径9.8 現存高5.3	内面は篦削り。	砂粒を含む。焼成良好。にぶい黄橙10YR7/4。脚部20%現存。	〃
25	壷	口径15.0 現存高7.0	頸部の文様は沈線か。	砂粒を含む。焼成良好。橙5YR7/6。口縁部30%現存。	A-14号土壙出土。
26	砥石	長さ2.8 幅1.4	厚さ1.0	安山岩と思われる。	〃

柱穴

遺構として纏まりのない柱穴は全測図において図示するに留める。柱穴の計測値は一覧表に示す。

第3表　A区柱穴計測一覧表　　単位cm

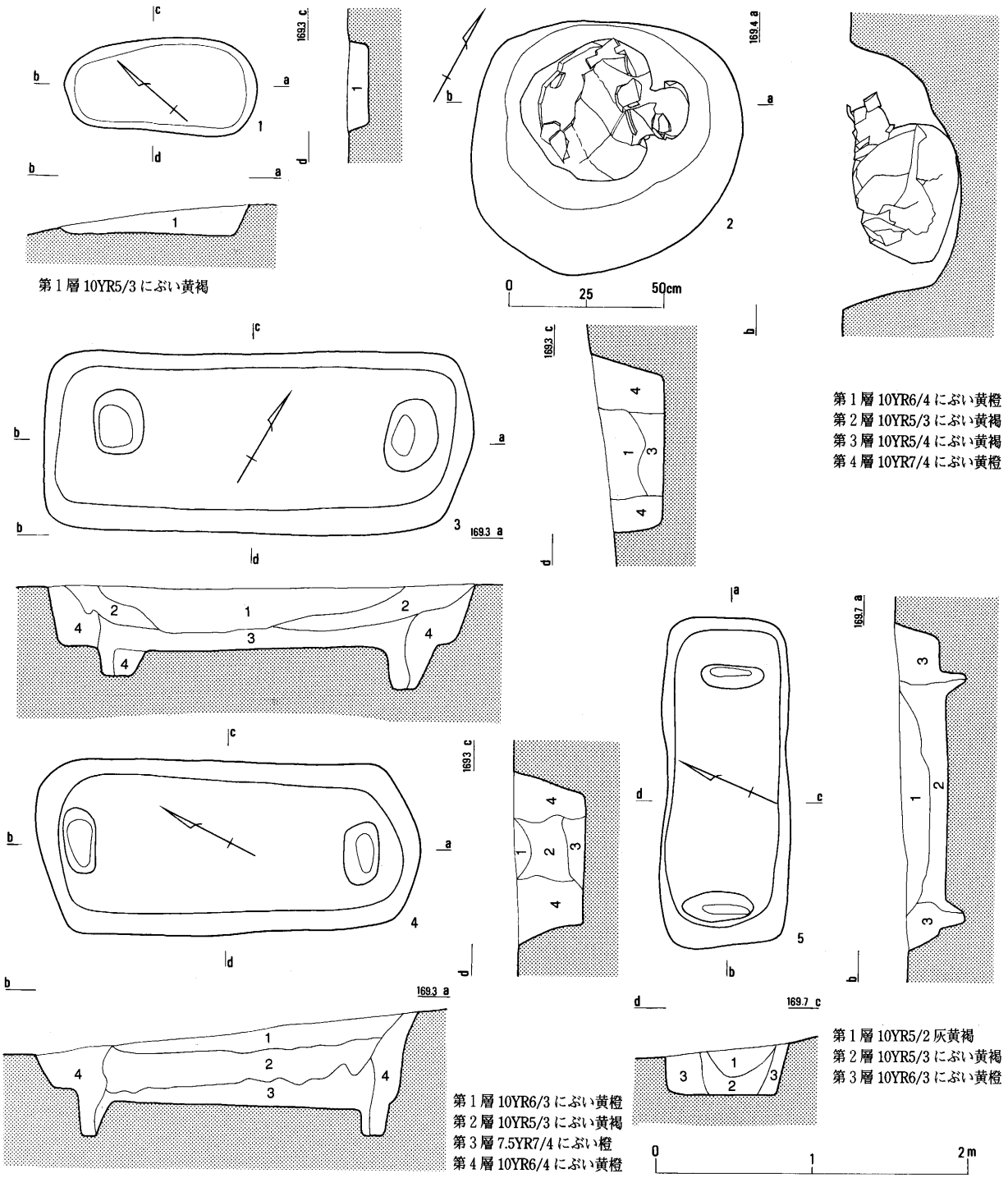
番号	長径	短径	深さ	グリッド	番号	長径	短径	深さ	グリッド
1	30	29	14	8-A-1	46	34	32	12	11-A-2
2	36	32	34	〃	47	26	26	11	12-A-1
3	39	37	19	〃	48	39	37	40	〃
4	38	29	21	〃	49	28	26	27	12-A-2
5	44	39	49	〃	50	32	28	14	〃
6	27	24	22	〃	51	31	30	44	〃
7	26	25	13	〃	52	28	21	32	〃
8	47	43	15	〃	53	80	46	25	〃
9	30	26	13	〃	54	53	41	19	〃
10	34	33	20	8-A-2	55	56	48	6	〃
11	42	27	12	8-A-3	56	26	26	13	13-A-1
12	36	23	36	9-A-1	57	24	23	9	〃
13	29	28	32	〃	58	30	26	32	13-A-2
14	30	28	4	9-A-2	59	20	20	33	〃
15	25	22	11	〃	60	28	26	15	15-A-0
16	28	26	10	〃	61	27	24	16	〃
17	30	28	30	〃	62	25	24	14	〃
18	29	26	26	〃	63	28	25	16	〃
19	27	25	22	〃	64	42	34	22	15-A-1
20	32	31	21	〃	65	24	22	20	15-A-2
21	29	24	26	〃	66	24	22	23	〃
22	28	27	22	〃	67	28	24	19	〃
23	32	28	24	〃	68	23	20	15	〃
24	34	27	18	〃	69	41	38	23	16-A-1
25	30	26	30	〃	70	33	29	23	〃
26	31	29	24	〃	71	40	35	10	〃
27	26	24	18	〃	72	30	28	33	〃
28	28	28	4	9-A-4	73	34	33	9	〃
29	28	28	10	〃	74	32	24	13	16-A-2
30	30	26	42	〃	75	62	52	17	〃
31	25	22	8	〃	76	26	22	12	〃
32	30	24	40	〃	77	22	19	17	〃
33	34	30	59	〃	78	26	24	17	〃
34	38	28	40	〃	79	24	23	5	〃
35	35	30	24	10-A-1	80	22	20	37	〃
36	30	29	23	11-A-1	81	68	56	20	〃
37	38	36	44	〃	82	40	36	16	17-A-1
38	46	30	27	〃	83	18	18	24	〃
39	37	36	38	〃	84	32	24	18	17-A-2
40	38	34	21	〃	85	23	20	12	〃
41	40	40	23	〃	86	40	18	35	〃
42	38	35	12	〃	87	32	30	20	〃
43	40	34	10	〃	88	80	60	13	〃
44	56	54	19	〃	89	64	60	6	〃
45	46	36	22	〃					

3　B区の遺構と遺物

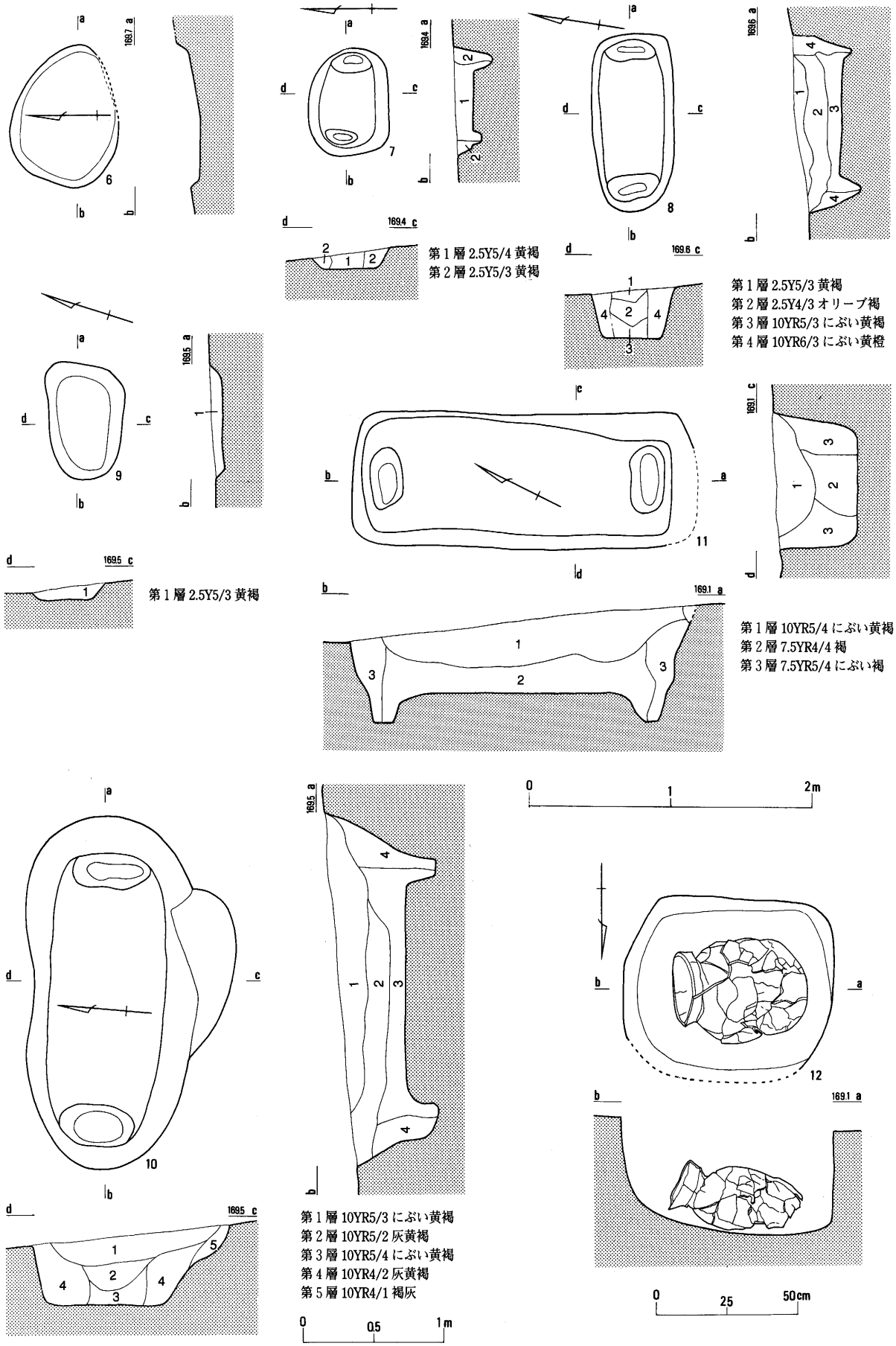
B区とは集落跡が検出されたA区の北端に位置する第14号住居跡から60㍍北に離れた、標高168㍍から169㍍の尾根上を言う。グリッド上では0-A-1、0-A-2、1-A-1、1-A-2に所属する576平方㍍ほどの範囲である。B区とA区は171㍍の丘陵最高所を挟んで対峙しており、それぞれの区から見通すことは出来ない。

a　土壙墓

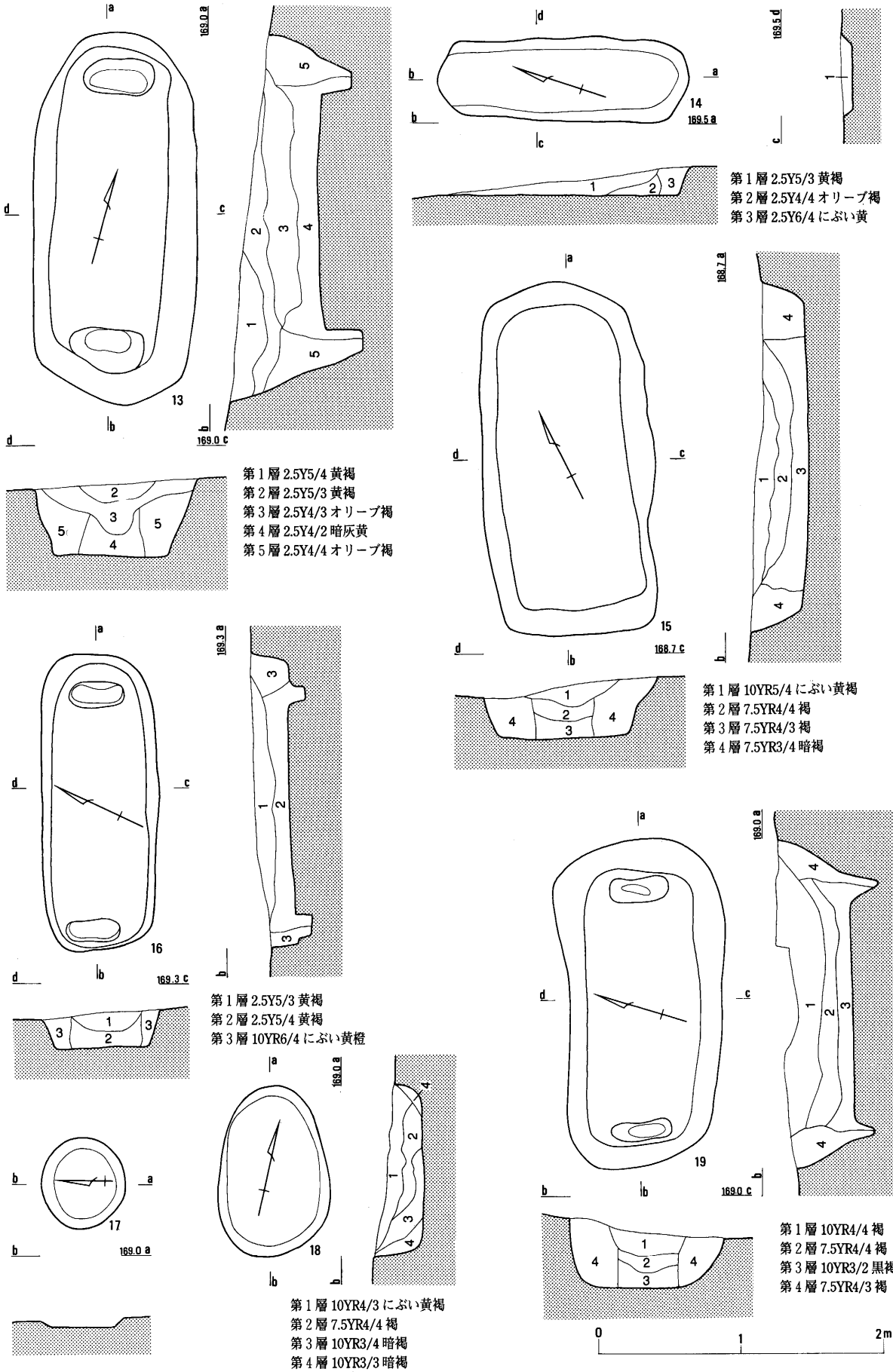
検出された遺構は木棺墓33基、土器棺3基、木棺の木口の痕跡を検出できなかった土壙10基である。これらの土壙は全て土壙墓と考えられる。土壙の大きさについては計測値を一覧表に示す。



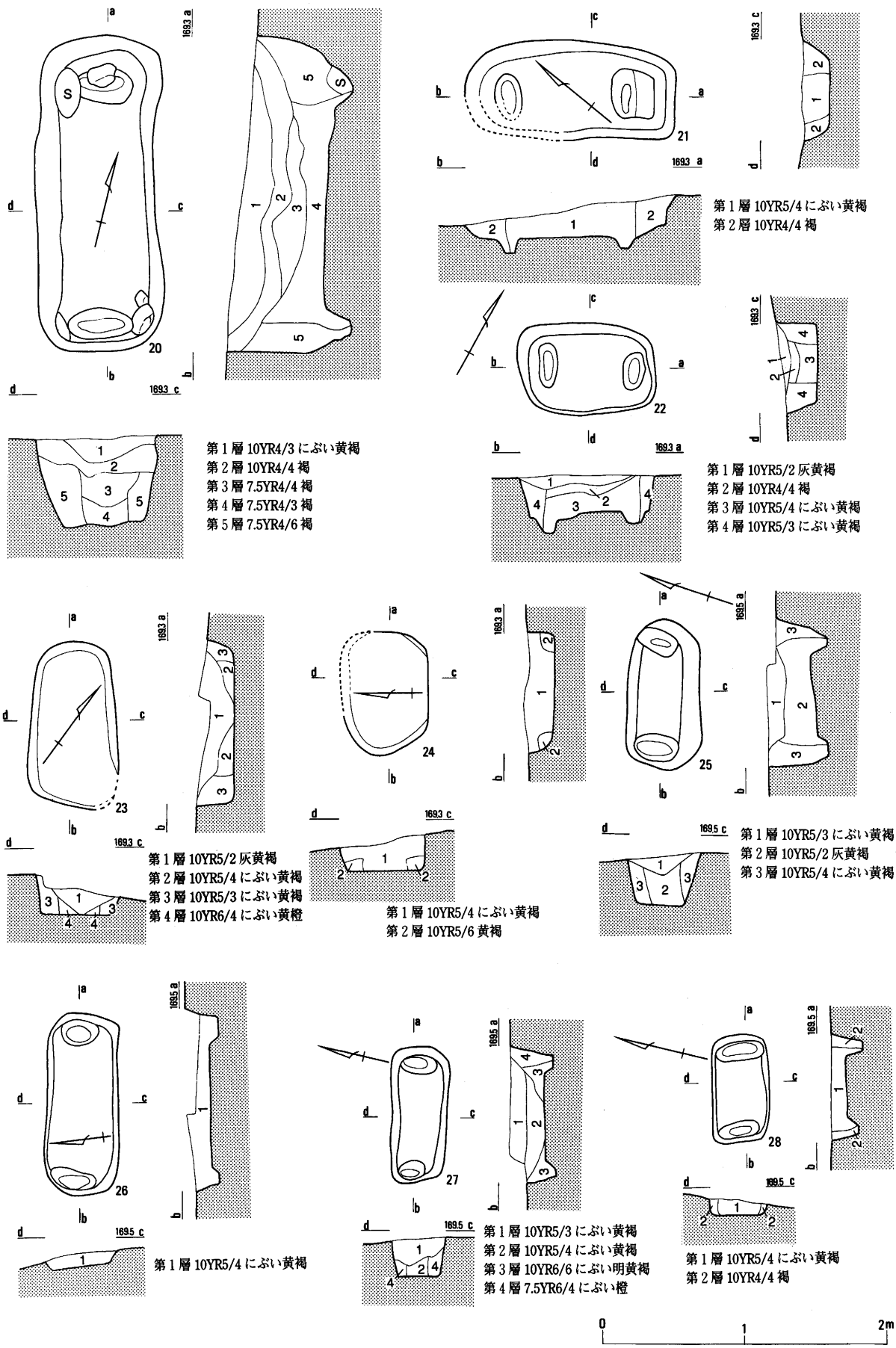
第84図　B-1・2・3・4・5号土壙墓（B-2は1：20）



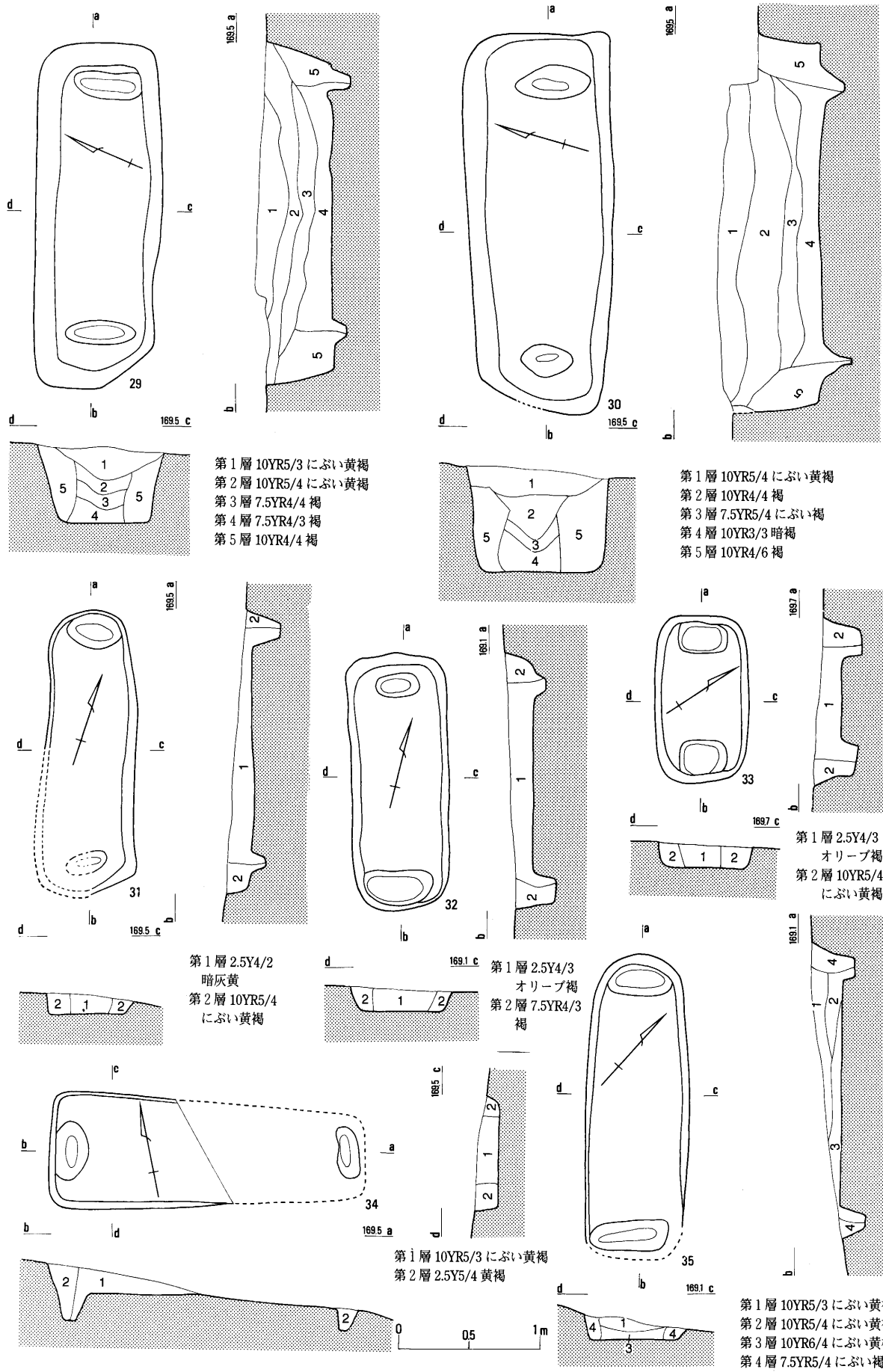
第85図 B-6・7・8・9・10・11・12号土壙墓（B-12は1：20）



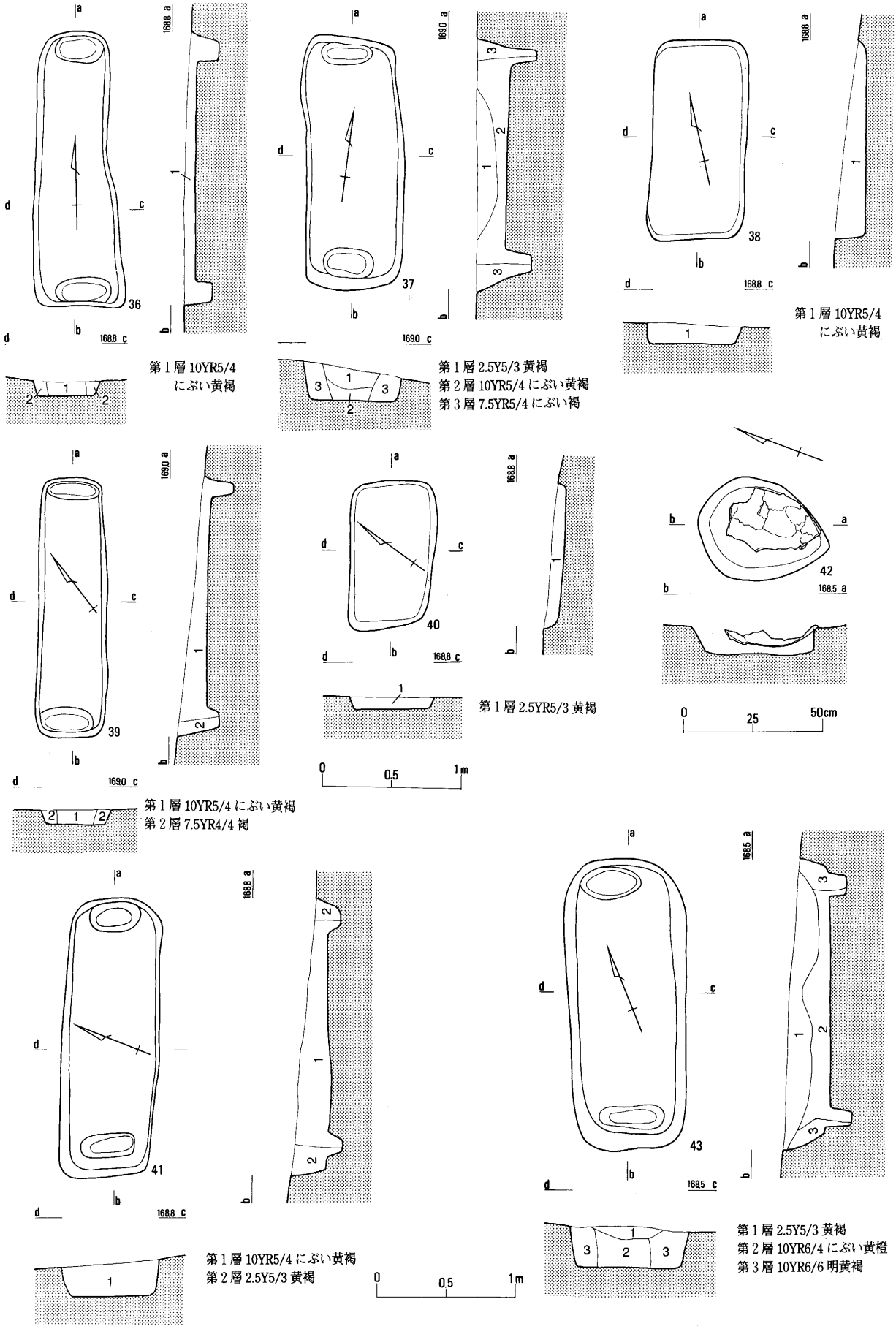
第86図　B-13・14・15・16・17・18・19号土壙墓



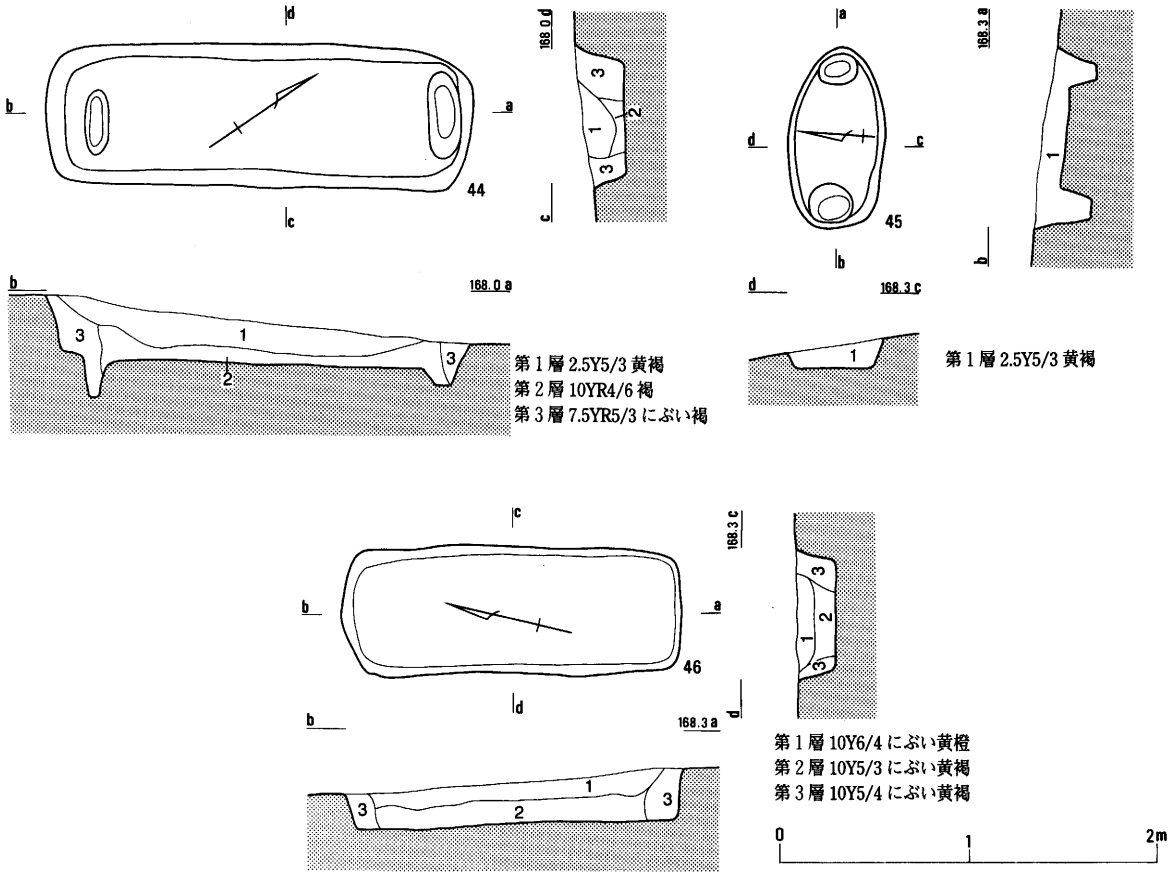
第87図　B-20・21・22・23・24・25・26・27・28号土壙墓



第88図　B-29・30・31・32・33・34・35号土壙墓



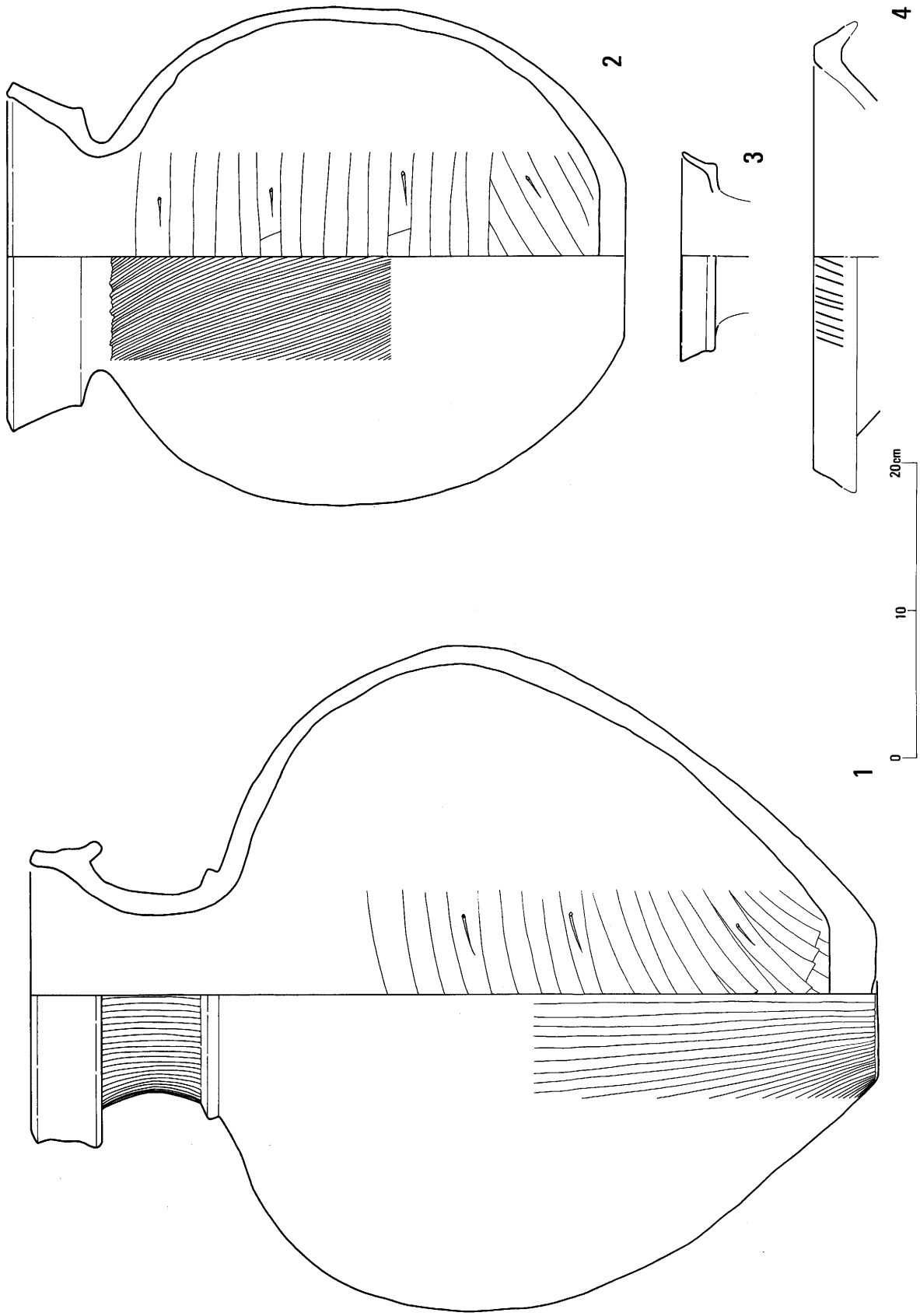
第89図　B-36・37・38・39・40・41・42・43号土壙墓（42は1：20）



第90図　B-44・45・46号土壙墓

第4表　B区土壙墓計測一覧表（第84～90図）　　単位 cm

番号	長さ	幅	深さ	備考	番号	長さ	幅	深さ	備考
1	124	60	20		24	86	61	25	
2	84	79	34	土器棺	25	104	50	35	
3	276	116	46		26	130	50	18	
4	226	112	60		27	96	38	28	
5	210	80	35		28	76	40	12	
6	100	78	10		29	244	90	55	
7	76	56	20		30	266	101	72	
8	126	58	35		31	202	64	16	
9	80	52	10		32	182	70	22	
10	250	140	60		33	118	66	19	
11	244	96	65		34	222	82	22	
12	75	66	40	土器棺	35	114	74	23	
13	258	114	65		36	200	60	8	
14	176	56	20		37	182	70	25	
15	246	122	40		38	144	68	23	
16	208	82	28		39	188	50	12	
17	62	58	7		40	106	60	10	
18	120	78	33		41	202	70	27	
19	230	106	50		42	50	32	10	土器棺
20	222	84	78		43	210	86	30	
21	148	68	27		44	226	76	30	
22	96	64	30		45	96	52	15	
23	116	60	27		46	180	68	27	



第91図　B-2・12・20・30号土壙墓出土遺物

B区土壙墓出土遺物（第91図）　　単位 cm

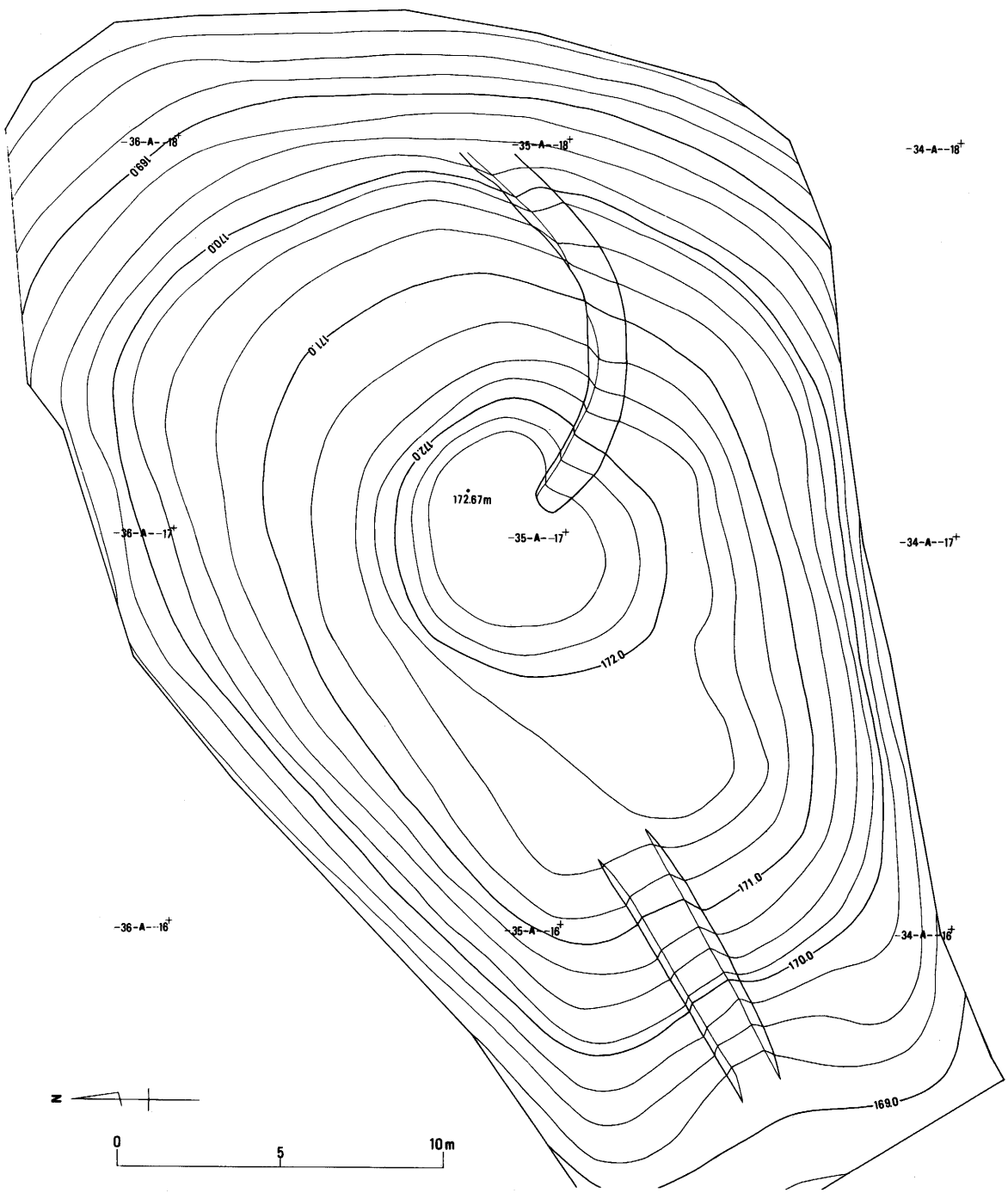
番号	器種	大きさ	形態手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壷	口径18.1 最大径44.8 器高57.2 底径10.7	頸部外面と胴部外面下半は篦磨きである。胴部内面は最大径の辺りまでは篦削りであるが、胴部の上端までは削っていない。	作りが粗く土器の形が歪である。砂粒を含む。焼成良好。にぶい黄橙10YR7/4。完形。	B-2号土壙出土。
2	壷	口径21.8 最大径33.4 器高41.7 底径11.0	胴部外面は篦磨きと思われる。内面は頸部近くまで篦削りしている。	砂粒を含む。焼成良好。明赤褐2.5YR5/6。完形。	B-12号土壙出土。
3	壷	口径13.9 現存高2.5	赤彩土器と思われる。	砂粒を含む。焼成良好。にぶい黄橙10YR7/4。口縁部20%現存。	B-20号土壙出土。
4	器台	口径28.4 現存高4.3	口縁部に篦による細い沈線の刻み目を入れている。	砂粒を含む。焼成良好。橙5YR6/6。口縁部10%現存。	B-30号土壙出土。

槙之木峪古墳

第Ⅳ章 槙之木峪古墳の遺構と遺物

1　槙之木峪古墳の立地

この古墳は葡萄田頭遺跡Ｂ区から北東に500㍍離れた丸山池を望む標高172㍍の丘陵上に位置する。『岡山県遺跡地図』第五分冊には登載されていないが、鏡野町教育委員会は町史編纂の目的で行った分布調査により当該地の古墳の所在を把握していた。このため津山総合流通センターの造成計画に従い平成７年10月27日に試掘調査を行い周溝を確認した。行政区画上は鏡野町に所属するが津山市の西端を流れる戸島川水系に属する古墳の可能性もある。なお、当古墳で用いるグリッドは葡萄田頭遺跡と共通である。-35-A--17は第Ⅴ系座標のＸ＝-101582、Ｙ＝-35022である。



第92図　槙之木峪古墳調査前墳丘測量図（1：200）

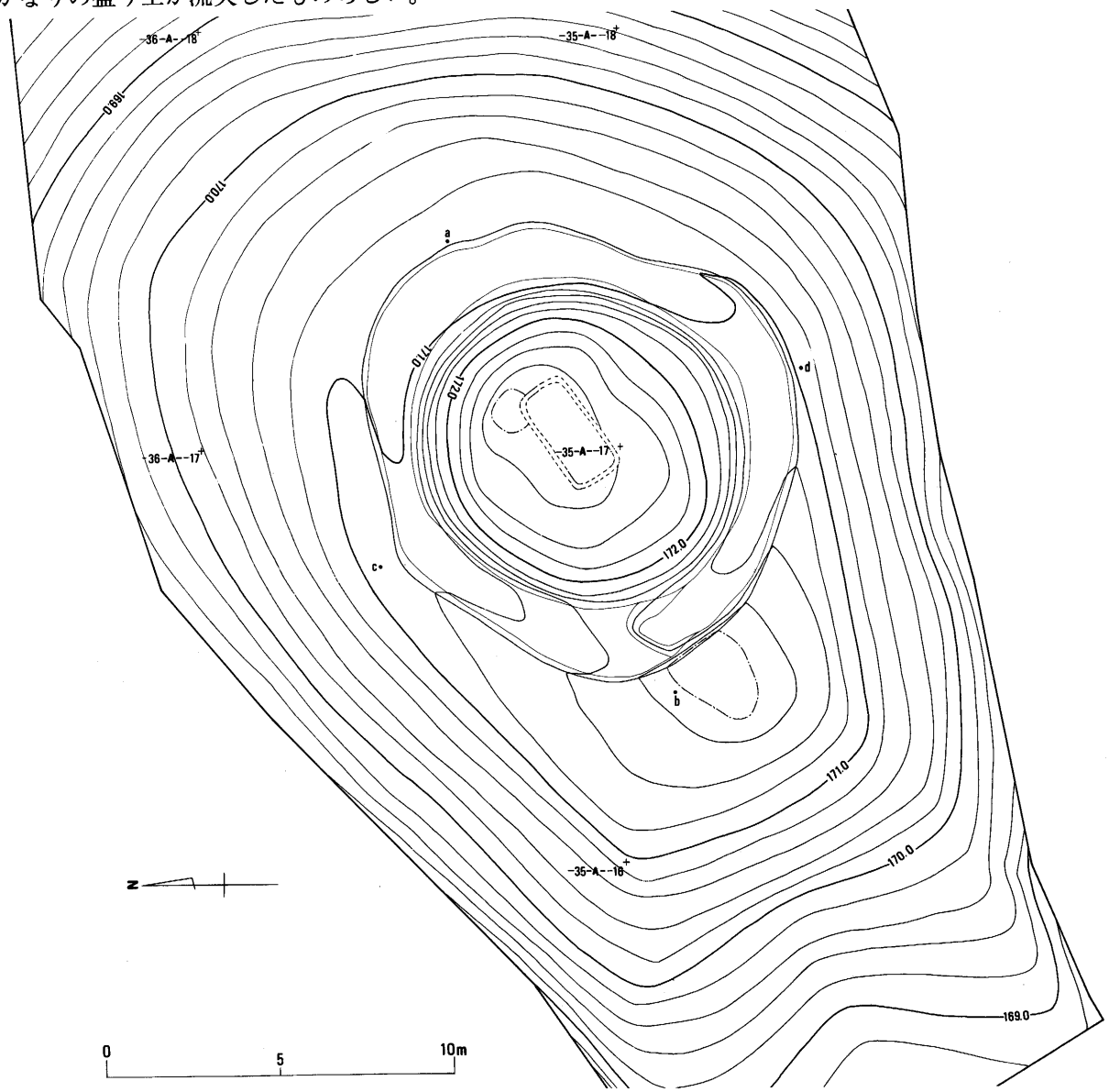
a 遺構と遺物

墳丘（第93図）

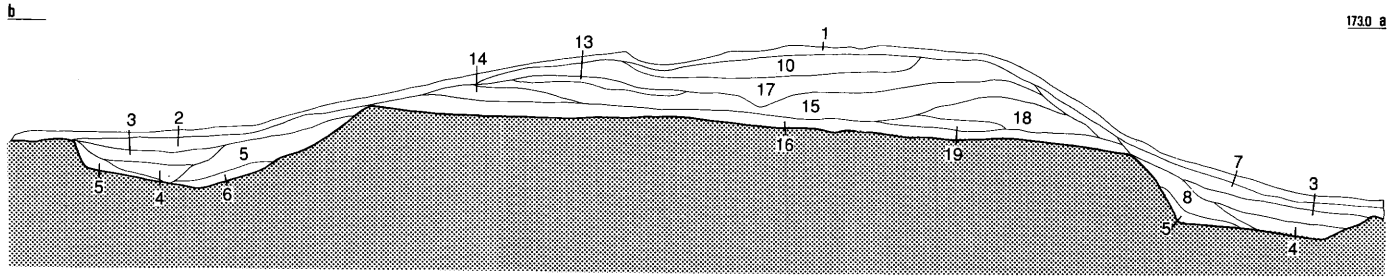
試掘調査時は現地の状況から造出付円墳の可能性も考えた。しかし、古墳西側の平坦部から周溝が検出されたために、横穴式石室導入以前の円墳ないしは方墳であることが判明した。更に、その後の調査で円墳であることが明らかになった。

墳丘の大きさは10.0㍍×9.5㍍のほぼ円形を呈し、周溝を含めた大きさは13.6㍍×12.5㍍である。高さは周溝底から160～190㌢、旧表土の黒色帯からの盛り土は最高で80㌢である。周溝の形状は墳丘の整った形に対して不整円形の感を呈している。周溝が円形に廻るため確かに円墳であるが、墳丘西側の平坦部と標高169㍍～171㍍の斜面部は削出しにより地山を成形した可能性が高い。

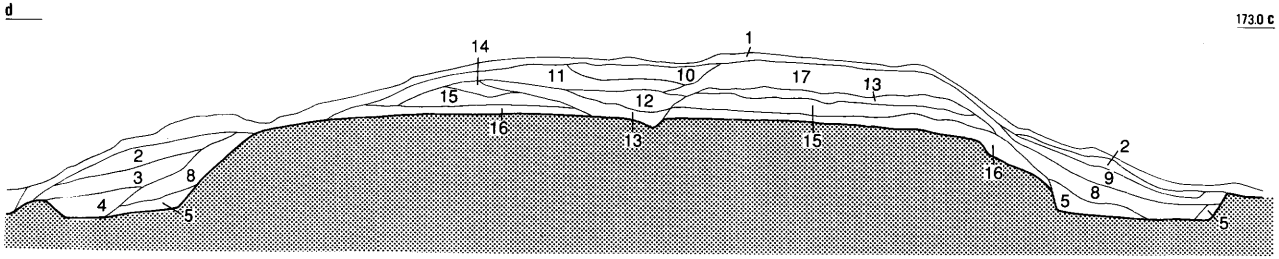
主体部の検出は困難を極めた。不運にも副葬品の須恵器が木の切り株の真下から検出され、主体部検出の懸命な努力は徒労に終わった。しかし、セクションベルトに残された断面の観察から、長さ3.1㍍、幅1.6㍍、深さ30㌢の墓壙の存在が推定され、埋葬の形式は木棺直葬と思われる。墓壙が浅いのでかなりの盛り土が流失したものらしい。



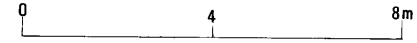
第93図　槙之木峪古墳墳丘測量図（1：200）



第1層 10YR3/3 暗褐（表土）
第2層 2.5Y5/4 黄褐
第3層 2.5Y3/1 黒褐
第4層 2.5Y2/1 黒
第5層 2.5Y3/3 暗オリーブ褐
第6層 2.5Y6/4 にぶい黄
第7層 2.5Y4/3 オリーブ褐
第8層 2.5Y4/2 暗灰黄
第9層 2.5Y3/2 黒褐



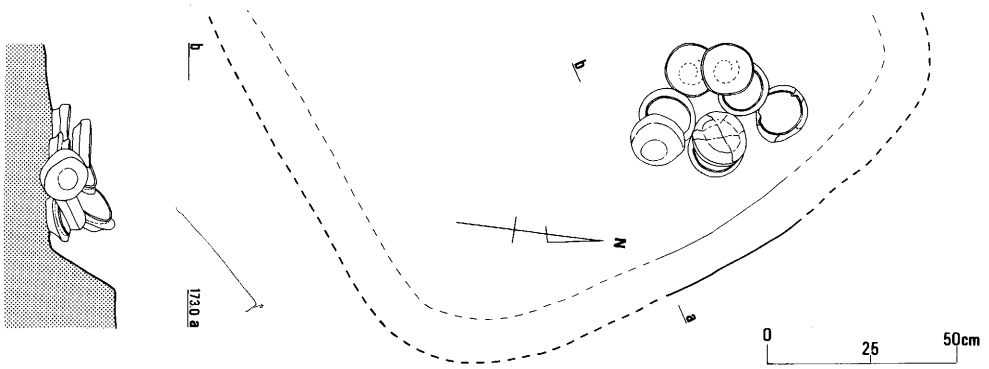
第10層 2.5Y4/4オリーブ褐（主体部覆土）
第11層 2.5Y5/6 黄褐
第12層 2.5Y5/3 黄褐
第13層 2.5Y5/3 黄褐（黒色土ブロックと砂岩を含む。）
第14層 2.5Y5/3 黄褐（黒色土粒子と砂岩を含む。）
第15層 2.5Y6/4 にぶい黄（砂岩を含む。）
第16層 10YR1.7/1 黒（旧表土）
第17層 2.5Y5/4 黄褐（砂岩を含む。）
第18層 2.5Y6/4 にぶい黄（黒色土粒子を含む。）
第19層 2.5Y7/6 明黄褐



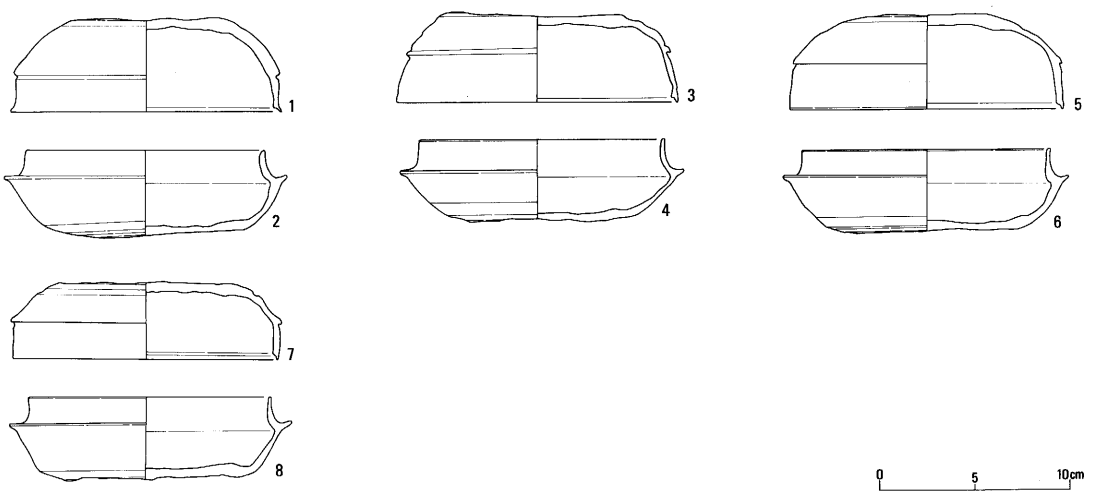
第94図　槙之木峪古墳墳丘土層断面図（1：80）

埋葬施設（第95図）

主体部の検出は残念ながらできなかったが副葬品の須恵器は発見された。副葬された須恵器の器種は坏蓋と坏身であり、実際に使用された組合わせは第96図の１と２、３と４、５と６、７と８である。これらの副葬品は墓壙の東壁に接して出土していることから棺外に置かれたものと思われる。



第95図　槙之木峪古墳遺物出土状況図（1：20）



第96図　槙之木峪古墳出土遺物

槙之木峪古墳出土遺物（第96図）　　単位 cm

番号	器種	大きさ	形態手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	坏蓋	口径14.1 器高4.9	篦削りは１回だけである。ロクロは時計回り。稜は鈍く退化。	長石・黒色粒を含む。焼成良好。灰5Y6/1。完形。	No.1
2	坏身	口径12.4 器高4.6	底部に削り残しがある。ロクロは時計回り。	長石・黒色粒を含む。焼成良好。灰5Y6/1。完形。	No.2
3	坏蓋	口径14.7 器高4.7	ロクロは時計回り。稜は小さい。作りは稚拙である。	長石・黒色粒を含む。焼成良好。灰白 HueN7/0。完形。	No.3
4	坏身	口径12.7 器高4.3	ロクロは時計回り。	長石・黒色粒を含む。焼成良好。灰HueN6/0。完形。	No.5
5	坏蓋	口径14.2 器高5.0	稜は小さく潰れている。ロクロは時計回り。	長石・黒色粒を含む。焼成良好。暗青灰 Hue5B4/1。完形。	No.4
6	坏身	口径12.9 器高4.4	ロクロは時計回り。	長石・黒色粒を含む。焼成良好。灰5Y6/1。30%現存。	No.6
7	坏蓋	口径14.0 器高4.1	稜は小さく潰れている。ロクロは時計回り。×の篦記号あり。	長石・黒色粒を含む。焼成良好。灰N6/0。完形。	No.7
8	坏身	口径12.8 器高4.8	ロクロは時計回り。	長石・黒色粒を含む。焼成良好。灰7.5Y6/1。完形。	No.8

第Ⅴ章　まとめ

葡萄田頭遺跡の集落変遷について

遺構から推察される葡萄田頭遺跡の集落の変遷は、第１号住居跡と第２号住居跡、第8-a 号住居跡と第8-b 号住居跡の重複関係から、弥生時代後期の円形住居跡と中期に属する住居跡の二時期にわたるものである。また、第8-a 号住居跡と第９号住居跡、第11号住居跡と第12-a 号住居跡の重複関係、第７号住居跡と第8-a 号住居跡の位置関係から、中期に造られた住居跡も二時期にわたることが分かる。これらの事実は葡萄田頭遺跡が三時期にわたり営まれた集落であることを示唆している。しかし、これらの住居跡が継続的に営まれたか否かについては出土土器の検討を行わなければならない。

葡萄田頭遺跡Ａ区で出土した土器のうち最も新しいものは、第２号小竪穴状遺構出土器台（第37図-２）であり、鋸歯文をもつことから鬼川市Ⅱ式土器の特徴を備えている。また、第8-b 号住居跡出土甕（第20図-3）と第５号段状遺構出土甕（第50図-１と２）は、高畑知功氏により備中Ⅴ-１様式に位置づけられる野田畝遺跡 No.68住居跡出土土器、塚の峰遺跡 No.5住居跡出土土器やⅤ-２様式とされる上東遺跡東鬼川市 P-3・P-10出土土器に類似例があり、鬼川市Ⅰ式ないしはⅡ式土器に併行することが分かる。これらは第２号小竪穴状遺構から出土した器台と同時期とすべき土器で、住居跡の形態を加味すれば第２号住居跡、第8-b 号住居跡が鬼川市Ⅱ式土器に併行する時期に営まれたものとできよう。

一方、最も古いと考えられるものは第５号住居跡出土土器である。第５号住居跡（第12図-１）出土の甕は西江遺跡安信丘陵出土土器に類似し、前山Ⅱ式（高橋編年のⅤ-a・b 期）に併行する土器である。第５号住居跡（第12図-５）出土高坏も同時期の所産として許されるであろう。そして出土土器を位置づけるもう一つの指針として、倉吉市上米積所在の後中尾（ウシロナカオ）遺跡を指標とする弥生時代中期後葉の後中尾式土器の影響を受けて成立した伯耆形の壷がある。行田裕美氏が西吉田Ⅲ式とした土器群の一部は間違いなく後中尾式土器の一部を含んでいる。葡萄田頭遺跡より出土した典型的な西吉田Ⅲ式土器には第５号住居跡出土の壷のほかに、第６号住居跡の蓋、第７号住居跡の壷、第10号住居跡の壷、第13号住居跡の高坏がある。

それでは、西吉田Ⅲ式から後期の土器への移行はどのようになされたのであろうか。当遺跡出土土器を検討した限りでは、筆者はA-5号土壙から出土した一括品を西吉田Ⅲ式土器の直後におきたい。A-5号土壙は覆土の堆積状況から人為的に埋められたものであることは明らかであり、出土土器は同時期に破棄された一括品である。これらの土器の特徴は県北山間部に所在する野田畝遺跡 No.14・15住居跡上層、No.90住居跡、No.92住居跡、柳瀬明彦氏が鬼川市０式とした上東遺跡亀川 P-151出土土器に類似している。これにより葡萄田頭遺跡出土土器が百間川中期Ⅲ→○→百間川後期Ⅱ、つまり前山Ⅱ式→鬼川市０式→○→鬼川市Ⅱ式の流れで変遷していることが確認できる。これは葡萄田頭遺跡が弥生時代中期後葉から終末まで営まれ、後期初頭に至り一時中断したことを表すものである。また、葡萄田頭遺跡のＡ区の集落とＢ区の土壙墓の関係は、Ｂ区出土土器棺がＡ区出土土器に比べ明らかに後出しており、一概にＡ区の集落に伴う土壙墓群とは断定できない。これは後期の集落が丘陵裾部分から布原段丘の深部、つまり現在の布原の集落が形成されている部分に営まれているためで、このために発掘された葡萄田頭遺跡の存続期間と齟齬をきたしたのだろう。

A-1号土壙と柵列について

15-b-0で検出され本文中に土壙として記載したものは古墳の周溝と考えられる。周溝中から須恵器が出土した例は、県北部では津山市瓜生原の小原第３・４号墳、久世町中原の中原第24・28・34号墳がある。これらの古墳を順を追って説明すると、中原古墳第24号墳は16.5×17.5㍍の大きさで70㌢ほどの盛り土による墳丘をもち埋葬施設に箱式石棺を用いた方墳である。須恵器は尾根に直交する周溝から出土した。第28号墳は８×8.5㍍の大きさで40㌢ほどの盛り土による墳丘をもち、埋葬施設と墳形は第24号墳と同じであるが、須恵器はＬ字状の周溝から検出された。第34墳は6.7×5.8㍍の大きさで盛り土の極めて薄い墳丘をもち埋葬施設と墳形は先の古墳と同様である。須恵器はコ字状に区画した周溝から検出された。これらの須恵器はいずれもON46型式に併行するものとされている。また、小原第３号墳も盛り土のない4.1×3.5㍍の方墳で埋葬施設に箱式石棺を用いTK47型式併行の須恵器を出土している。第４号墳は径4.2㍍の盛り土のない円墳で埋葬施設に箱式石棺を用い、須恵器は非常に新しくTK209型式に併行するものとされている。しかし、墳丘や周溝から出土する土器は必ずしも古墳築造期や埋葬時に伴うものではなく、小原第３・４号墳の存在が初期群集墳成立以降も弥生時代の墳丘墓の系統を引く古墳が造られていたことを物語るものではない。今のところ中村古墳群や小原古墳群の例は墳丘墓の系統をひく古墳の周溝から須恵器が出土する事実を伝えているにすぎない。しかし、この事実はA-1号土壙が古墳の周溝であったことを実証するに十分である。プラン確認時に周溝の確証を得られなかったのは残念だが、A-1号土壙は本来一辺が８㍍、墳丘の高さが50㌢内外の墳丘にほとんど盛り土のない方墳とできるだろう。また、出土遺物がTK208型式併行の須恵器であることもこのことを傍証するものである。遺物の出土地点は丘陵頂部から５～６㍍離れた所であるから周溝からの出土は間違いない。

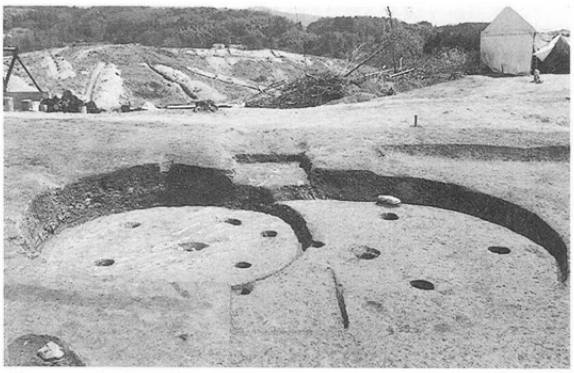
次に柵列の時期と性格について検討しなければならない。この遺構は遺跡で検出されたどの遺構よりも新しく、掘立柱建物のように柱穴の底の高さを揃えるような工夫はされていない。更に、その配列からある種の遺構が重複したものとすることもできない。然したる根拠はないのだが、筆者はこの遺構を後世の果樹栽培に関係したものではないかと思っている。今後の類似資料の増加を期待したい。

槙之木峪古墳について

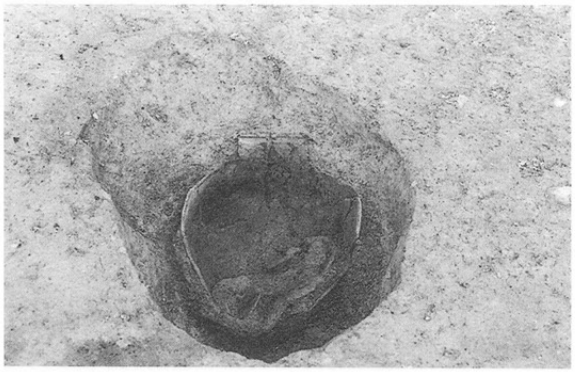
葡萄田頭遺跡とともに調査された槙之木峪古墳は横穴式石室導入以前の群集墳と埋葬施設を同じくする単独の小円墳である。出土須恵器はTK10型式に併行する。鏡野町では近年横穴式石室導入以前の円墳の存在が明らかになっている。香々美1144-1番地に所在する経塚古墳は瓦の原料とする粘土採取のために墳丘の四分の三が失われているが、わずかに残された墳丘から径18㍍・高さ2.2㍍の円墳と考えられている。この古墳の埋葬施設とおぼしき地点から須恵器直口壷、坏身各１点と鉄刀数振りが発見されたのである。出土に際して角礫等が出土したとの話はないことから木棺直葬と思われる。出土した須恵器はTK23型式に併行するもので初期群集墳との関係が今後の課題である。おそらく現在宅地や畑となっている所に初期群集墳が形成されていたのだろう。また槙之木峪古墳に近い時期に造営された古墳に、MT15型式ないしはTK10型式に併行する須恵器を出土した半峪８号墳と左衛門山古墳群がある。これらは槙之木峪古墳と異なり、いずれも初期群集墳を形成するものである。

最後に、本来ならば参考・引用文献を提示しなければならないところだが、紙数の都合で割愛したことをお詫びしたい。

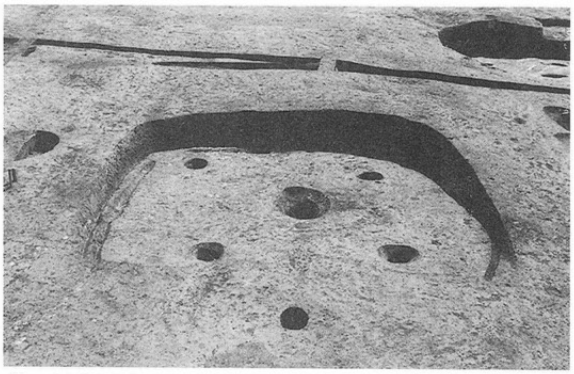
写 真 図 版



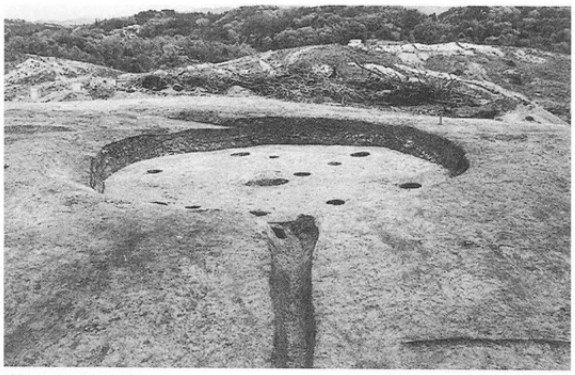
第 1 ・ 2 号住居跡



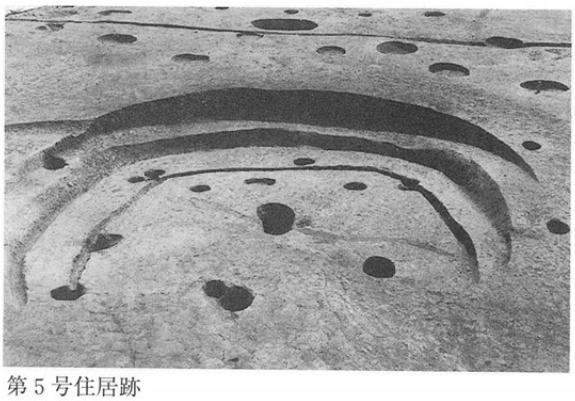
第 1 号住居跡中央ピット土器出土状態



第 3 号住居跡



第 4 号住居跡



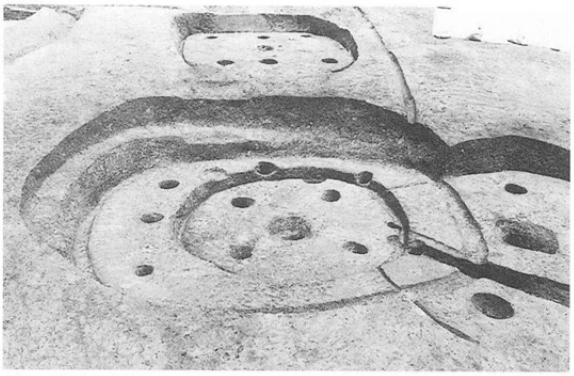
第 5 号住居跡

第 6 号住居跡

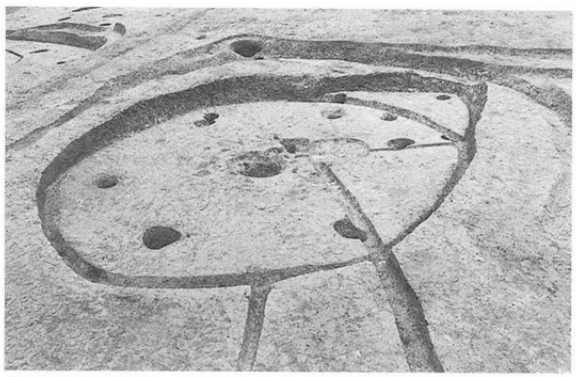
第 6 号住居跡鉄斧出土状態

第 7 号住居跡

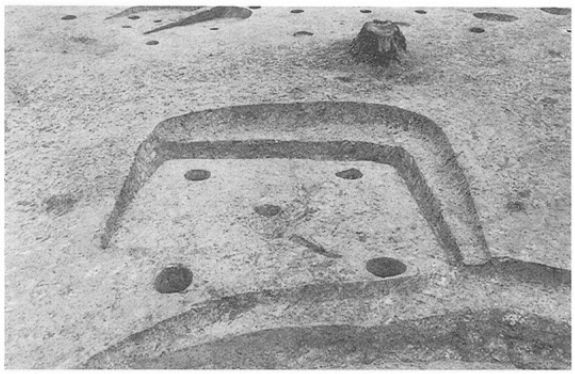
図版 2



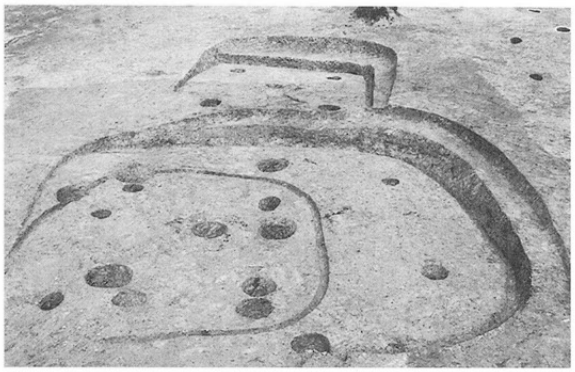
第 8 号住居跡



第10号住居跡

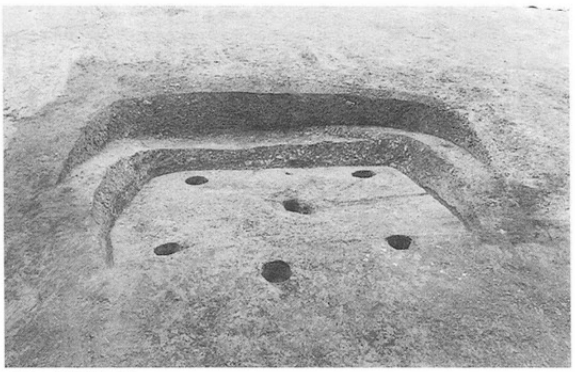


第11号住居跡



第11・12号住居跡

第13号住居跡

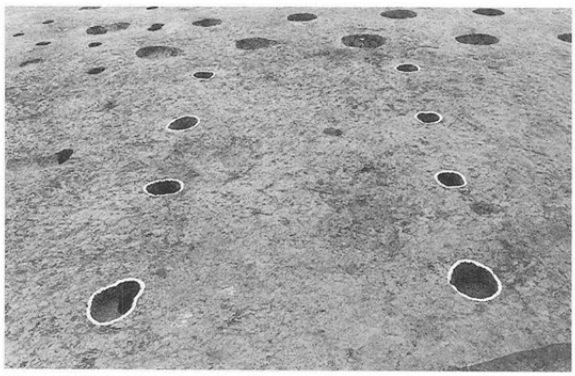


第14号住居跡

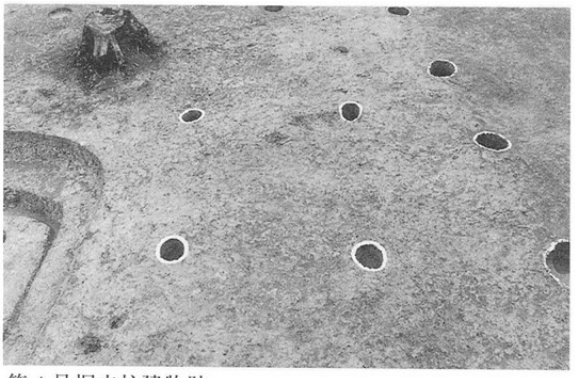
第 2 号小竪穴状遺構

第 3 号小竪穴状遺構

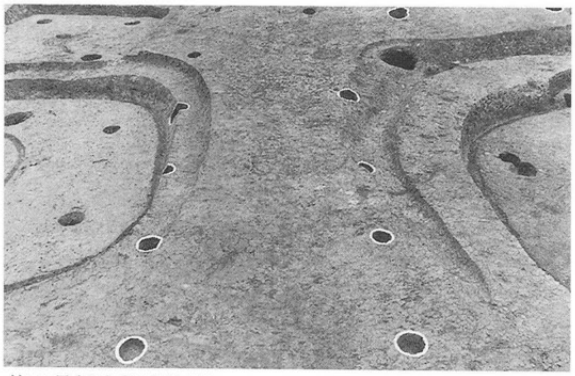
第 1 号掘立柱建物跡



第 3 号掘立柱建物跡



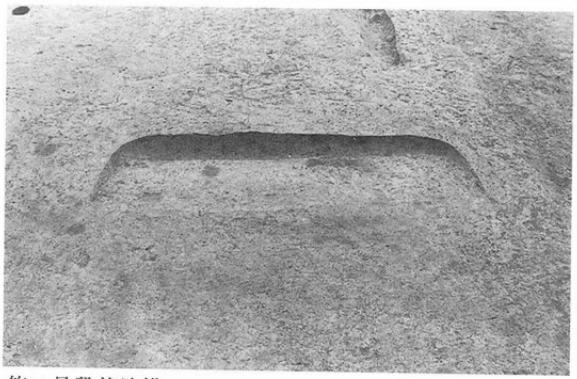
第 4 号掘立柱建物跡



第 5 号掘立柱建物跡

第 4 号段状遺構

第 5 号段状遺構



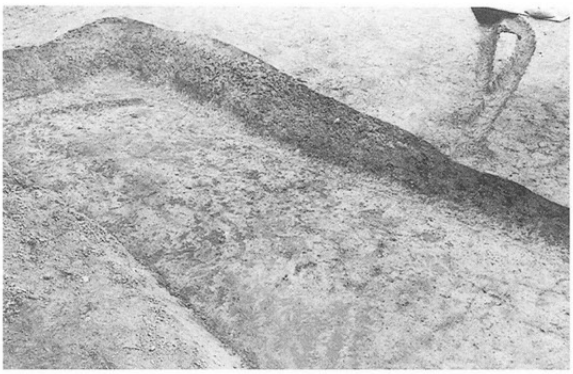
第 7 号段状遺構

第 8 号段状遺構

図版 4

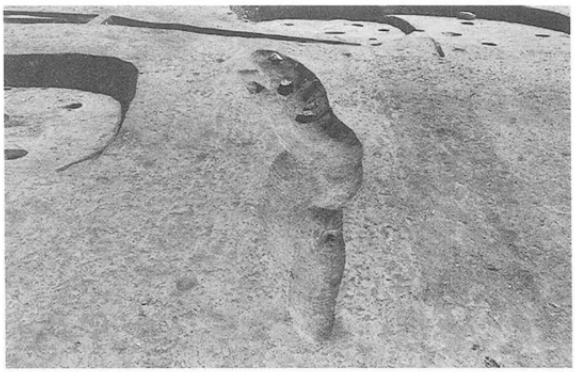
第10・11号段状遺構

第12・13号段状遺構

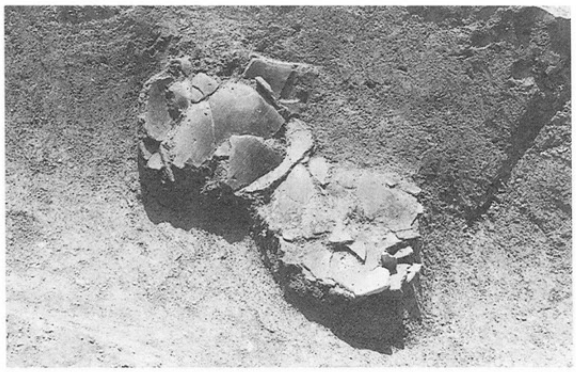


第14号段状遺構

第17号段状遺構石包丁出土状態



第１号溝

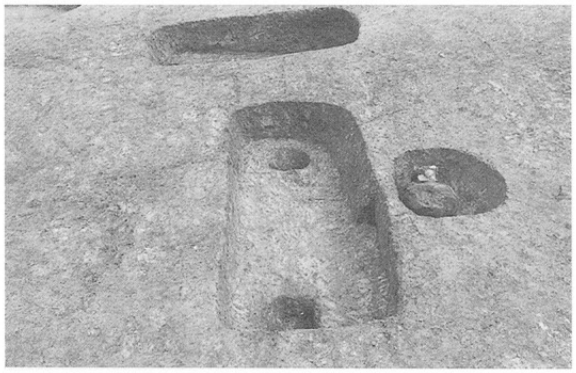


第１号溝遺物出土状態

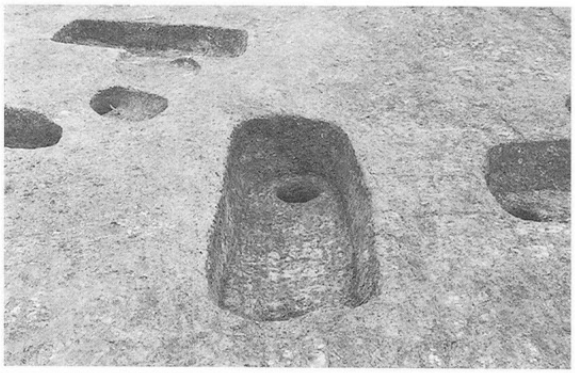
柵列（北から）

A-1号土壙遺物出土状態

A-5 号土壙遺物出土状態



B-2 ・ 3 号土壙墓

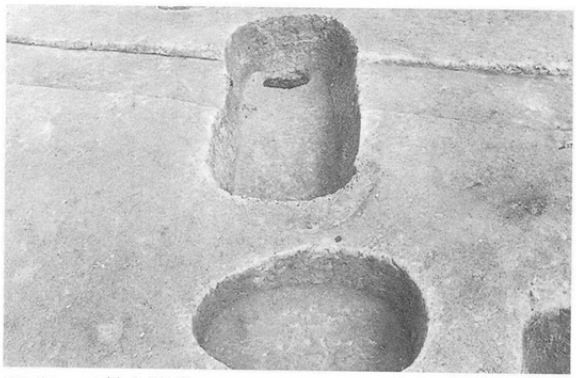


B-4 号土壙墓

B-10・12号土壙墓

B-12号土壙墓土器棺

B-13・14・15・16号土壙墓

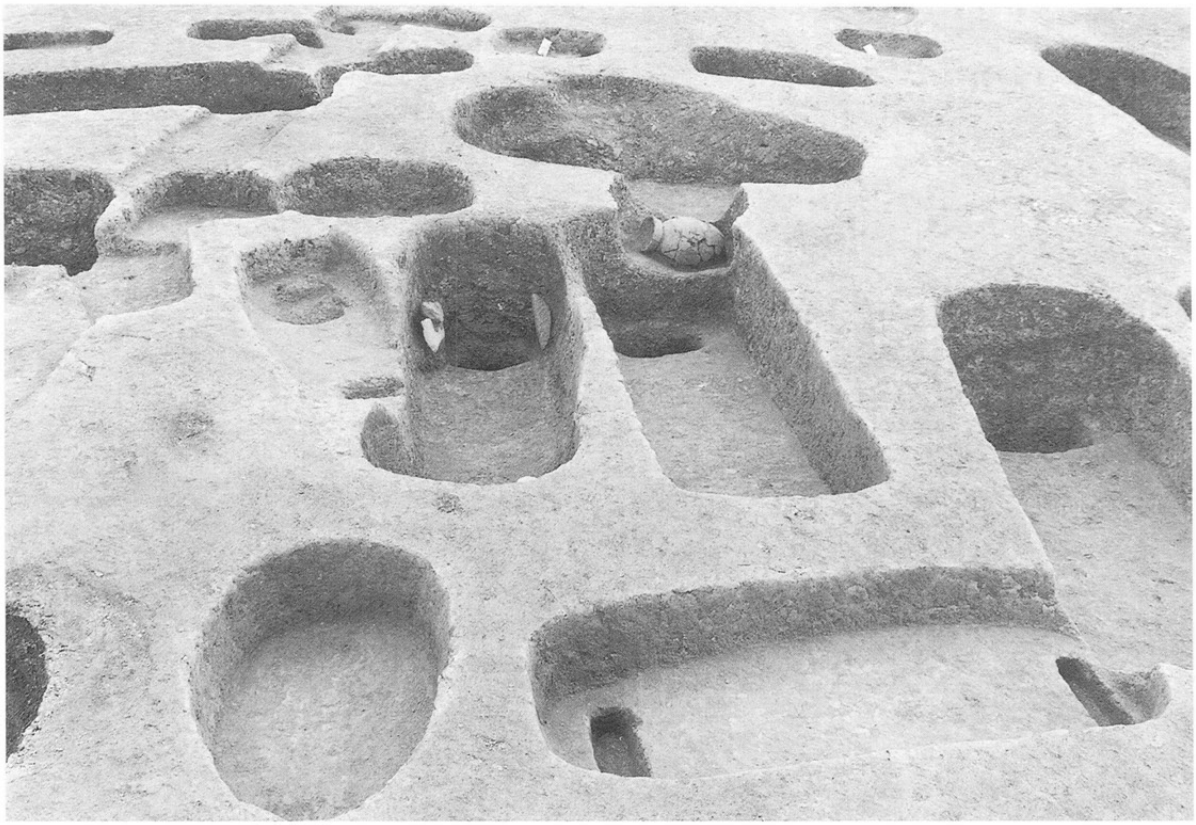


B-18・19号土壙墓

B-28・29号土壙墓

図版 6

柵列（南から）



B-11・16・18・20・21号土壙墓

槙之木峪古墳

槙之木峪古墳遺物出土状態

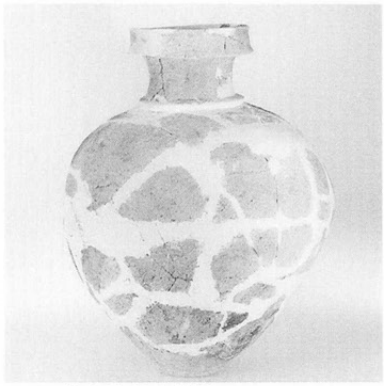
図版 8

第 5 号住居跡出土高坏

第 7 号住居跡出土注口土器

第 1 号溝出土甕

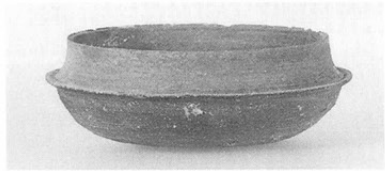
第 1 号溝出土甕

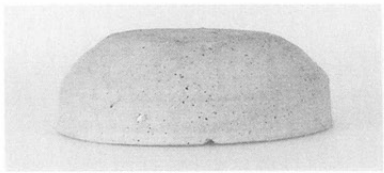

B-2 号土壙墓土器棺

B-12号土壙墓土器棺

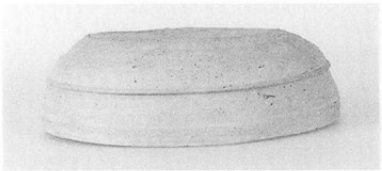
A-1 号土壙出土瓶

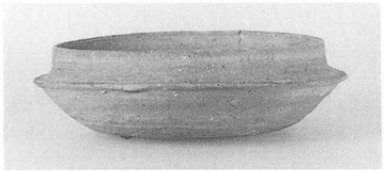
A-1 号土壙出土坏身

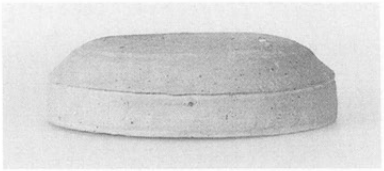

A-1 号土壙出土坏身

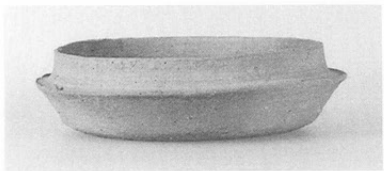

槙之木峪古墳出土坏蓋

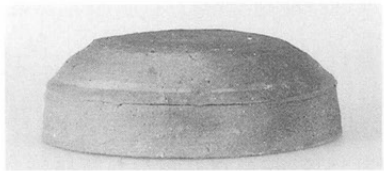
槙之木峪古墳出土坏身

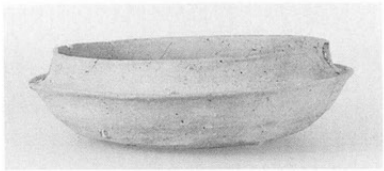

槙之木峪古墳出土坏蓋


槙之木峪古墳出土坏身


槙之木峪古墳出土坏蓋


槙之木峪古墳出土坏身

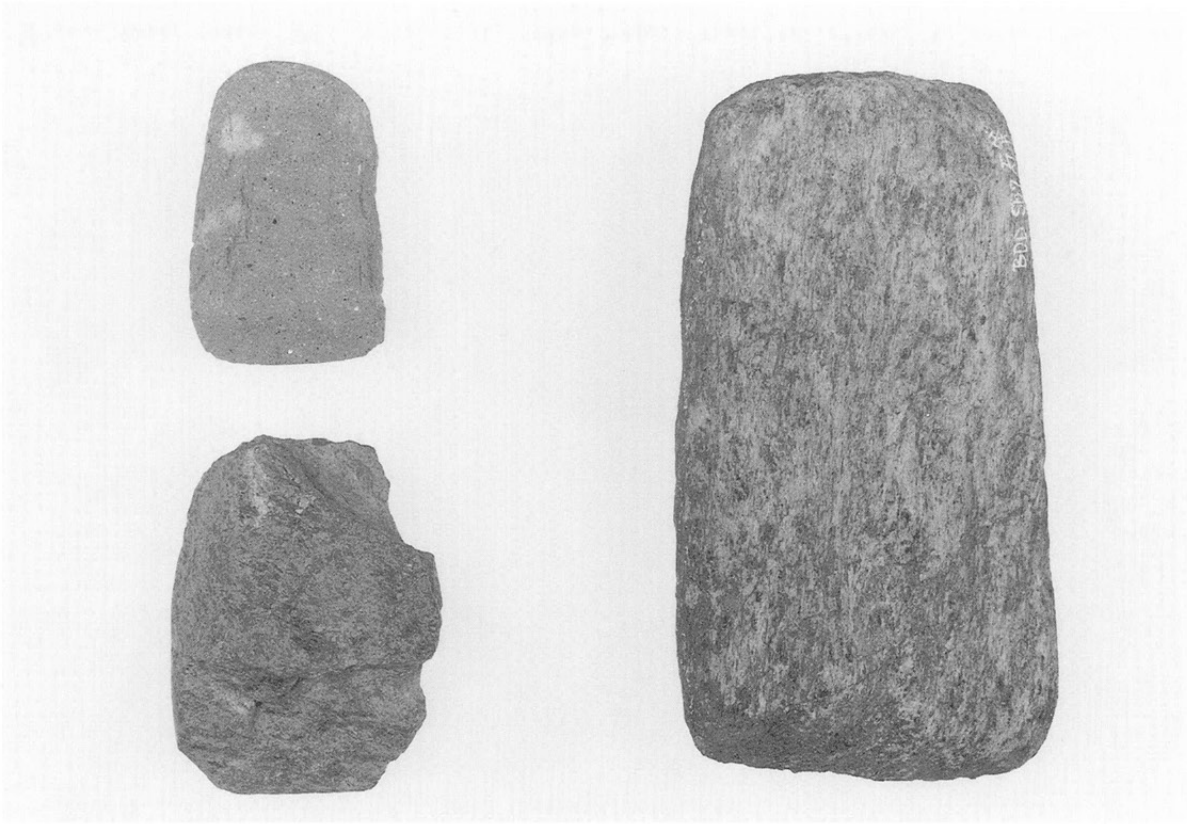

槙之木峪古墳出土坏蓋


槙之木峪古墳出土坏身

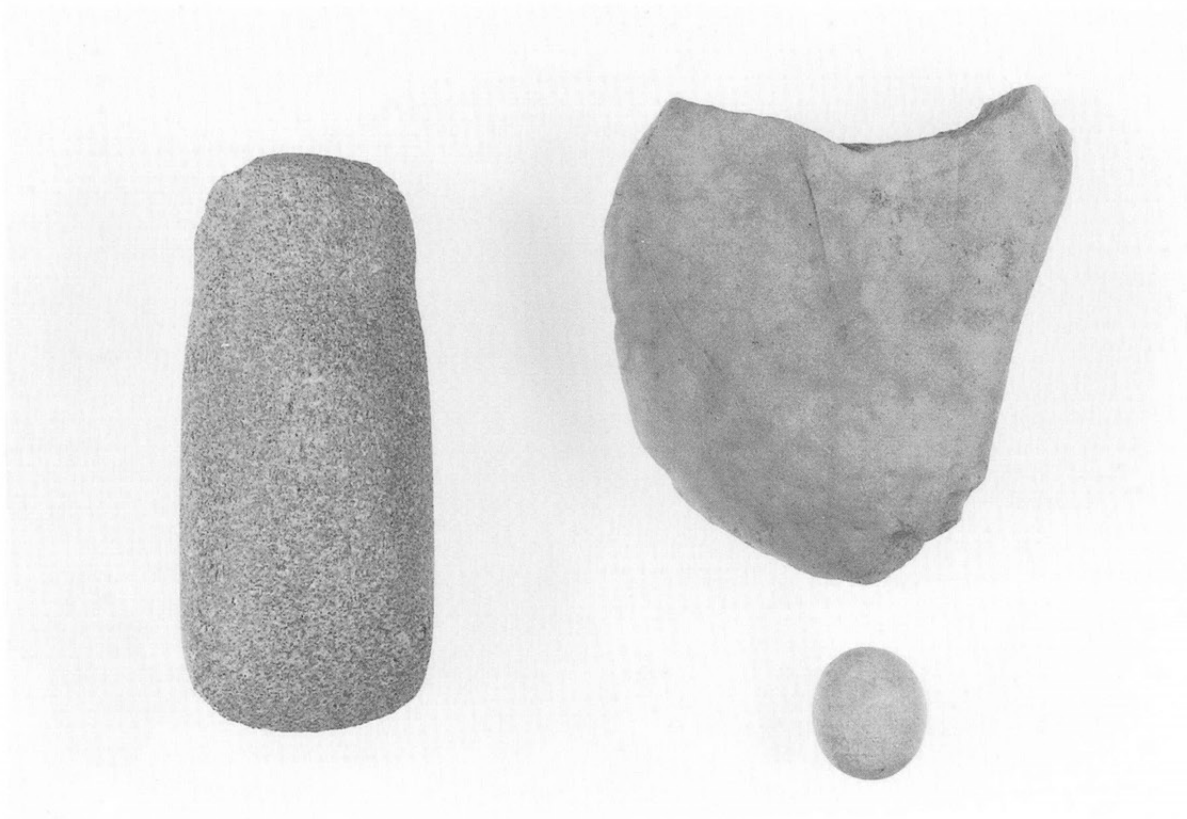
葡萄田頭遺跡出土石包丁

葡萄田頭遺跡出土石鏃

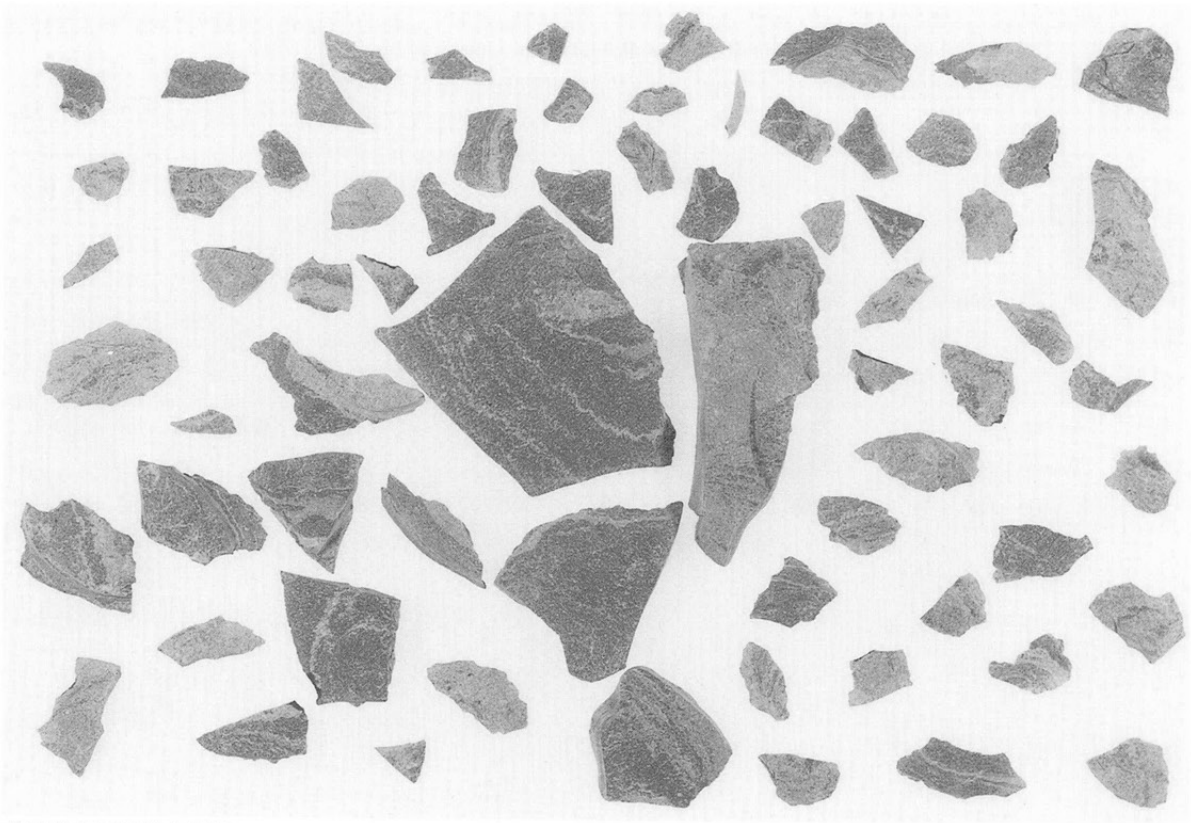
図版10



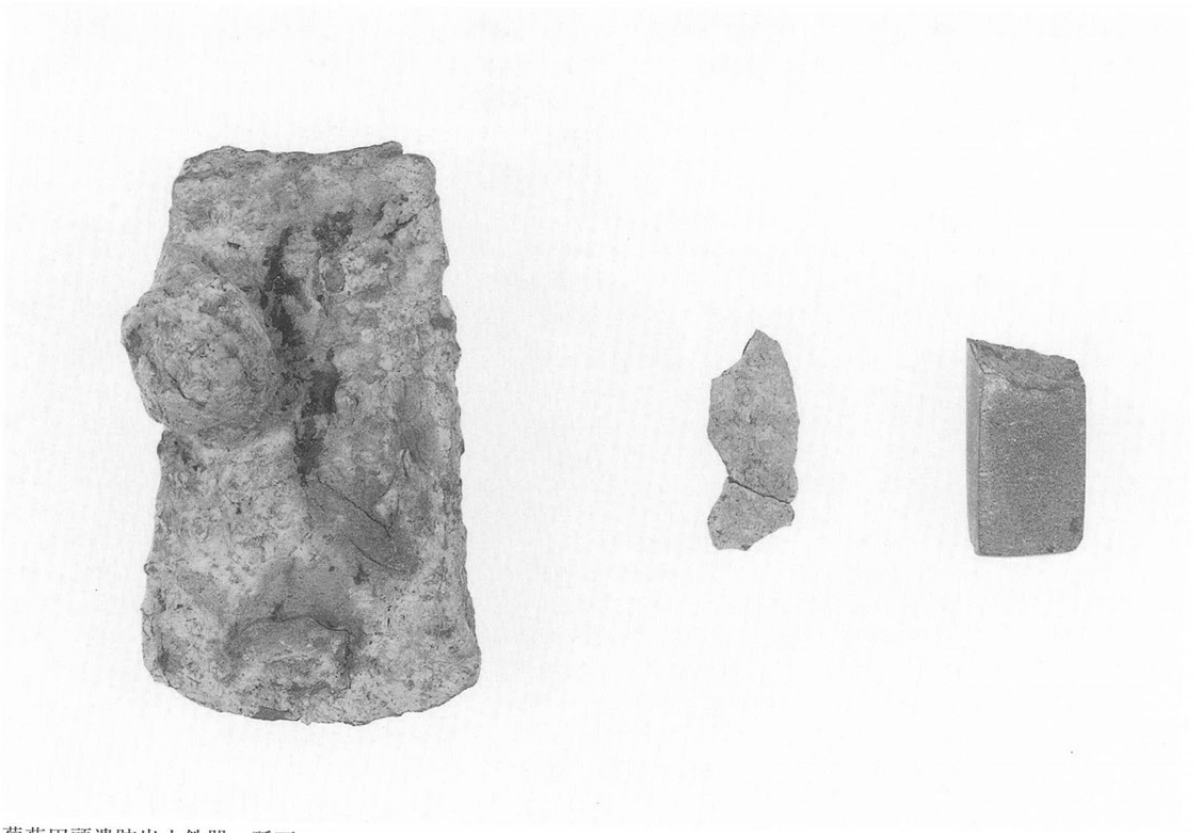
葡萄田頭遺跡出土石斧



葡萄田頭遺跡出土石斧・磨石



第 6 号住居跡出土石屑



葡萄田頭遺跡出土鉄器・砥石

報告書抄録

ふりがな	ぶどうだがしら　　まきのきざこ
書名	葡萄田　頭遺跡　槙之木峪古墳
副書名	津山総合流通センター造成に伴う発掘調査報告
巻次	1
シリーズ名	鏡野町埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	第4集
編著者名	立石盛詞
編集機関	鏡野町教育委員会
所在地	〒708-0324岡山県苫田郡鏡野町竹田660番地　Tel0868-54-0573
発行年月日	西暦1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
葡萄田頭遺跡	岡山県 苫田郡 鏡野町 布原48-1 番地	33606		35° 04′ 45″	133° 56′ 48″	1996 0111 ～ 1996 1031	9100	津山総合流通センター造成に伴う発掘調査
槙之木峪古墳	鏡野町沖 392番地			35° 05′ 01″	133° 56′ 57″	1996 1101 ～ 1996 1226	700	同上

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
葡萄田頭遺跡	集落	弥生時代	竪穴式住居14 竪穴状遺構3 建物5 段状遺構17 溝7 土壙16	弥生土器 石鏃 石包丁 磨石 板状鉄斧	
	墓		土壙墓46	弥生土器	
		古墳時代	土壙1	須恵器坏身 須恵器鼈	古墳周溝の一部と思われる
槙之木峪古墳	古墳	古墳時代	円墳1 木棺	須恵器坏蓋 須恵器坏身	

鏡野町埋蔵文化財発掘調査報告第４集

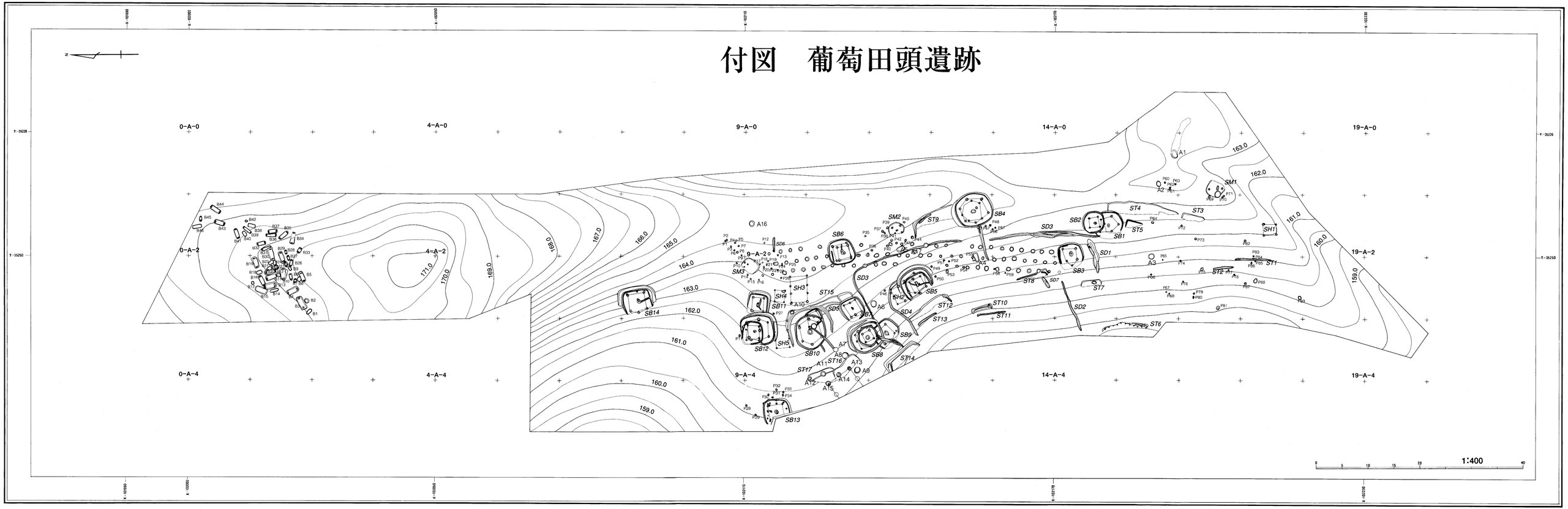
葡萄田頭遺跡
槙之木峪古墳

津山総合流通センター造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

１９９９年３月３１日発行

発　行　岡山県苫田郡鏡野町教育委員会
　　岡山県苫田郡鏡野町竹田６６０番地
印　刷　株式会社　ぎょうせい

付図　葡萄田頭遺跡



0-A-0
4-A-0
9-A-0
14-A-0
19-A-0
0-A-2
4-A-2
9-A-2
19-A-2
0-A-4
4-A-4
9-A-4
14-A-4
19-A-4
1:400